
彩文玲は勇者で魔王！

西城優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彩文玲は勇者で魔王！

【Nコード】

N3598X

【作者名】

西城優

【あらすじ】

今まで普通に生活していた俺は、ある日突然勇者と魔王の二つの地位を継ぐ事に。二つの地位を継いだ俺は、勇者側と魔王側の両方を敵に回す事になりそうで——俺の生活はどうなっちまうんだ！？

始まり

この世にいる人間の中で、一体何人の人間が勇者や魔王の存在を信じるだろうか？

ちなみに俺は信じる方だ。いや、実際には信じたくないのだが。高校一年生にもなって、勇者や魔王がいるなどと豪語していたら、周りからの視線が痛いだろ？ だけど、真実を知ってしまったら否定のしようがない。

俺ら一般人が認知する勇者や魔王と言えば、勇者が剣を手に持ち、国やさらわれた姫の為に奮闘する善人なイメージ。対して魔王は人々を様々な方法で苦しめ、稲妻走る黒雲の下、不気味だが豪華な城の最上階でこれまた豪華でデカイ椅子に座っているイメージだったりする。で、最終的にはその勇者と魔王が戦って、大体勇者が勝利して、世界に平和をもたらす。

……勇者や魔王が存在するのなら、ゲームとかと同じ様な人生を歩んでいるのだろうか。多分違うと思う。

少なくとも、俺の身近にいる勇者と魔王はとても仲が良さそうだ。そんな風に考え事をしていたら授業終了のチャイムが鳴った。周りの生徒達がざわざわと話し始め、シャープペンやノートを机の中に仕舞い始める。

先生が号令を終えると、何人かの生徒が一斉に走り出した。恐らく購買でお目当ての食べ物を買ったのだろう。

そんなわけで今から昼休み。幸い友達がいらないというわけでもない俺は自分の席を立ち、廊下へ出て隣のクラスに足を踏み入れる。入ってすぐの席には、既に俺の友人二名が席をくつつけて弁当をスタンバイしていた。

「おっす玲！ 早速だけど今の近況を一言！」

「いや、意味分からねえし」

いきなり俺の近況を訊ねてきた男子生徒、明智海斗は俺の分の席も机にくつつけてくれた。

「今日はいつもより多めにお弁当作ってきたからたくさん食べてね、二人共」

俺が座席に着くと、もう一人の友人である空宮すずはがくつつけた三つの座席の真ん中に二つほど弁当箱を設置する。

すずははいつも俺らにこうして弁当を作ってきてくれる。育ち盛りの俺としては、家の弁当だけでは物足りないのととてもありがたい。ただ、

「いつも弁当作ってきてくれるのは嬉しいんだけどさ、毎朝大変なんじゃないか？」

俺はいつも母さんに弁当を作ってもらっているから朝はゆっくり寝ていられるが、すずはの場合はそうもいかないだろう。毎朝苦労を掛けていると思うと、何だか悪い気がしてならない。

「いいんだよ。二人においしいって言うてもらえるのが嬉しいから私が勝手に作ってきてるだけだもん」

「……そっか。いつもありがとな」
すると、なぜかすずははほとんど顔を赤くしていく。終いには顔を俯かせてしまった。具合でも悪いのか？

「さて、そんなありがたい弁当を食べさせてもらおうぜ！」

こちらはもう清々しいほどに遠慮がない。まあ、せっかく作ってもらったんだから俺も当然食べる。

箸を伸ばし、すずはの可愛い弁当箱から卵焼きを取る。口へ放って咀嚼すると、ふんわりとした甘味が口の中で広がった。

「美味しいな、すずはの料理は。将来はきつといいお嫁さんになるよ」
「はわ、はわわわわわ！ こ、光荣です！ ……わ、私は出来れば、玲君のお嫁さんがいいな。な、なんちゃって」

光荣ですまでは聞こえたが、その後の言葉は小声で、教室に走りこんできた生徒達の足音でかき消された。購買組みが帰ってきたんだな。

「……青春だねえ」

ジジ臭い事を言いながら、なぜかジト目で俺を見つめてくる海斗。どうかしたか？

俺と海斗で箸を動かしていると、あっという間にすずはの作ってきてくれた弁当箱は空になった。ご馳走様。

「さて、弁当も食い終わった事だし、恒例のトランプでも始めますか！」

「いや、恒例とか言ってるけど、今日初めてだぞ。お前らとトランプやるの」

いつもは大体話しているだけで昼休みが終わるからな。

「細かい事は気にすんな！ 何かやりたいゲームはないか？」
「うーんと、ババ抜きとか？」

すずはがとてもポピュラーなトランプゲームを提示してくれた。これなら誰でもやり方を知っているし、すぐに始められるな。

「ほほう、ババ抜きとな。またベタなゲームを提示したもんだ。…だがそれがいい！」

海斗のテンションが高いのはいつもの事だ。放っておくと一人で漫才を始めそうなテンションだと最初会った時は思ったよ。

ケースからランプを取り出し、海斗が机の上にカードを配っていく。三人だから手札の枚数が結構多い。

揃っていたカードをどんどん出していくと、手に持っているカードの数は七枚になっていた。二人も大体それぐらいの数になっている。

俺から順番にカードを引き始め、ババ抜きが始まった。あ、一巡目は揃わなかったか。

「そっぴゃ転校生が入ったクラスって玲の所だっけ？」

すずはからカードを引きながら、海斗は俺に質問を投げ掛けてきた。

「ああ、そうだけど、それがどうかしたか？」

「いや、どうかしたかじゃないだろ。転校生は確か美人でしかもハーフだったよな。そんな可愛い子がクラスにいるんだから、何かあったりするのかわかってよ」

「……いや、別にこれといって何も無いけど」

確かに内のクラスに入ってきた転校生、金城イリヤはとてつもない美人だ。肌は陶器のように白く、髪は眩く輝く金色。瞳は綺麗な空色で、目の中に空があるんじゃないかと思ったぐらいだ。

ただどあくまでそれだけ。俺がそんな美人と関わるようなきつかけなんてありはいしないし、俺もさして気にしていない。

「つまんねえなあ。俺なら絶対に初日で話しかけてるぜ」

「お前はつくづく女が好きなんだな」

「当たり前だろ！ 男なのに女が好きじゃなかったら不健全だ！
つつか、そんなスタンスじゃいつまでたっても彼女が出来ないぞ」

彼女が出来ないのは余計だつつうの。

しかし、堂々とストレートに女が好きだと言われると感心してしまふ。正直な事は良い事だ。

あと、なぜかすずはが俺の事をじっと見ている。あ、もしかして俺の番だったか？

再び海斗からカードを取ると、今度はペアが揃った。あと五枚だな。

「そう言う割に海斗も女と付き合っていないよな？ どうしてだ？」

「……彼女が簡単に出来るような奴はきつとりア充の素質がある奴ぐらいだ。そんなリア充は爆発した方がいい！」

うお、いきなり爆発しろ宣言。彼女と歩いていたリア充少年が突然道で爆ぜる映像が頭の中で浮かんた。

「すずはは彼氏いそうだよな」

「えっ？」

いきなり話題を振られたからかきょんとした表情だ。そしてあわわと手と首を横に振り始める。セミロングの髪も一緒に揺れる。

「わ、私は彼氏なんていないよ。……ただ、気になる人ならいるよ」
「すずはが付き合っていないのは意外だな。その気になる人に心当たりはないけど、そいつはとても幸せな奴だな」

「そ、そうかな？ 私なんか好きになったりして、迷惑だったり

しないのかな？」

「好きになってもらって迷惑だなんて事はないだろう。それに、すずはもっと自分に自信を持ってもいいと思うぜ？」

人に優しく、料理も美味くて、中々に容姿もいい。悲観するよ
うな所なんて一切ないじゃないか。すずはに好かれているそいつが
少し羨ましいくらいだ。

「あ、ありがとう。玲君」

そう言つと、またまたすずは顔を赤くして俯いた。隣の海斗は
なぜか「だああああ！ 俺の前で青春してんじゃねええええ！」
とか言つて騒いでるし、傍からすれば結構可笑しな光景なんじゃな
いか？

「つと、そういえばお前らのクラスは次の時間体育だよな。そろそ
ろ俺は教室に戻るわ」

弁当を手に持ち、椅子を下げて俺は席から立ち上がる。

「おう、じゃあまたな」

「玲君も授業頑張つてね」

二人の声を聞きながら、俺は海斗達のクラス、一年三組を後にす
る。

（……まだ少し時間があるし、どっかで時間でも潰すかな）

授業開始まで十五分程時間がある。次の授業は現代文だからクラ
スを移動する事もない。

自分の教室、一年四組に入って弁当箱を席に置いて、俺は再び廊下に出る。廊下には友達同士でグループを作って話をしている女子や男子が出ていて中々に賑やかだ。そんな賑やかな廊下を進んで階段を登る。

何となく俺が向かった先は図書室だった。

桜華高校の図書室はとにかく大きい。本のは数は五万冊を越えているらしいし、生徒達が落ち着いて勉強する為のスペースも広い。

ただ、俺がこの図書室を訪れたのは入学して三ヶ月間の内二回。今回が晴れて三回目になる。

あまり図書室を利用しないのは、単純に俺があまり本を読んだりしない人種で、勉強にも力を注ごうとしないからだ。五教科の勉強は社会に出た時にあまり役に立たないだろうからな。

図書室の中には生徒の姿が見受けられない。司書さんの姿もなく、辺りは静まり返っている。それこそ、俺の足音が周りに反響する程だ。

「……………ん？」

誰かいないかと広い図書室の中を歩き回っていると、一名の生徒の姿を見つけた。

先程まで海斗との話に出てきた金城イリヤだ。やたらと分厚い本を手に取り、高い本棚の前で立ち読みをしている。

（そつえばあいつ、誰かと仲良くしているようなところをあまり見ないな）

いや、別に避けられているというわけではない。寧ろクラスの生徒達からはしょっちゅう話しかけられている。けど、そいつらと話す時の金城は、何だかあまり楽しそうではない。一緒にいるのと仲良くしているのは全然違うからな。ちょっと観察してればその違いが

よく分かる。

転校生に興味心身じゃないかって？ 違う違う。あくまで転校生というのに興味があるだけで、金城自体に興味があるわけじゃ……
苦しいな、この言い訳。

その場に立ち尽くしてそんな事を考えていると、本から視線を外した金城と目が合った。

「……………」

「……………」

気まずい。

話した事もない転校生と図書室で二人きり。ただでさえ静かな空間なのに、この沈黙はきついな。

目を背けて図書室から飛び出して行ってしまうというのもありだが、同じクラスだからどうせ顔を合わせる。その時また気まずい思いをするのは御免被る。

「なあ、何の本を読んでるんだ？」

沈黙に耐えかねた俺が声を発する。静かな空間に俺の声が響く。

金城は手にした分厚い本をポンと閉じて棚に戻し、俺の方へと歩いてくる。

「あなたには関係ない」

質問を一蹴して金城は俺の横を通り過ぎていく。去っていく時の横顔はいつも通りどこかつまらなさそうな表情を浮べていた。

「……………無愛想だなあ」

クラスであの無愛想な感じがいいと言っていた奴が何名かいたのを思い出す。俺は愛想が良い方が好きだけどな。金城が愛想良かったら、きつと今以上にモテるだろうに。

そんな無愛想女がどんな本を読んでいたかが気になり、俺は先程金城がいた本棚の前へと足を進める。そこにある分厚い本を手にとつて、表紙のタイトルを確認した。

「悪魔・使い魔全集？」

パラパラ捲つて見ると、タイトル通り悪魔や使い魔の事について記述されている本だった。金城はこういうものが好きなのかな？

悪魔・使い魔全集を棚に戻すと五限目の予鈴が図書室内に響き渡る。

「おつと、そろそろ戻らないと」

現代文の先生は遅刻に厳しい人だからな。チャイムが鳴る前に着席しておかないと減点されてしまう。

早足で本棚から離れ、俺は図書室の入口へと向かう。先生に注意されない程度の速度で廊下を走って教室へと向かった。

授業が終わつて放課後、部活動に所属していない俺は直接家へと帰宅する事になる。寄り道をするという選択肢もあるが、どちらかと言えば田舎なこの地区にはゲーセンやショッピングモールみたいな施設はない。

道の左右に埋められた木々を見ながら、学校前の坂を下る。帰りは楽だが、来る時は足腰に優しくない。まあ、それでも家から近いから良しとしているんだけど。

俺の家は学校から十五分くらい歩いた所にある一軒家だ。これと
いった特徴も無いありふれた我が家。生まれた時からずっとあの家
に住んでいるから、目を瞑っていても家の中を歩き回れる自信があ
る。まあ、実際にはそんな事をしようとは思わないけど。

我が家の解説をしている内に、俺はもう家の傍にまで来ていた。
途端に先程までの高揚感は消え、陰鬱な気分が心の底から湧き出
てくる。普通なら自分の家に帰ってきてきて陰鬱な気分にはならないん
だろうけど、俺にも色々わけがあつてさ。

「ただいま」

挨拶を済ませて靴を脱ぎ、俺は洗面所へと向かう。手洗いうがい
を済ませて、次に向かった先は我が家のリビングだ。

「おう、おかえり」

「玲、おかえりなさい」

そこで俺を向かえたのはもちろん俺の両親だった。
スーツの似合いそうな体格をしていて頼りになりそうな父さんと、
見た目二十代という若々しい母さん。

——そんな印象を抱いていた時期が俺にもあった。しかし、その
姿を見たらもう誰も『普通』と言う言葉を使えない筈だ。

父さんは銀の鎧に身を包み、脇には剣を携えている。母さんは黒
いドレスに身を包み、普段二十代に見える見た目が更に若く見える。
今日からの俺は、知らされた現実を受け入れて生きていかなければ
ならない。

俺の両親、実は勇者と魔王なんです。

自分が勇者で魔王と知らされた日

時間は一日前に遡る。

食事が終わり、自室で本を読んでいると、俺の部屋の扉がコンコンと叩かれた。続いて扉が開かれ、入ってきたのは息子のひいき目でなかったとしてもかなり若く見える母さんだった。

「玲、大事な話があるんだけど、リビングに来てくれない？」

よっぽど大事な話なのか、母さんの顔は真剣そのものだ。いつもおっとりしていて笑顔を絶やさない人なのに。

「あ、ああ、分かったよ」

本を机の上に置いて、俺と母さんは部屋を後にする。階段を降りてリビングに繋がる扉を開くと、ソファに腰掛けた父さんの姿が目に入った。

「剣君、玲を連れてきたわよ」

「ありがとう。玲、そこに座ってくれ」

父さんは向かいにあるソファを指差して、俺に座るよう指示する。反抗期でもない俺は、大人しくその指示に従ってソファに背中を預けた。

母さんは父さんの隣に腰掛ける。座る際に、長く伸びた黒髪がさりと揺れる。

なんだろう。とても雰囲気重いんだけど。

「……玲、お前は明日で晴れて十六歳になる。一日早い誕生日お

めでとう」

「あ、うん、ありがとう」

父さんが渋い顔をしながら祝いの言葉を述べてきた。

こんな重苦しい雰囲気の中祝われてもあまり嬉しくない。それに明日が俺の誕生日なんだから、別に今おめでとうと言う必要なんてないんじゃないのか？

「突然だが、お前が十六歳になるにあたって、俺達は一つお前に言わなければならない事がある」

「言わなければならない事？」

「ああ、とても重要な話だ。どれくらい重要かと言うと、お前の人生がガラリと変わってしまうほどだな」

「ええーっ、すげえ聞きたくない」

もし目の前に開けたら何かとんでもない事が起こる箱があったとしよう。選択肢は開けるか開けないか。俺なら絶対に開けないだろう。リスクを負ってまで好奇心を優先しようとは思わない。

「言っておくが拒否は出来ないんだ。言わなかったら言わなかったで、お前を危険な目に合わせる事になる」

何で普通の生活を送っている俺が危険な目に合うんだよ、と心の中でツツコミを入れて、俺は渋々頷いた。

「……じゃあ聞くしかないか」

先程の父さんの発言を箱で例えたりしてみたが、この状況においては俺に選択肢はない。

「ああ、これから言う事はくれぐれも他には口外するな」

「はいはい分かった。だから勿体ぶらずに話してくれ」

正直気になってしょうがない。選択肢がないと分かった瞬間、好奇心という芽は急速に俺の中で成長した。

父さんは俺の言葉に頷いてコホンと咳払いをする。渋みを増したその表情からはこれから一体どんな話になるのか想像がつかない。緊張感に包まれたリビングに、父さんの声が響き渡る。

「実はな、お前は勇者と魔王の子供なんだ」

……………は？

どんな重い話題が出てくるかと思えば、なんだ、ただのジョークか。

「父さん、それに母さんも。そんな真剣な表情で冗談を言わないでくれよ。結構心臓に悪いぜ、それ」

「…………信じられないのも無理はない。私が勇者で、妻の愛花が魔王だなんて、一般人として過ごしてきたお前には理解に苦しむ話だろう」

父さんの表情は変わらないまま。ジョークもそのまま継続中。

「いや、理解云々というよりそれ自体が冗談なんだから、信じるものにもないだろ？ それとも、父さんと母さんは本当に勇者と魔王だっというのか？」

「ああ、その通りだ」

…………もしかして仕事で疲れが溜まっているのだろうか？ 今日はい早く寝た方がいいんじゃないかな。

「心配しなくても俺は大丈夫だ」

おう、俺の心が読まれとる。親子の間では言葉なんてなくとも意思の疎通が出来てしまうのか。プライベートとかはどうなってしまうのだろう。

「まあ、言葉で勇者や魔王などと言われても信じられないだろうとは思っていた。だから、これからお前に証拠を見せてやろう」

「証拠？ 父さんと母さんが勇者で魔王っていう？」

「そうだ。瞬きせずによく見ておけ」

父さんと母さんは腰掛けていたソファから立ち上がってお互いに向き合った。そして目を瞑り、二人同時にブツブツと何かを言い始める。それは英語のような異国の言葉で、俺にはさっぱり意味の理解出来ない言葉だった。

数十秒間の詠唱時間が経過した時、俺は目の前に現れたあるものに目を奪われる。

「……な、なんじゃこりゃ！」

二人の足元には、複雑な文字の書かれた光り輝く円の様なもの浮かび上がっている。これは俗に言う魔方陣というやつか？

更にその数秒後、その魔方陣が一際強く輝きを放つ。あまりの眩しさに俺は目を瞑った。

「っ！」

視界を埋め尽くしたのは白い光。まるで温かな光の中にいるような不思議な感覚に陥りながら、俺はゆっくりと目を開く。

「……え？」

そこに立っているのは、紛れもなく父さんと母さんだ。本物のそっくりさんではなく、紛れもない本物。

ただ唯一違う点があるとすれば、数秒前まで着ていた服が劇的に変化しているという事だ。父さんの服はだぼつとした部屋着だったのに、今や銀色の鎧に身を包み、脇には剣が携えられている。赤のマントも特徴的だ。母さんも着ていた服がビフォーアフターされていて、今着ているのは豪華な黒いドレスだ。それに、ただでさえ若く見えていた母さんは黒いドレスを纏うと更に若く見える。十代後半といっても通用するに違いない。

「お、俺は夢でも見ているのか？」

随分とまあ奇天烈な夢だ。ここまで衝撃的な夢を見たのは一体いつ振りだろう？ 夢って起きた時はまだ覚えているんだけど、しばらくすると全く思い出せなくなるんだよな。

夢の中で夢について考えていると、夢の中の父さんが不意に俺の頬に手を伸ばして掴んだ。

「いいいいはいつ！ なにふんらよ！」

強く握られていた手が頬から離された。引っ張られ頬がヒリヒリと痛い。

「いや、お前の目が遠くを見つめていたから現実に戻してやっただ。頬が痛む時点で、これが夢ではないという事ぐらい分かるだろう？」

「いやいや父さん、もしかしたら夢の中でも痛みを感じるかもしれないぜ？」

「……まあいい。お前がこれを夢だと思うのならそれで構わん。数日後にはいやでもこれが現実だという事を思い知らされるだろうからな」

溜息をつき、銀の鎧を身に纏った父さんは再びソファに座った。母さんもそれに合わせて座る。

「玲、さっき剣君が言っていた通り、あなたは勇者と魔王の子供なの」

今まで黙っていた母さんも会話に参戦。ちなみに剣君とは父さんの名前。新婚気分が抜けていないのではないかと思う。

「それがどういう事を意味するか分かる？」

「いや、さっぱり分かん」

「まあ、そうでしょうね。順を追って説明するからちゃんと話を聞いてね」

「ああ、分かった」

もうこれが夢か現実がよく分からなくなった。でもそんな環境の中でも理解出来ている事は、親の話はしっかりと聞かなくてはいけないという事だ。

「まずね、これは一般の人達が認知している通りなのだけど、勇者と魔王は本来対立関係にあるのよ。どちらかが倒されるまで戦い続ける。私達夫婦も、昔はそうやって戦っていたわ」

「じゃあ、何でそんな二人が結婚なんてしてるんだよ？」

興味本位で尋ねてみると、母さんの頬がどんどん朱に染まっていた。ドレスの裾をキュツと握り、父さんへと上目遣いに視線を向け

る。

「そ、それはその、た、戦っていく内に相手の事が気になっていて……剣君の事ばかり考えるようになってたの」

「ゴ、ゴホンゴホンッ！」

甘酸っぱい青春時代の時の気持ちを語った母さんに、父さんも恥ずかしさを紛らわす為か咳払いをした。二人の頭の中には今頃、若かった頃の記憶がよぎっているのだろっ。

「って、わ、私達の馴れ初めの事はいいのよ！ それよりも、勇者と魔王の子供が背負うデメリットの事を説明しなきゃ」

紛らわすように話を元に戻し、母さんは表情を改める。

「勇者と魔王の子供だと何かデメリットがあるのか？」

「……ええ。勇者と魔王は対立関係。でもこれによって世界中では善と悪のバランスがほどよく保たれていたの。それに勇者と魔王には跡取りがいるから、例えばどちらかが討ち取られたとしても、次の代の勇者や魔王と入れ替わる。こうして何千年も善と悪のバランスは保たれていた。でも、現在の勇者と魔王である剣君と私は対立していないし、玲以外の跡取りを育てていないの」

「……ごめん。話が急に難しくなった。俺に分かるぐらい簡単に説明してくれない？」

「うーん、簡単に言えば、勇者と魔王で跡取りは二人必要なんだけど、私達の子供は玲しかいないから一人足りない」

「大分分かりやすくなったけど、この会話の流れだと俺は勇者か魔王のどちらかにならないといけないって事じゃないか？」

「それで済めばまだ良かったのだけだね。勇者と魔王の子であるあなたは、勇者と魔王、どちらの地位も受け継がなければならないの」

「は？　つまり俺は勇者で魔王にならなきゃいけないってのかよ？」

「つか、俺も俺でこんなトンデモ話に順応しすぎだろ。何で普通に話の内容を理解しているんだ。」

「そういう事になるわ。血が繋がっていなければ跡取りとしては認められないから、代理として血のつながりの無い人間を勇者や魔王を立てる事は出来ないし」

「……で、俺が勇者と魔王の地位の両方につくというわけか。でも、それだけならデメリットなんて無いんじゃないか？」

「大有りよ。勇者なら魔王軍を、魔王なら勇者軍を敵に回して生きていく事になる。でも、それなら片方の軍が味方にいるという事になるでしょ。でも、勇者で魔王なあなたはその味方を確実に確保出来ない。下手をすれば勇者軍と魔王軍全てを敵に回す事になる」

不安げに母さんは俺を見つめる。いや、俺の方がもっと不安だから。

「……ごめんね、玲。あなたにこんな宿命を背負わせてしまった」

合わせていた視線が外され、母さんは顔を俯かせてしまう。俺は何も悪い事をしていないのに、とても悪い事をしたような気分になった。

「でも、あなたの事はちゃんと私達がサポートするから」

その言葉には確固たる意思を感じられる。隣の父さんもうむ、と頷いた。

「例えば世界中の人間が敵に回ったとしても、俺達はお前の味方だ。」

だから安心して勇者と魔王の地位を受け継げ」

安心出来るかい！ そんな簡単に安心出来るならこんなにテンパってない。表面上こそ冷静を装ってはいるが、俺の脳内では思考という名の抗争が繰り広げられているんだぞ。

ソファに全体重を預けて力を抜く。ずっと背筋を伸ばして話を聞いていたから寄りかかるととても楽だ。

「受け継ぎたくないと言っても受け継がなきゃいけないんだろ？ なら受け継ぐしかないじゃんか。いいよ分かった、受け継ぐよ。未だに信じられてないけど、父さんと母さんの地位は俺がしっかり受け継ぐ」

これが夢ならもうじき覚めるだろうし、現実だったとしてもすぐに勇者や魔王の地位につくわけじゃないだろう。時間があればいくらでも手の打ちようはあるかもしれない。

「で、俺が勇者と魔王の地位を受け継ぐのはいつなんだ？ 四年後に成人した時？ はたまた三十歳ぐらい？」

父さんと母さんは俺の発した言葉になぜかパチパチ目を瞬かせた。

「玲、もしそれだけの時間があれば、俺達もこんなに急に勇者と魔王の事を言ったりはしない。お前が勇者と魔王の地位を継ぐのは四年後でもなく、更にその先である十数年後でもない。お前が十六歳を迎える明日の誕生日だ」

「……なんだって？」

「明日の誕生日は儀式でもあるんだ。ケーキに灯された火を消した瞬間に十六歳を迎えた事になり、儀式の術式が発動してお前は勇者と魔王の跡取りとなる」

「なんでそんな大事な事を儀式の一日前に言っただよ!? 普通そういう事はもつと早い時期に伝えておくべき事だろうが!」

これを世間一般では詐欺と言う。いや、実際には言わないけど、詐欺をされた様な気分ではある。

「それも考えたが、早い時期に言えば言う程十六歳の誕生日までの日々の間、お前の精神に負担を掛ける事になると思ってな」

いやいや父さん、一日前に言われても負担は負担なんだよ。それならもつと早く言ってくれた方が良かった。

「……はあ」

思わず溜息をついてしまう。そりゃ溜息もつきなくなるわ。

「俺達が伝えたかった事は以上だ。時間を取らせてすまなかったな」

勇者服のまま、父さんはソファから腰を上げてリビングを出ていった。黒ドレスの母さんは未だに座ったままだ。

「……勇者と魔王の地位を受け継いだら、いきなり勇者軍とかが家に押し掛けたりしてくるのか?」

部屋に満ちた沈黙を打ち破るため、とりあえず今後どうなるかを聞いてみる事にする。

「それはないわ。私と剣君は明日で勇者と魔王を引退するけど、それでも戦闘力が衰えるわけではないから、勇者軍も魔王軍もわざわざ返り討ちにされに來たりはしないと思う」

「そ、そうか」

「あ、でも」

「ん？ 他に何か問題があるのか？」

憂う様な表情を浮べて母さんは黙り込んだ。息子ながら、その儚げな表情にドキッとさせられる。俺つてもしかしてマザコンなのか？

「いえ、何でもないわ。……デュエル・サンクチュアリを仕掛けてくる相手は中々いないでしょうし」

ブツブツと呟いた母さんはソファから立ち上がり、リビングの外に繋がる扉へと歩き出す。デュエルなんたらってのは一体何の事なんだろう？

扉の前で母さんは立ち止まり、俺の方へと振り返った。

「一度に色んな事を言ってごめんね。もし分からない事があったら、後で聞きに来て」

「うん、分かった」

ふつと柔らかい笑みを浮べて、母さんはリビングを後にする。一人残された俺は、静寂に満ちた空間の中、さっき言われた事を頭の中で整理する。

その一、俺は勇者と魔王の子供である。

その二、勇者と魔王の跡取りである俺は、勇者と魔王の地位を継がなくてはならない。

その三、両方の地位を受け継ぐという事は、両方の軍を敵に回す事になるかもしれないということ。

箇条書きみたいに頭の中で考えをまとめてみた。随分分かりやすくなったな。まあ、問題が解決したわけじゃないから、陰鬱な気分

は拭えないけど。

「……はあ」

今日だけで一週間分の溜息をついた気がする。溜息をつく不幸になるという噂が本当だとしたら、明日から俺に不幸が呼び寄せられる事になるな。いや、実際明日から勇者と魔王の地位を継がなきゃいけないわけだから、不幸になっているのだろう。

「……とりあえず、今日はもう寝ちまうか」

俺がどうこう考えたところで、時間が止まるわけでもないし地位を受け継がなくて済むようにもならない。それならもう明日の俺に全て任せて、今日の俺は現実逃避の為に夢の世界へと旅立てばいい。それに、まだこれが百パーセント現実だと決まったわけじゃない。一パーセントでも夢である可能性があるのなら、俺はその可能性に賭ける。

まだ十時で寝るには少し早いけど、起きてても考えこんでしまいそうなので寝る事にした。

ソファから立ち上がり、リビングの電気を消して俺は二階へと上がる。自室の扉を開いて入るなりベッドへとダイブして、俺はすぐに夢の中へと意識を落とした。

今日から俺は勇者で魔王

そんな流れで次の日になり、今に至るというわけだ。

両親が勇者と魔王の姿をしているのを見る限り、どうやら昨日のやり取りは夢ではないらしい。ああ、夢であってほしかった。

「ところで、何で二人共既に勇者と魔王の姿をしてるんだ？」

「いや、この姿になるのも今日が最後だと思うと感慨深くてな。せつかくだから、今日は一日中この姿でいようという事になったんだ。なあ愛花？」

「ええ。剣君の凛々しい勇者服も見れなくなってしまったもの。今の内に目に焼き付けておかないと」

「そうか。愛花の魔王姿も見れなくなるのか。とても残念だ。魔王の姿の時のお前はどんなものよりも綺麗だというのに」

「け、剣君、それは言い過ぎよ」

「いや、そんな事はない！……まあ、魔王姿もさることながら、普段のお前も十分に魅力的だな」

「剣君！」

「愛花！」

「……いや、何やってるんすかあんだ達は！」

いい歳した大人が子供の前でイチャイチャしてんじゃねえよ！

恥ずかしいっいたらないだろうが！

ジト目で両親へと語りかけると、俺の気持ちが伝わったのか父さんは咳払いを、母さんは恥ずかしげに顔を少し伏せた。

「さ、さて、そろそろ玲の誕生会を始めるとするか」

父さんが仕切り直すようにリビングの中央に設置されているテー

ブルへと歩みを進める。そこには既にケーキが用意されていて、ロウソクが大量に立てられている。数えると俺の年齢と同じ数あった。火はまだ点いていない。

「玲、あなたもケーキの前へ」

頬を赤らめて恥ずかしそうにしていた母さんは、すっかり表情を改めていた。俺にケーキの所まで進むよう促し、一緒にケーキの前まで移動する。

「あれ、ライターはないのか？」

テーブルには火をつけるための道具が置かれていない。どちらかが既に持っているのか？

「道具は必要ないわ」

母さんが人差し指をケーキへと突き出す。するとその指から炎が発生して、次々とロウソクに火を灯していく。

絶句とはこういう事を言うんだろ。衝撃的過ぎて言葉が喉から出てこない。

あつという間に灯った焰はゆらゆらと揺れる。その温かみが肌にはんわりと伝わってくる。

「電気を消すわね。あなた、儀式の術式を展開して」
「おう、分かった」

リビングを照らしていた電気の光が消え、代わりにロウソクに灯る火が暗闇を照らす。

「ウィ・シャルダ・ルベリオ・エルタ」

呪文つばい言葉を父さんが呟くと、ケーキの下から広がるように幾何学模様の円が出現する。それはテーブルの端にまで達すると拡大化を止めた。

「……あとは俺がロウソクの火を消せばいいのか？」

「そうよ。あ、でも待って、せっかくの誕生日だから、ちゃんと誕生日の歌を歌わないと」

「えー、それは別にいいんじゃない？」

「駄目よ。玲の記念すべき十六歳の誕生日だもの。ちゃんとお祝いしなきゃ」

誕生日と書いて儀式と読むこの現状は果たして祝われていると判断していいのだろうか？ 少なくとも俺はとても祝われている気がしない。

「そうだな。それじゃあ歌うとするか」

父さんと母さんは頷きあい、声を揃えて歌い出す。

「ハッピーバースデートゥーユー、ハッピーバースデートゥーユー、ハッピーバースデーディア玲、ハッピーバースデートゥーユー！」

ノリノリで歌われてしまった。呆れ混じりに俺はケーキの傍へと顔を寄せ、ふっと息をロウソクへと吹きかける。

激しく揺られて消えていく炎。それがなぜか俺の目にはゆっくりと鮮明に映り、一瞬の筈なのに数秒間もの時間に感じた。

火が全て消えると、今度は魔方阵が光り出す。透き通るような水色の光が部屋全体を包み込み、俺の視界をその輝きで埋め尽くした。

「……っ」

眩しい。太陽を見上げた時の様な感じだ。でも、光によって目の奥に痛みが走るような事はない。

しばらくすると、光によって何も見えなかった視界が徐々に回復してきた。薄ぼんやりとリビングの景色が映し出されていく……。

「おお、玲、よく似合っているぞ」

「本当ね。剣君の若い頃にそっくりだわ」

視界が元通りになると、俺の両親の姿が目に入る。二人の格好はいつも通りの部屋義に戻っていた。

何となく自分の着ている服へと視線を向ける。嫌な予感がしたんだ。こう、頭を通り過ぎるように。

そんな俺の感覚は正しかった。学校から帰ったばかりで学校の夏服を着用していた筈なのに、今の俺はさっき父さんが着ていた銀の鎧を身に纏っていた。

「ど、どうして俺が勇者の格好をしてるんだ!？」

「儀式が完了したからだ。勇者と魔王の地位が受け継がれたのだから、服装も受け継がれて当然だろう?」

「それが当たり前みたいな言い方をしないでくれ!俺からすれば地位を受け継ぐとかそういう事自体夢のような話なんだからな!」

「まあ何にせよ、無事に儀式が終了してよかった」

父さんと母さんは安心したように笑顔を浮べる。俺は笑っていたとしても引き攣った笑みを浮べてるんだろうな。

「つつか、この服はどうすればいいんだ?これからずっと勇者服で過ごせだなんて言われたら、俺はもう社会的に死ぬんだけど」

「それなら問題ない。心の中で念じれば服は元に戻る。やってみろ」

瞳を閉じて意識を集中。言われた通り、心の中で服が元通りになるよう念じた。すると俺の体が一瞬強い輝きを放ち、光が治まる頃には元の夏服姿に戻っていた。

「……すげえ非科学的な現象だな」

幽霊とか宇宙人をあまり信じていない俺としては、この一瞬お着替え現象はあまりにも衝撃的だ。これなら世界早着替え選手権で圧倒的な強さを見せつけての優勝も可能だろう。あればいいのになあ、早着替え選手権。

「玲、勇者の姿になったのだから魔王の姿にもなっておいたらどう？」

母さんが喜々とした表情で俺の一瞬お着替えを所望してきた。

「いや、なんだよその理屈は。別になる必要なんてないだろ？」

「あるわよ！ 私が見てみたいの！」

「……そうですか」

こんなにテンションの高い母さんは珍しい。断ったらガックリとうな垂れてしまいそうな気もするし、応えてやるとするか。

「分かった、分かったよ。ご所望通り魔王の姿になってやるさ」

再び目を閉じて、今度は魔王服の試着するイメージを浮かべながら心の中で念じる。

母さんの場合は黒ドレスだったけど、俺の場合はどんな服装になるんだろ？ やっぱリマントとか着たりするのかな？

光と共に俺の衣服が変わっていく。それは次第に扇情的な形へと変化していき、やがてその服の全貌を露わにする。

「……………」

ひらひらの付いたスカートが俺の視界の中に入る。もうこの時点で俺が黒ドレスを纏っているという事は決定的だった。

もしこの場に鏡があったのなら、俺はきっと羞恥心によって消滅していたに違いない。何せ鏡がない今の状況でさえも体中が火照って仕方がない。だって女装だよ？

「……………」

ほらみる。所望してきた母さんも無言じゃないか。もうさっさと元の服に戻ろう。そしてすぐに部屋に逃げ込もう。殻に籠って俺だけの閉鎖空間を作りだすんだ！

「か、かかかか……………」

心の中で念じようとした時、そんな声が聞こえてきた。これは母さんの声だ。一体どうしたというのか？

閉じていた瞳を開けて母さんを見ようとした時、体に突如衝撃が走った。

「可愛い！ 可愛いよ玲！ あなたに黒ドレスの組み合わせは最強ね！ もうきゅんきゅんするわ！ 写真撮りましょ！」

体にべたりと母さんが密着してきた。終いには頬ずりまでしてくる始末。誰か助けて！

「ま、待つて、一旦落ち着いて！」

人は興奮状態に陥ると正常じゃなくなるようだ。一日前の母さんと比べるとまるで別人。

「ご、ごめんなさい。私ったらつい……でも、本当によく似合ってるわ。ね、剣君？」

母さんに釣られて俺も父さんへと視線を向ける。困った様に笑みを浮べて、

「あ、ああ、確かによく似合っているな。ただ、まあ、なんだ、息子の女装姿を見るといいうのは中々に衝撃的だな」

うん、着ている本人も凄い衝撃を受けているからな。つつかそんな目で俺を見ないで！ 恥ずかしいし俺も切ないから！

俺の思いが伝わったのか、父さんはそっぽを向いてくれた。……ただ単に見たくなかったんだろう。

それに比べて母さんは目がどうかしているのか、なおテンション高めである。母さんの目には一体俺がどう写ってるんだか。

「ねえ玲、これから一緒にお買い物に行きましょ！ もちろんあなたは魔王の姿のままでね！」

「……母さん、それを世間では羞恥プレイと言っただよ」

仮に俺も十六年間生きている。所々で恥ずかしい思いをした。授業で作文の発表をした時に囁んでしまったり、小学生の劇で主役をやらされたり、もう色々。でも、女装で街中を歩くというのは俺が経験してきた十六年間の中で間違いなく一番恥ずかしい。更にその姿を知り合いに見られたらどうなる事か。蔑むような目、幾度と

なく放たれる罵倒、たちまち学校中に流れる俺の女装癖……。おお
う、恐ろしくてそれ以上未来の事を考えたくない。

「えゝいいじゃない別に。これも大事な経験よ！」

「女装して外歩く事のどこが大事な経験か教えてもらいたいんですがねえ！」

「大事な経験じゃない！ 女として外を歩く機会なんて中々ないですよ？」

「前提が間違ってる！ 女装をしても男は男だから！」

「むう。玲のケチ。別に減ったりするわけでもないじゃない」

「俺の精神パラメータが急激に減少するわ！」

とりあえず、母さんは俺への羞恥プレイを諦めてくれたようだ。

安心して息をつくと、あまり意識していなかった所に意識が向かう。スカートって中がスースーするな。なんか落ち着かない。

「って、いつまでドレス着てるんだよ俺は」

念じればすぐに夏服に戻る筈だ。それなのに黒ドレスを着っぱなしだったのは……。俺が女装に目覚めたからなのか！ いや、流石にそれはない。

気を取り直して夏服に戻るよう念じる。すると一瞬で夏服に元通り……。にならなかった。なんで？

もう一度念じてみるが、やはり姿が戻らない。クエスチョンマークが頭の中を占拠した。

「お、おかしいな。服が元に戻らない」

「ん？ 別におかしい事なんて何もないわよ？ 私が一日服を戻せないように術式を編んだもの」

おい、今さらりとんでもない事言ってなかったか？ 俺は耳が
良いんだぞ。

抗議の目を母さんに向ける。するとなぜか頬を赤くしてモジモジ
しだした。

「そ、そんなに見つめられると恥ずかしいわ。しかも玲が魔王の姿
だから余計キョンキョンきちゃう」

「見つめてるんじゃないかって睨んでんだよ！ 早く服を戻せるように
してくれ！」

「嫌よ。黒ドレスの玲可愛いもの」

「理由になってない！ 父さんも何か言ってくれよ！ でないと俺
一日この格好で過ごす事になる！」

そっぽを向いていた父さんが母さんに体を向ける。その表情は中
々真剣で、頼り甲斐のあるものだった。

息子の為に立ち上がった父が俺の敵に対して口を開く。

「愛花、ほどほどにしておくんだぞ」

「分かってるわ、あなた」

「……あんたら、グルだったんだな！？ ちくしょう、新婚気分が
抜けてない夫婦はこれだから！」

「すまない、玲よ。だが今はこうするしかなかったんだ」

「それっぽいセリフを言っても許さないぞ！ って母さん俺の袖を
引っ張ってどこへ連れて行くこうとしてるんだ！？ た、たた助けて
父さあああああん！」

叫ぶも虚しく、俺は引きずられながらリビングを後にした。その
後何をされたかは想像にお任せします。

……うつ、もうお婿に行けない。

転校生からのお誘い

ここ最近、俺こと彩文玲には色んな事が起きている。いや、色んなと言ってしまうとたくさんあったように聞こえてしまうかもしれないが、せいぜい二つ程度だ。

まず一つあげさせてもらうなら、父さんは勇者で母さんが魔王。そして俺が勇者と魔王の地位を継いだ事だな。そんな信じがたい真実を両親に告げられたのが二日前。

そして今現在、第二の刺客として俺が直面した出来事は、

「おはよう！ 今日はとても良い天気だね」

「……ああ、太陽が雲に隠れてて過ごしやすいな」

あの金城イリヤが俺に話しかけてきた。

周りの奴から話掛けられている姿は見ても、自分から人に声を掛けている姿は見た事のない無愛想女金城イリヤが、あろうことか俺に話しかけている。

しかも、だ。いつもつまらなさそうな顔をしているのに、今日はなぜかニコニコと笑みを浮べている。普段笑っていない奴が笑うと恐怖を感じない。

「この間、彩文君も図書室に来てたよね。よく図書室は利用するの？」

「いや、この間は暇だったから行ってみただけだよ。金城は？」

「よく利用してるよ。ここの図書室は本がたくさんあるから。あと、わたしの事はイリヤでいいよ」

「……………あ、ああ」

怪しい。一応呼び方は了承したけどすげえ怪しい。絶対に何か裏

がある。そう思っておいた方がいい。だってそうだろ？ この間図書室であつた時はかなり無愛想だったじゃん。俺なんて眼中にないですよオーラ出しまくってたじゃん。それがいきなり掌を返したように接してきたんだぜ？ 俺をターゲットにしたドツキリ企画だったりするのかもしれない。

「なっ！？ イリヤちゃんが自ら男に話しかけている！？ しかも飛び切りの笑顔で！」

「馬鹿な！？ イリヤ様が男に……おのれええええええ！」

「金城さんが自分から人に話かけるなんて。……もしかして彩文君、金城さんの弱味とかを握ってて、無理やり話しかけさせてるのかも」「あやぶみiiiiiiii！ 決闘だ！ 俺とお前、どちらが金城さんに相応しいか勝負しろおおおお！」

クラスのおちこちからそんな声が聞こえる。九十九パーセント以上はイリヤが原因なのに、なぜか俺が悪い事をしている事になっている。理不尽極まりない。可愛い正義っていうけど、今の俺みたいな人間の立場からすれば悪だ。

「……あのさ、何で急に話しかけてきたんだ？」

俺の言葉にイリヤは不思議そうに首を傾げる。

「話するのに理由が必要なの？」

「……いや、必要ではないけど」

この間図書室で一方的に会話を打ち切った奴の言う事じゃないよな。俺がイリヤへと向ける不信任は増していくばかりだ。

「ならいいじゃない。会話は人と人を繋ぐ大事な系なんだから」

その糸をいつも断ち切っているのはイリヤ、お前自身だよな。そう思ったけどもちろん言葉には出さない。

「まあ、確かに会話は大事だけど、どうして俺なんだ？ これといってお前と俺に接点はないだろ？」

「接点ならあるよ。これを見れば分かるよね」

「っ！？」

イリヤは突然スカートの裾を上げた。露出された太股は白くて輝いていてまるで宝石のようだ。それでいて触れると柔らかそうで、俺は思わずゴクリと唾を飲み込む。っ、っつかスカートの中也見えそうなんだけど。

それ以上は流石に見てはいけないと思い首をスライド。いくら男の子だからといって公共の場でまじまじと女の子の足を見るのは失礼だし、免疫がない俺には少し刺激が強い。

「？ どうして目を背けるの？」

「そ、そりゃあ背けるだろ！ 人前でスカートを捲ったりするな！」

「スカートを捲らなければわたし達の接点は見せられないよ？」

「……俺とお前の間にそんな淫らな接点はない」

何せ俺は生まれてこの方女の子と付き合ったことがない。しかもスカートの中に接点があると言われたら健全な男子高校生である俺は、恋愛を通り越したトンデモイベントがあったという想像しか出来ない。だが、そんな夢のようなイベントがあった事など一度もない！

「い、イリヤちゃんがスカートの裾を……ほああああああっ！」「彩文の奴、イリヤさんに人前で羞恥プレイを強要しやがったのか

！ 最低だ！ このアンダーグラウンド野郎！」

「スカートの中に接点！？ しかも淫らな！？ 羨ま……じゃなくて、許さんぞ彩文玲！」

何かクラスの連中にとんでもない誤解をされてるんですけど。まあ、この状況を見れば誤解を招くのは当然だが、何でまた俺が悪役になってるんだろうな！

「と、とりあえずイリヤ、その接点はまた今度でいいから。だから一旦スカートを降ろそう。な？」

でないとそろそろ俺の目がそっちに向いてしまいそうだ。理性で本能を押さえ込むというのは中々に荒行事である。

「……彩文君がそう言うなら」

イリヤはスカートの裾から指を離れた。パンツが見えるか見えなにかぐらいまで引き上げられたスカートの裾は、元の膝より少し高い位置に帰還する。

「人前でそういう事するなよ。女の子なんだから」

「……うん、確かに人前で見せるようなものでもないね。分かった。じゃあ」

前にいたイリヤがいきなり俺の傍へと近づいてきた。その距離はもう体と体が触れ合いそうになるほど近い。女の子特有のいい匂いが鼻腔をくすぐる。

そつと俺の耳へと口を近づけ、イリヤはボソボソと呟く。

「放課後、時間ある？」

温かい息が耳に吹きかかる。なんかゾクゾクとした。

「あ、ああ、大丈夫だけど」

「そう、それなら良かった！ それじゃあ放課後に図書室でお話しよう。その時に、わたしとあなたの接点を見せるよ」

「……………」

どう応えればいいか正直迷った。だって接点を見せるって事は、放課後図書室でイリヤと淫らな事を……ええい！ 俺は何を妄想しているんだ！

とりあえず心の中で深呼吸。落ち着け彩文玲。俺とイリヤにそんな淫らな接点は一切ない。そう考えれば、こいつは他の事で俺に用があるのだと考えた方がいいだろう。

様子を窺うように上目遣いで見つめるイリヤ。駄目だ、こんな至近距離で上目遣いとか反則すぎる。

「わ、分かった。図書室な」

「うん。待ってるね！」

満足そうに笑みを浮べて、イリヤは俺から離れて自分の席へと戻っていく。その足取りは軽く、何だか機嫌が良さそうに見えた。

「……………本当にあれは金城イリヤなのか？」

この間とはキャラが全然違う。つまらなさそうな表情だったのにニコニコしてるし、コミュニケーションなんて必要ないと言わんばかりに自分から人に話しかけようとはしてなかった割に、今日は俺に話しかけてきた。これは空から槍が降ってくる予兆なのかもしれない。

放課後に若干の不安を抱えながら、俺は自分の席に戻った。

可愛い悪魔

考え事をしていると、時間はあっという間に経過する。

気がつけば今日の授業は全て終了していた。掃除も終わり、今はHRの最中だ。

（イリヤの事で頭が一杯だったけど、帰り道にも気をつけないとな）

『勇者と魔王の地位を継いだお前を狙う輩が現れるかもしれない。』

今のお前では多対一の戦闘は厳しいだろう』というのは父さんの弁
そりゃ、昨日なつたばかりだからなあ。いきなり戦えと言われても戦えるわけがない。それがどれだけ難しい事かと言えば、車に乗った事のない奴に車を運転しろと言っているようなものだ。この例えは乗り物なら全て当てはまる。

素人にはハードルの高い『戦う』という選択肢は選べない。そこで父さんが対処法を教えてくれた。『逃げる』だそうだ。家まで逃げ切れれば、元勇者と元魔王がいるわけで、二人にかかればどんな敵でも相手ではないだろうからな。

と、そんな風に帰り道の心配をしているとHRが終わった。学校中に馴染みのあるチャイムの音が響く。

「さて、用を済ませて、早めに帰宅しますか」

席から立ち上がりながら教室の中を見渡すと、既にイリヤの姿はどこにもなかった。もう図書室へと向かったのか。

待たせるのも悪いと思い歩を進めて教室を出る。HRを終えて他のクラスの生徒達も廊下に出てきているから、廊下は結構人で溢れている。

いつもなら階段を下に降りて下駄箱に向かうが、今日は階段を上

に登る。

上の階に着くと、さっきまでの喧騒が嘘の様に静まり返っている。同じ学校内とは思えない。

廊下に響く自分の足音を聞きながら図書室に入ると、イリヤが図書室の中央で待っていた。

「ちゃんと来てくれたんだね。嬉しいよ」

つまらなさそうな表情はどこへやら。イリヤの浮べた笑みに、俺は思わずドキツとさせられる。やっぱり笑った方が可愛いな。

「そりゃ、約束したからな。俺に何か話があるんだろ？」

「うん。ここであつたし達の接点を見せても問題ないでしょ？」

朝の時と同じ様に、イリヤはスカートの裾を上げる。こ、こいつには露出癖があつたりするんだろうか。周りに人がいないのは不幸中の幸いだ。

「ここを見て。このマークに覚えがあるよね」

視線を外そうとしたが、その前にイリヤが指差した太股に奇妙な痣みたいなものがあるのを見つける。黒い曲線が二つ交差した、不思議なマーク。

「いや、そんなマークに覚えはないぞ。今初めて見た」

それにやっぱり太股を長時間直視できない。マークを認識出来た時点で俺は別の方向に視線を向ける。

「……おかしいなあ。あなたの体にも、これと同じマークがある筈

「なんだけど」

イリヤは首を傾げるとこちらにスタスタと歩いてくる。ちなみにスカートの裾は元の位置に戻っている。

「なあ、そのマークが俺とお前の接点なのか？」

「そうだよ。わたし達悪魔と、魔王の体に刻まれた刻印」

「ふーん、悪魔と魔王の体にねえ……って、え？」

なんでここで悪魔や魔王なんて単語が出てくるんだ？ しかも、

「今、なんて言った？」

「わたし達悪魔と魔王の体にこの刻印は刻まれていると言ったんだよ」

「……お前が悪魔？」

「うん、悪魔のルーテル・イリヤ・シュトレンベルグだよ。改めてよろしくね！ 魔王様！」

……間違いない。この口ぶり、こいつは俺が魔王であるという事を知っている。情報なんて漏れるわけがないのに、どうしてイリヤは俺が魔王だという事を知っているんだ？

「どうして魔王だって分かったんだろって顔してるね。簡単だよ。一般人には宿らない魔力が、彩文君には宿ってる。それも大量にね。この間図書室で会った時は魔力を感じなかったから、その日か次の日ぐらいに地位の受け継ぎを行ったんでしょ？」

「……………」

自分の考えている事を見透かされるといふのは、あまり気分の良いものではないな。

俺は数歩後ろに下がって臨戦態勢を取る。

「イリヤ、お前は俺の敵なのか？」

母さんは言っていた。もしかしたら、勇者側も魔王側も敵に回して戦う事になるかもしれないと。だったら、こいつは俺を倒す為に送られてきた刺客という可能性は十分にある。

しかし、イリヤには俺に襲い掛かろうという様子はなく、不思議そうにその場に佇んでいる。

「なんで魔王様の敵にならなきゃいけないの？ わたし達悪魔は魔王様直属の部下なのに」

「あー、まあ、確かにそうなんだけど、俺の場合は勇者で魔王だからさ」

「それなら知ってるよ。でも、魔王様は魔王様なわけだし、わたし達の主って事には変わらないよ。もしあなたに反発する悪魔がいるんだとしたら、それは純血派の悪魔だね」

「純血派？」

聞きなれない単語の登場だ。俺はオウム返しでイリヤに問う。

「うん。今魔王軍では混血派と純血派で分かれているの。勇者で魔王様である彩文君を受け入れようと考えている者達が混血派で、魔王は魔王であるべきだと主張するのが純血派。割合でいえば半々つてところかな。もちろんわたしは混血派だよ」

「……それが本当ならいいんだけどな」

純血派や混血派といった派閥が存在するのが仮に本当だとしても、イリヤが混血派だという保証はない。自分は敵じゃないと主張して敵の懐に入り、隙をついてこようとしているかもしれない。

「本当だよ！　だって純血派なら教室で魔王様を見かけた時点で攻撃する筈だもん」

「いや、俺を信用させきって絶望させるようにいたぶろうという考えかもしれない。それに、悪魔って印象では嘘つきな感じだしな」

「あー、今は聞き捨てならない！　悪魔が嘘つきなんて世間一般での偏見だよ！　中には天使に勝るとも劣らない清らかな心を持った悪魔もいるし！」

「だとしたらその悪魔は生まれた種族を間違えたんだな。きっと」
「うう、頑固だなあ。人を疑ってばかりいたら心がいくらあっても足りないよ？」

「お前の場合は人ではなく悪魔だろ」

「それを言ったら魔王様だって魔王でしかも勇者でしょ？」

「……うーむ」

そう言われればそうだった。父さんと母さんは人にしか見えないけど、一応元勇者と元魔王だから普通の人ではない。

「お願い、信じて魔王様！　何でも言う事聞きますから！」

「お前、最初とキャラ変わりすぎだろ」

無愛想女金城イリヤはどこに行った。今日一日でお前という人物のイメージが大きく塗り替えられたぞ。

「だって相手が魔王様だもん。わたし達の頭首様なんだから慕って当然！」

俺はイリヤを真正面から見据える。その瞳は悪魔と名乗るわりにはキラキラと輝いていて、どちらかといえば天使っぽい。

「……分かった。一応信じる」

疑ってばかりだと気疲れする。だから半信半疑ぐらいまで警戒心を下げる事にした。

「ありがとう、魔王様！」

「と言っても、完全に信じたわけではないからな」

「なるほど、これがツンデレというやつだね！」

「俺はツンツンしてないし一度たりともデレてない……あと、俺はお前の事をなんて呼べばいいんだ？」

唇に指を当てながら、イリヤは悩む様子を見せる。

「うーん、正直言えばルーテルって呼んでほしいけど、他の人が聞いたら変だろうし……魔王様にお任せするよ」

「そうだなあ……」

俺としてはイリヤで慣れ始めてるからこのままでいいんだが、イリヤ的にはルーテルと呼んでほしいみたいだ。だったらその名で呼んであげた方がいいだろう。

「普段はイリヤで、二人の時はルーテルって呼ぶのはどうだ？」

まあ、自分の中で語る時は、イリヤで統一させてもらっただけ。

「……うん、それ、とってもいいと思う！」

どうやら俺の提案に満足してくれたようだ。喜んでくれて何より。

「二人の間だけの呼び名ってなんかロマンチックだね！ わたし

達恋人同士みたい！」

「こ、ここ恋人！？ どうしてそうなるんだよ！？」

急な話のシフトに思わず声が裏返ってしまふ。

「よくドラマとかでもあるじゃん。普段は苗字なのに放課後一緒に下校する時は名前で呼び合ったりするの！ みんなに内緒で付き合ってる人達はそうやって下校時間にイチャイチャするんだよ！ わたし達もイチャイチャしよう！」

「っ、付き合ってもいないのにイチャイチャなんてしねえよ！」

「えゝ、お互いの親睦を深める良い機会だよ？」

「そんな親睦の深め方はなくていい！ それに、ただのクラスメイトから友人くらいの関係になっただけでも十分な進歩だろ」

「ちつつち。魔王様、わたし達は友達なんて生易しい関係じゃないよ。絆という決して切れない糸で繋がってるの！」

その言葉には俺を納得させるだけの力があつた。何ていうか、迫力の様なものが込められている。

「だからわたし達はイチャイチャしても大丈夫！」

ぱつと明るい笑みを浮べて再びとんでもない事を言い出すイリヤ。それは一体どんな理屈だ？

「そんな理由で俺は誤魔化されないぞ」

「むう。女の子とイチャイチャしたからないなんて魔王様は不健全だよ！ もしかして男の事が好きなの？」

「変な誤解をされてる！？ 俺は普通に女の子が好きだよ！」

ツツコミを入れ、ふと図書室にある時計へと視線を向けると、こ

ここに来てから既に一時間もの時間が経過していた。

「もうすぐ五時か。そろそろ図書室が閉じる時間だな。続きは帰りながら話そうぜ」

「あ、待って、その前に一つだけお互いに確認しなきゃいけない事があるの」

入口へと向かおうしたらイリヤに手首を掴まれた。女の子に触れられただけでいちいちドキドキするこの心臓をどうにか出来ないものか。

「もしかして、またさっきのマークを見たりするの？」

俺には刺激が強すぎる。一定時間見続けたら鼻血を出す自信さえあるぐらいだ。

「ううん、今度は刻印じゃなくてお互いの姿を見せ合っただよ。魔王様は魔王様の格好で、わたしは悪魔の時の姿」

「……今ここで？ 人が来たらどうするんだ？」

今はなぜか図書室に人の姿はないけど、戸締りに先生が来るかもしれない。ばったり出くわしてしまったら色々と取り返しがつかなくなる。

「それなら心配ないよ。私がずっと人払いをしてるからね」

「悪魔ってそんな事も出来るのか？」

「ううん、人払いは初歩中の初歩だから悪魔に限らず使えるよ。魔王様はまだ地位を継いだばかりだから使えないかもしれないけど、その内自然と出来るようになるよ」

つまり俺は段階を踏んで人間離れしていくという事だな。うわあ。

「それじゃあまずは私からだね。少し離れてて」

言われた通りイリヤから距離を取ると、その数秒後にイリヤの足元から赤く光る魔方陣が出現する。

「アルハ・レティエ・カルマスケティア」

呪文のような言葉を呟くと赤い魔方陣が輝きを増した。図書室全体を埋め尽くすような強い光に俺は反射的に目を瞑る。

数秒して目を開くと光は治まっていた。図書室に変化はない。変化があるとするなら、目の前にいるイリヤにコウモリのような黒い翼が生えている事くらいか。よく見れば尻尾も生えている。身に纏う赤ドレスはイリヤの体のラインをくっきりと表している。俺は悪魔の姿を見た感想を述べた。

「思っていたよりも原型を留めてるんだな。てっきり姿形全部変わるものかと」

「世間一般の悪魔の姿を本で読んだりしたけど、流石にあんな恐ろしい見た目の悪魔はいないよ。というわけで、これがわたしの真の姿。どう、可愛い？」

「うん、可愛いよ」

容姿は元からSランクだったからな。オシャレをすればそりや可愛い。悪魔化をオシャレと言ってもいいのかは微妙だけど。

「なっ、ま、まさか可愛いという返答が返ってくるとは思わなかった。お、お世辞を言っても何も出ないからね！」

「別にお世辞ではないぞ。今のルーテルの姿を十人が見たら十人が

可愛いって言うと思う」

「わわ！　これが俗に言う褒め殺し！　真面目な表情で言われると破壊力抜群！」

ドタバタと図書室を赤ドレスで駆け回るイリヤ。赤ドレスのスカートが忙しく揺れている。

「っと、わたしは終わったから、次は魔王様が姿を見せる番だよ」

走るのを止めてイリヤがこっちに戻ってきた。走り回ったせいか頬がほんのり赤くなっている。

「ああ、そうだったな」

イリヤが悪魔の姿を見せてくれたのだから俺も魔王の姿にならないと。……ん？　魔王の姿？

「……………あ」

やばい。魔王の姿になるのだけはやばい。目撃者のいる状況下で魔王の姿になるという事は、それすなわち社会的な死を意味する。

「どうかしたの？　変身する為の呪文を忘れちゃったとか？」

それだ！　呪文詠唱しなければ変身出来ないと思ってくれているのなら好都合！

「あ、ああそうなんだよ。俺ってば魔王になったばかりだから、呪文を忘れてしまったんだ。困ったな、これじゃ姿を見せられない」

人には嘘をつかなきゃいけない時がある。その時が今だ！ 俺は自らの全力で困った表情を作り出す。

疑いという言葉を知りませんと言わんばかりにイリヤは頷いてくれた。

「そうなんだ。それじゃあ仕方がないね」

計画通りに事が進行した事を心の中で喜んでいると、イリヤがこそごとと赤ドレスから何かを取り出した。

「この魔石を使えば強制的に魔王の姿になれるよ！ さあ、早く魔王様のカツコイイ姿を見せて！」

……あれ！？ むしろ状況が悪化してる！？

取り出された魔石というやつはゴツゴツとした黒い石の様な物だった。くう、憎い！この魔石が憎い！

「な、なあ、別に今日俺が魔王の姿を見せる必要はないよな？ どうせいつか真正派と戦ったりするんだろ？ その時に見る事になるんだから」

「そんなのダメ〜！ わたしが変身したのに魔王様が変身しないのは不公平だよ！ えっちする時に女の子だけ脱がされるぐらい不公平だよ！」

「確かにそれは不公平だけど、俺はそこまで不公平な事はしていない！」

「わたしが不公平と言ったら不公平なの！」

ぐう、駄々っ子ってこんな感じなのかな？ 凄まじい勢いだ。このままだと押し負ける！

最上級の辱めを受けない為にも、イリヤの目を汚さない為にも、

俺は決死の覚悟である行動に移った。

「あ、どこに行くの魔王様！」
逃走だ。

争わず傷を付け合うこともない最善の策。少しばかり足には自信があるから、これなら醜態を晒さずに済む！

我ながら見事なスタートの切り方だった。一瞬の内に体を反転させ、地面を強く踏みしめ入口へと駆ける。上履きがキュツと甲高い音を立てて鳴いた。

もしこれが五十メートル走だったら自己ベストを出しているかもしれない加速。俺が図書室の入口前までやってくるのに二秒と掛からなかった。

イリヤは完全に反応が遅れているだろうから追いかけては来れないだろう。逃げ切れる！　そう強く確信した瞬間、顔面に何かがガツンとぶつかった。

「~~~~っ！」

トップスピード中にアクシデントが発生。鼻が折れ曲がったんじゃないかと思うくらい強い痛みが顔を駆け抜け、俺はその場に尻餅をついた。

鼻を押さえながら前を見ると、入口には何もなかった。扉は閉まっ
つていない。

「な、何にぶつかったんだ？」

「もう、いきなり駆け出すから何事かと思ったよ」

振り向くと、イリヤがすぐ傍まで近づいて俺を見下ろしていた。

「人払いのついでに結界を入口に張つといて良かったよ。どうして

魔王様はそんなに自分の変身後の姿を見せたがらないの？」

しゃがみ込んで俺に視線を合かし、肩をしつかり抑えられる。この体勢を他人が見たら、俺が女の子に襲われかけているような図に見えるかもしれない。

「い、いや、それには色々と事情があつてな。俺も苦労してるんだ」
「説明になってないよ」

言いつつ俺の肩を握る手に力が加えられた。体を後ろに押し倒され、イリヤが俺に覆いかぶさる。

「な、ななな何するんだ!？」

俺の上にいるイリヤは不敵な笑みを浮べて、魔石を再び赤ドレスから取り出した。

「魔王様、これからわたしが良い事してあげるよ」

「甘美な響きだけどそれはただ単に俺を無理矢理変身させようとしているだけだ! 今すぐに俺を解放しろ! でないと泣く事になるぞ! 俺が!」

暴れてみるものの抑えられた体はどうにもならない。力の加わる部分を正確に押さえられているから動こうにも動けないんだ。

「どうしてそんなに嫌がるのかな? 別に裸になるわけでもないのに」

「俺からすればそれとあまり大差ないんだよ! そこらへん察しろ!」

何せ女装だからな。裸なら捕まって終わりだし、女装癖は社会的な死を意味する。俺が救われるには魔王の姿を見せない以外方法はない。

「ますます気になるね。ま、それもこれを使えば分かる事なんだけどさ」

魔石が俺の目の前に突きつけられ、鈍い光を放っている。

「や、やめろ！ 弱い者いじめがそんなに楽しいのか！」

「だってわたし、悪魔だもん。それに魔王様の方が立場は上だよ」

「だったら強い者いじめだ！ つうか魔王の命令だ！ 魔石を俺に近づけるな！」

「魔王の姿を見せてもらってないから、その命令は受け付けられませくん。わたしにいやらしい命令をさせたいのなら、魔王の姿をちゃんと見せてね！」

「お前は俺を変態だと認識しているんだな！？」

「男の子はみんな変態なんですよ？」

「全国の男の子に謝れ！」

「はいはい、それは魔王様が魔王の姿を見せてくれてからね」

イリヤの手に握られている魔石が、ゆっくりと俺の胸へと接近する。手も動かせず、足も動かさない俺に出来る事があるとすれば、ひたすらにやめてくださいと懇願する事だけだった。

懇願も虚しく、俺の服に魔石が触れた。その直後に魔石が黒い輝きを放ち、俺の体を包み込んでいく。

「さあ魔王様！ あなたのカッコイイ姿をわたしに見せちゃって！」

瞳を爛々とさせ、イリヤは声を弾ませる。それでいて体を未だに

抑えている辺りしつかりものだ。

ただ、イリヤのテンションに反比例して俺のテンションはどんどん落ちていく。この服が完全に黒ドレスに変わる時、俺は正気ではないかな？

服がどんどん変わっていく。徐々に、ゆっくりと学校の夏服からあの忌々しい黒ドレスへと。

いきなり魔王の力が超覚醒して時を止められたり出来ないかと真面目に願ったがそんな奇跡が起こる筈もなく、俺は夏服から黒ドレスへと着替えを完了させたのであった。

正気ではいられた。でも、込み上げてくる羞恥心によって体がとてつもなく熱い。上にいるイリヤに体温が伝わるのではないかと思うくらいだ。

イリヤから視線を外す。もう何も言いたくない。穴があつたら入りたい。

.....

イリヤも言葉を失っているようだ。そりゃそうだ、男の女装を見たんだから当然ショックを受けるよな。

数秒間の沈黙。そしてその後イリヤが発した言葉は蔑みや嫌悪と
いった部類の言葉ではなかった。

「……あは、あはははははは！なるほどね！これは変身したくないよね！魔王の姿がまさか黒ドレスなんて……あっははははははははは！」

清々しいくらい大声で笑われた。ひいひいと苦しそうに呼吸しながら、腹を抱えて笑っている。

「く、苦しいっ！ 笑いが止まらないよ！ つくふ、くふふふふふ

「！
……………」

罵倒されたりするかと思ったが、そんな事はなかったようだ。まあ、屈辱的な気持ちになる事には変わらないけど。

「はあ。笑い疲れちゃった。でも似合ってるからいいんじゃない？
玲お嬢様？」

「からかわないでくれ。これでも落ち込んでるんだ」

「えゝ、あんまり違和感ないのは事実なんだけどもなあ。……でも、魔王様の女装姿はやっぱり……あははははははははは！」

押さえつけられた体は既に解放されている。だけど、今の俺には起き上がる気力がなかった。

数分間、図書室に大きな笑い声が響き渡った。

俺と悪魔と同級生

俺を辱めに合わせる事で悪魔と魔王の姿の見せ合いは終了した。イリヤの見たがっていた刻印は俺が魔王化すると右の手の甲に表れるらしく、散々笑われた後に俺は手の甲に出現した刻印の存在に気付いた。

夏服に戻り、げんなりとした気分で図書室を出て、今は一階の下駄箱目指して階段を降りている。

「早く純血派と戦いたいなあ。そうしたら、また魔王様の可愛い姿が見れるよね！」

隣を歩くイリヤの表情は生き生きとしている。対して俺は水分を吸われた植物の様に元気がない。

「嫌だ！ もう絶対魔王の姿にはならないからな。俺には勇者の力もあるんだから、そっちを使って戦えばいいわけだし」

勇者もコスプレまがいな格好だが、それでもあの黒ドレスに比べれば遥かにマシだ。あれを着る度に、俺の精神はズバズバと削られていく。

「えーっ！ もったいないよそんなの！ 恥ずかしがってる魔王様の姿が見れないじゃん！」

「見なくていい！ それに、俺は進んで女装をするほど堕ちた人間じゃない！」

「むうう。それならまた不意を突いて魔石を使えばいいもん！ みんなの前で魔王様の黒ドレスを披露するよ！」

「それは冗談だよな？ もし冗談じゃなかったら俺は学校に来れな

くなるんだけど」

「週に一回、わたしに魔王の姿を見せてくれるならそれで手を打ちましょう！」

「まさかの本気！？ 交換条件を出すとは恐ろしい悪魔だ！」

「そんなに褒められると照れちゃうよー！」

「褒めてねえ！」

俺が男であり続けられる為に奮闘していると、いつの間にか下駄箱の前にまで来ていた。と、下駄箱からローファ―を取り出したところで見知った人物と鉢合わせした。

「おう、すずは。今日は帰りが遅いんだな」

「……あ、玲君」

すずはが昇降口前で立っていた。昇降口の外から差し込む夕日の光をバックに立つその姿はとても綺麗だ。

「どうしたんだよこんなところで。今日は先に帰ってていいって言ったのに。……あ、もしかして誰かと待ち合わせとか？」

首を横にブンブンと横に振り、すずはが俺の近くまでゆっくりと歩いてくる。

「今日は委員会の仕事があつて、それで帰りが遅くなったの。教室に鞆を取りに戻ったら、隣のクラスに玲君の鞆が置いてあったからここで待つてようかなつて」

「つまり、俺を待つていてくれたのか？」

「うん。……迷惑だったかな？」

「とんでもない。むしろ待たせて悪かった」

すずはの優しさに心がほんのりと温くなる。どうしてこんなに良い子が誰とも付き合っていないんだろう？

「それじゃあ一緒に帰ろう。待たせたお詫びに飲み物おごるよ」

「え、い、いいよ！ 私が勝手に待ってただけだし、私は玲君と帰ればそれで十分だよ」

くうくう！　なんて良い子なんだ！　さっきまで俺を笑っていた悪魔女とは天地の差だ。

「天地の差で悪かったね。彩文君」

振り向くと、むすっとした表情でイリヤが立っていた。なぜ俺の心理を見透かしているんだお前は。

「玲君、その女の子は？」

すずはは首を傾げてイリヤへと視線を向ける。そうか、この二人はこれが初対面なのか。

「ああ、紹介するよ。クラスメイトの金城イリヤだ。この間昼飯の時に話題になった例の転校生だよ」

「……転校生……私の恋敵……」

ブツブツと何か言うのと、じつとすずはがイリヤを凝視し始めた。気のせいか睨んでいるようにも見える。

その視線に応えるように、イリヤが一步前に足を踏み出した。金色の髪をさらりと払い、ふっと優しい笑みを浮べる。

「初めまして。金城イリヤです。彩文君とはすごく、すっごく仲良くしてるの。これからよろしく」

すると、すずはも会釈しながら自己紹介を始める。

「空宮すずはです。私も玲君とは登下校を共にするくらい仲良しです。こちらこそよろしくね」

二人はしばらく見つめ合い、互いに笑みを浮べていた。仲良くなりそうだなによりだ。

「さて、そろそろ帰るとするか」

昇降口の前にいつまでも突っ立っているわけにもいかない。通行人の邪魔になっちまうからな。

「彩文君。そこで提案なんだけど、今日は空宮さんじゃなくてわたしと帰らない？ わたし達、今日仲良くなったばかりだし」

「ん？ ああ、確かにそうだなあ」

色々と聞きたい事もあるし、親睦を深めるという意味においてもそれは必要な事かもしれない。

「れ、玲君、今日は私と帰るんだよね？ 金城さんじゃなくて、私と！」

「約束したのはすずはが先だし、やっぱりそうした方がいいかな」

すずはにしては珍しく迫力がある。待たせたのはやっぱり悪いし、ここはすずはと帰るべきか。

「彩文君！ 約束と言っても今したばかりなんだから破ったって大丈夫だよ！ だからわたしと帰ろうよ！」

「玲君は約束を破るような人じゃないよ！　そうだよ玲君？　今日は私と帰ってくれるよね？」

「お、俺はどちらと帰っても別にいいんだけど」

「じゃあわたし（私）と帰ろうよ！」

おお、見事にハモった。知り合って数分でこれだけ息があつてならきつと仲良くなれるよな。

視線を交錯させているすずはとイリヤ。その間に俺。何とも不思議な図だ。

「というかさ、それならみんなで帰ればいいんじゃないか？　どちらかを一人にして帰るより、三人で帰った方が楽しいと思うぜ？」

「……彩文君がそう言うならしょうがないね」

「そうだね、玲君がそれでいいなら……」

あれ？　二人ともあまり納得していない？　知り合ったばかりだから、お互いに遠慮してるのかな。

「よし。それじゃあ帰ろうぜ」

なら、俺が何とか仲を取り持ってやらないといけないよな。あまりそういうのは得意じゃないけど、俺としては二人に仲良くなってもらいたい。

渋々といった様子の二人を連れて校門へと歩き出す。校庭ではサッカー部や陸上部が大会に向けて練習に励んでいた。

「二人は部活動に入ってるのか？」

これと言って話したいという話もないから、適当な話題を出してみる事にした。

俺の左右を歩くすずはとイリヤは、ちゃんとこちらに視線を向け

てくれる。

先に口を開いたのはイリヤだ。

「わたしは帰国子女だから部活に入る気はないよ」

「帰国子女？　じゃあ前の学校は外国だったのか？」

「うん、どこの国かは秘密だけどね」

イリヤはこれでも悪魔だったりするから、オチとしては海外と言いつつ異世界から来ましただなんて事もありうる。

「すずはも部活には入ってないんだよね？」

「高校は勉強が大変だから、部活動をしていられるような余裕は私にはないかな。だから、部活をやりながら勉強もちゃんとやっている人はすごいと思う」

「確かに。俺も部活には入ってないけど勉強は大変だ。部活をやりながらとなると、更に時間がないんだよね」

俺ら帰宅部と部活動所属者の帰宅時間の差は三時間ぐらいだ。この三時間が日々重なっていくわけだから、部活動をする人間は俺らよりも自由な時間が遥かに少ないという事になる。

校門を出て、俺らは学校前にある坂を下る。朝はこの坂を上ってこないといけないからしんどい。照りつける太陽と焼けたアスファルトが俺を苦しめるのだ。

坂を下り終えて、しばらく道を直進する。周りの温度は、朝に比べれば幾分涼しく感じられる。

「……………」

目だけ動かして横を歩く二人を見る。坂を下るまで会話を振らないで様子を見ていたんだが、二人共積極的に話そうという気はあま

りないらしい。現に、この二人が会話をしたのは昇降口にいた時だけだ。

「……うーん」

思わず呻き声が洩れる。間を取り持つって何をしたらいいかわからないから難しいな。

「どうしたの彩文君？ そんな掃除機の吸引音みたいな声をだして」「俺の呻き声はそんなユーモアにとんでねえ。……ただ色々と考え事をしてただけだ」

「ふーん、女の子二人と帰りながら別の事を考えてるんだ……もしかして彩文君はBしだったりするの？」

「んなわけないだろ。俺はその手の人達の気持ちを理解したくないよ」

「なるほど、じゃあバイなんだね！」

格上げされた。

「そ、そうなの玲君！？」

「……すずは、俺が男と女、両方と付き合えるような強者に見えるか？」

「……………」

しばしの間視線を合わせていると、頬を赤らめてそっぽを向かれた。お、お前には俺がバイに見えるのか！？

もしこれで明日俺に関する噂が学校に流れていたら、それは間違いないく俺がバイだという不名誉極まりない噂なんだろうな。現代社会はデマ情報がたくさん流通しているから変な噂が流れてもおかしい。

溜息をつくど、イリヤがひょいと俺の顔を覗きこんできた。

「元気がないよ。どうかしたの？」

「俺をいじった張本人が言う言葉なのかそれは！」

「あつはつは。何せわたし、Sですから！」

「自信満々に言われても」

「彩文君にはSっ気のある女の子の方が合ってるよ！　わたしなんてぴったりじゃん！」

さりげなく腕を組まれる。イリヤの体温がじかに伝わってきて落ち着かない。心臓がドクドクと強く脈打つ。

……そ、それに胸が当たってるんだが。

「ふふ、彩文君が考えてる事がわたしには良く分かるよ。彩文君も男の子だもんね」

「っ！」

いじわるな笑みを浮べてイリヤは俺の方を見た。こいつ、わざとやってやがる！？

たじろぐ俺を愉快そうに見て、イリヤは更に言葉を紡ぐ。

「彩文君、いつそわたしと付き合っちゃえばいいよ。Mな彩文君にとって損はないと思うけどなあ」

腕を襲うその柔らかさに思考がオーバーヒートして、普段なら間違はなくツツコンでいたであろう部分をうっかりスルーしてしまった。どうしよう。言葉も出ない。

「そ、そんなのダメ！　玲君と付き合うなんてダメ！」

すずはさん？ 受け取り方によってはまるで俺が悪い男みたいじゃないか？

「どうして駄目なの？ 彩文君は誰とも付き合ってないんでしょ？ それなら断る理由がないと思うけど」

「玲君に付き合おうという気持ちがないなら交際は成立しないよ！ 玲君は金城さんに好意を抱いてないよね？ そうだよな？」

好意を抱いてない前提で話が進んでいる。まあ、確かにそんな気持ちはないんだが。

すずはの迫力に圧倒されつつ、俺はこくりと首を頷かせる。

「ああ、何せ今日話したばかりだからな。俺はよくイリヤの事を知らないし」

「だよな！ お互いをよく知りもしない内に付き合ったりなんてしないよね！」

ほっと胸を撫で下ろすようにすずはが息をつく。そしてなぜか俺の腕を取り、イリヤと同じ様に腕を組んできた。

「……すずは？ どうしてお前まで腕を？」

「だ、駄目？」

「い、いや、駄目じゃないけどさ」

言っと、安心したようにすずはは俺の腕に寄りかかる。さらりと髪が風で揺れて、女の子特有の良い香りが漂った。

(……ど、どうしてこうなった？)

ここは誰もいないところではなく、普通に人が歩いている外だ。

そんな場所なぜ俺は女の子二人に腕を取られているんだ？

いや、俺も男だ。嬉しくないわけがない。こういう情況にも憧れを感じていたさ。でも、流石に人に見られていると思うと嬉しさよりも恥ずかしさが上回る。自分でも分かるほどに体温が上昇していく。

「空宮さんまで彩文君と腕を組む必要はないよね？ それとも、空宮さんは彩文君の事が好きなの？」

「っ！？」

すずはは赤面して顔を俯かせる。冗談だとしても、すずはの性格上本人の前で否定は出来ないのだろう。俺を傷つけないための配慮だろうが、別に気を遣わなくても良いのに。

「すぐに答えられないって事は違うんだよね？ なら手を組む必要はないじゃん！ わたしは彩文君ともっと仲良くなりたいから腕を組むけどね！」

「そ、それなら私だって玲君ともっと仲良くなりたいもん！」

ぐおっ！ お前ら、体を寄せすぎだ！ 良い匂いがする上に二人の胸が当たってる！

「そうだ！ どっちと腕を組みたいか、彩文君に決めてもらおうよ！ 選ばれなかった方は素直に組んだ腕を離す！ それでいいね！」
「う、うんいいよ！ 負けないんだから！」

会話に割り込みたいが二人の雰囲気がそうさせまいと拒むように漂っている。俺のチキンハートがそう感じさせるのかもしれない。すずはが真っ直ぐな瞳で俺へと視線を向けた。

「玲君、金城さんより私と腕を組んでの方がいいよね？」

「いやいや、絶対に彩文君はわたしと腕を組みたい筈だよ！」

「……なあ、どちらも腕を離すという選択肢はないのか？」

「「ない！」」

決死の覚悟で放った言葉は二人のハーモニーによって玉砕された。

周りの視線が気になってしょうがないのは俺だけなのか？

「さあ彩文君、継続して腕を組みたい方の名前を言つて！」

「正直に答えてね！ 遠慮なんていらないから！」

「……………」

いきなりどちらと腕が組みたいと言われて即答出来る奴がいたら俺はそいつを大先生と呼んで讃えるだろう。

「……どっちもって選択肢は——」

「「ない！」」

ひい。今度は睨まれた！ 俺何も悪い事してないのに！

前も後ろも封じられた。俺に残された手段は左右にいるどちらかの女の子を選ぶという選択のみ。別に告白されたわけでもないのに、どうしてこんな選択を迫られてるんだ。

見上げてくる二人の瞳がまだかまだかと主張してくる。うう、どうする？ どうするよ俺！

「……………あ」

ある事に気付いた俺はその場で歩みを止めた。それに釣られてすずはとイリヤの歩みも止まる。

「どうしたの玲君？」

不思議そうに聞いてくるすずは。そりゃ声だっと思わず出るぞ。

何でかと言えば、

「もうすぐそこが俺の家なんだよね」

残り二十メートル程度先に十六年間住んでいるマイホームが立っていた。気付かない間に家の傍まで来ていたらしい。

「なぬっ！ ……この勝負はお預けだね！ 次戦う時はこうはいかない！」

「望むところだよ！ それじゃあ玲君、また明日ね」

組まれていた両腕からすると彼女達の腕が離れる。そして二人は、もと来た道を一緒に歩いて帰っていった。

「……何がしたかったんだよ一体」

疑問が頭の中に残留している。女ってよくわからん。

……まあ、最後は二人共積極的に会話していたし、気にする事はないか。

やたら疲れた俺は、すずはとイリヤの姿が見えなくなるのを待って、少し先の自宅へと向かった。

騎士、襲来

「今日から戦いの訓練をした方がいいかもしれないな」

すずはとイリヤの二人と別れてから数時間が経過した。

食卓を三人で囲み、からあげに手を伸ばそうとしていた俺はその手を止める。

「戦うのって、やっぱり俺を狙ってる奴らとだよな？」

「そうだ。勇者側の方はまだ動いていないみたいだが、母さんの話では既に魔王側でお前を狙う派閥が出来ているらしい」

父さんの言葉に母さんが頷いて、変わりに続きを話し始める。

「魔王側は今、混血派と純血派という二つの派閥に分かれているみたいなの。玲は学校があるから必ず外に出なきゃいけないし、外では私達の目も届かないから、真正派はいつそこを狙ってくるかわからないわ」

野菜サラダに盛り付けられたプチトマトをフォークで刺し、母さんは口の中へプチトマトを運ぶ。

「……それで訓練をしようって事か」

止めていた箸の動きを再開。からあげを取り、口の中へと向かわせた。

「ええ。ある程度の戦闘訓練を行えば、あなたはすぐに強くなると思うわ。何せ私と剣君の血を引いているんだもの。事実上敵なし

よ」

「つつても、俺は十六年間一般ピーポーとして生きてきたんだぜ？
そんなに上手くいくかな？」

「何事も前向きに考えていなければ上手くいかない。それに、上手くいかなかったら上手くいくまで訓練すればいい話だ」

父さんからアドバイスをもらった。いやいや、練習しても上手くいかない事なんて幾らでもあるんだぜ？ 中学の時、散々頑張ってたのにテニスでは県大会にすら進めなかったし。

「流石剣君！ そのポジティブな姿勢がとっても素敵！ 玲も剣君を見習いなさい！」

「……へーい」

新婚気分の抜けていない我が両親をジト目で眺めながら、二個目のからあげへと箸を伸ばす。今日は疲れたから食事をしっかり取らないと。

「で、訓練ってどこでやるんだよ？ まさか街中でやるんじゃないだろうな？」

もしそうなら街が瓦礫の山になりそうで恐い。明日のニュース番組で崩壊したこの街を見る事になるかも。

「術を使って結界を張ればそれでも大丈夫だが、真正派が結界を破って襲ってこないとも限らない。それなら外に出るべきではないだろう」

「え、じゃあ家の中でやるの？」

「家の中では狭くて訓練など出来ないだろうに。愛花と俺の術式で異次元空間を作りだす。そこでお前には訓練を行なってもらう事にする」

「……そんな事まで出来るのかよ」

終いにはビックバンを引き起こせるとか言うんじゃないだろうな？ 破滅していく宇宙をこの目で見る事になるのだけは勘弁だぞ。

「食事が終わって三十分後に訓練開始だ。あんまり多く食べない方がいいかもしれないぞ」

既に時遅し。俺はからあげ五個目を口に入れていた。訓練で胃袋から食べ物のリバーシしない事を祈る。

「あ、訓練をする時はもちろん変身しなきゃ駄目よ。普通の状態で訓練を受けたら、多分一発攻撃を食らっただけで病院の集中治療室送りになるから」

リバーシどころの騒ぎではなくなった！ 生きて明日を迎えられるか心配になってきた。

先程まで進んでいた箸も、今はもうすっかり動きが止まっている。

「訓練開始までの間は自由時間だ。ただ、外にだけは出ないようにしろ」

「それは分かってるから大丈夫だ。漫画でも読んで時間を潰すよ」

バトル物の漫画を読めば、戦い方の参考になるかもしれないしな。食欲のなくなった俺は、ごちそうさまをして二階の自室へと向かう。予告通り棚から漫画を取り出して、三十分という中途半端な時間を潰しに掛かる。

何度読み返したか分からないその漫画のページを捲っていく。内容を完璧に理解しているから、読んでても大して面白くない。

「……あ、そういえば宿題が出されてたんだっけ」

ふと頭の片隅から宿題のプリントが顔を覗かせた。ページを捲る手を止め、俺は漫画を閉じる。

机に直進して、その横に置かれている学校鞆に手を伸ばす。チャックを開けてこそそこそと中にある宿題プリントを手探りで見つけて机の上に乗せた。

げんなりしつつもシャープペンと消しゴムを取り出し、問題へと取り掛かる。夏休みの宿題のように答えが付いていればとても楽なんだが、答え合わせは授業でするから生憎答えは配られてない。

十数分間頭を悩ませて宿題へと取りかかったが、勉強をするという習慣が身についていない俺はすぐに集中力を切らせる事になった。

「……何か飲んでくるか」

俺の部屋にはクーラーが設置されていない。扇風機はあるんだが、三十度を軽く越える日が続くこの季節を前にしたら扇風機もあまり意味を成さない。せいぜい生暖かい風を所有者に送ってくれるだけだ。

そんなわけで額から出てきた汗を部屋着の袖で拭い、体外に放出された水分を取り返さんとリビングへ俺は向かった。

リビングに父さん達の姿はない。寝室にでもいるんだろう。リビングからキッチンへと足を踏み入れ、冷蔵庫の中に入っている二リットルのスポーツドリンクを手取る。

コップに注ぐのが面倒だったからその場でラップ飲み。母さんに目撃されていたら注意を受けていただろう。

二百ミリリットル程度の水分を補給し、スポーツドリンクを冷蔵庫の中にする。

(……さて、宿題の続きでもしますかね)

長時間の集中が出来ないのなら、ちよくちよく休みながら勉強するしかない。無理して長時間やろうとすれば、逆に何も考えられなくなりそうだしな。

リビングを出て階段を登ろうとした時、ピンポンというインターフォン独特の音が廊下に響き渡った。

（こんな時間に一体誰だ？）

宅配便か何かかな？ もう一度インターフォンが鳴らされて、俺は小走りで玄関前へと向かう。

「はい、ちょっと待ってくださいーい」

扉の先にいる人物に聞こえているかどうか分からないが、とりあえずそう言って玄関に置いてあるサンダルに足を通す。

二重ロックの掛かった鍵を解除して、俺は外に繋がる扉を開く。

扉の先に立っていたのは宅配便の人でもなく、キャッチセールスを行っているような人でもなかった。

騎士。そう表現するのがぴったりだと思う。

腕や足、胴体に装着された銀色のガントレット。体の後ろに携えられている巨大な剣。暗闇の中、星の様に美しく輝く銀色の髪。それは後ろで束ねられている。俗に言うポニーテールというやつだ。

中世的な顔立ちだが、胸の膨らみを見る限り女である事が分かる。その人物は俺の顔を確認するなり言葉を発した。

「お初にお目にかかります。あなたが勇者の地位を継いだ人間ですね？」

勇者。そんな単語が出てくる奴は普通の人間じゃない。つまり、

こいつは勇者側か悪魔側に属する者だということだ。
こいつの質問に答えるのは簡単だ。でも、もし肯定してしまえばいきなり襲われるかもしれない。

「さしずめ、返答しなければ何も起きないだろうと思っているのでしよう。ご安心ください。この場であなたに危害を加えるつもりはありません」

「……この場じゃなかったら危害を加える気があるって事だよな？」
「ええ」

すんなりと肯定された。もういつそ清々しいくらいに。
扉を閉めて中に入ろうとすると、すかさず扉の間に足をつつまれた。続いて手が掛けられ、無理矢理扉が開かれる。

「申し遅れました。私の名はメルティス・クレバリオン。呼び方はご自由にどうぞ」

「……じゃあメルティス、早速質問を一つさせてくれ。お前は勇者側の存在か？ それとも魔王側の存在なのか？」

メルティスは表情を変えずに答える。

「私は勇者側の者です。それぐらいはこの格好を見て分かんと思いますが」

まあ、確かにそうなんだが、勇者側の人物が仮にも勇者である俺を襲うとか普通なら考えられないだろ。

逃げようにも逃げられない雰囲気の中、メルティスは小さく息をついた。

「今日ここへ私が来たのは、あなたを勇者側の幹部の元へ連れて行く為です。大人しくご投降いただけるのなら、気絶させる以外に危害は加えないと約束します」

「嫌だと言ったら？」

「力尽くにでも」

後ろに携えられている剣の柄に手が伸ばされる。俺を片方の手を突き出して、その動きを制す。

「いいのか？　ここは言ってしまうえば俺のテリトリーだ。その中でお前が行動を起こそうとすれば、家中に仕組んである術式が発動する事になるぞ？」

柄を握ろうとしていた手の動きが止まり、しばらくしてメルティスはその手を下した。

「……そうですね。ここで行動に出るには少々リスクが大きい」

メルティスが言葉を発した直後、足元から眩い光が発生し始めた。

「っ！？　な、なんだ！？」

俺とメルティスを囲むように広がっていく円。これは間違いなく魔方陣だ。

「……まさか、これはお前の仕業なのか？」

青く輝く魔方陣の中、俺は目の前にいる騎士へと問いかける。

「ええ。この場での拘束は難しいだろうと判断しました。ですのでここではない別の場所に移動させていただきます」

光が次第に強まっていく。視界が青い光で埋めつくされて、上下

左右全ての景色が同じになった。

次に体を奇妙な感覚が襲う。地から体が離れたようで、ふわふわと体が浮いている感じた。この感覚を例えるなら、ジェットコースターの落下時に来るあの落ち着かない感じに似ている。

そんな感覚に襲われつつ、景色は変わらず全て青。そう思った直後にその思考は断絶された。

勢い良くぶつけたかの様な衝撃が体を襲い、一瞬息が出来なくなる。何がどうなっているのか分からず、ただ俺は全てが青で統一された視界の中、つまった息を吐き出すように噎せた。

噎せている最中に、青かった視界が少しずつ正常に戻っていく。体を起こし、周りを見渡す。おかしくなっていた目は完全回復を果たし、周りの景色がちゃんと見えるようになった。

「……あれ？」

正常に戻ったかと思ったけど、俺の目はやっぱりおかしいのか？
今いる場所は俺の家の玄関入口だった筈なのに、なんで学校の校庭なんて写しているんだろう。

俺の視界に納まる学校の校庭はとても静かだ。空は黒く塗りつぶされていて辺りは暗い。傍に見える校舎が何だか不気味だ。

「鳩が弓矢を食らった様な顔をしていますね」

声のした方へ首を捻ると、メートルぐらい隣にメルティスの姿があった。……今のはボケてみたのかもしれないが、生憎今はツッコミを入れようという気にはなれない。

「どうなってるんだ？ どうして俺達は校庭のど真ん中に立ってるんだよ？」

「さっきからあなたは質問してばかりですね。空間移動術式なんて

答えるに値しない術式です」

「お前からすれば当たり前のことかもしれないが、数日前まで一般人だった俺からすれば超が付く程の不思議体験なんだよ」

ぶつかる視線を外さずに見続けると、メルティスは小さく溜息をついた。表情は一貫して変わらない。

「……空間移動術式は移動を始める場所と移動したい場所の二箇所に座標を固定し、術式に魔力を流し込むことで発動します。あなたの家の玄関を座標Aとして、ここを座標Bと置いて説明するなら、座標Aから流し込まれた魔力で別次元への扉を開き、その別次元の中を通って座標Bの存在するこの三次元へと戻ってくるのです。分かりましたか？」

いや全然。中学の頃の成績が中の下だった俺にそんな難しい説明が理解出来るわけがない。

俺の反応を見ず、メルティスは話を再開する。

「では、空間移動術式の説明も終わったので、そろそろ危害を加えさせてもらってもよろしいですか？」

「……普通危害を加える相手に許可を得ようとは思えないよな。それに、どうせ駄目だと言っても危害を加える気にいるんだろ？」

背中 of 剣へと手を伸ばし、メルティスは柄を握った。

「もう一度問います。大人しくご投降いただけますか？ それとも無理矢理連れて行かれますか？」

ピリピリと肌に緊張感が走る。日常生活でここまでの緊張感は味わった事がない。足が軽く震えを起こした。

だけど、何もしないで連れて行かれるのも嫌だ。

勇者の姿を脳内でイメージ。次の瞬間に眩い輝きを放ち、俺は銀の鎧に身を包んだ。

「もちろん抵抗させてもらおう！」

脇に携えられた鞘から剣を抜き、強く大地を踏みしめる。自分の体ではないのではないかと思うほど勇者状態になった俺の身体能力は向上していた。

一瞬で間合いを詰め、メルティスに向かって剣を振りぬく。横に薙ぐように放った俺の斬撃は、あっさりとメルティスの握る剣によって防がれた。

「奇襲はあまり褒められる事ではありませんよ。それに、正義であるべき勇者が不意をつくなど誇りに欠ける。……まあ、あなたの場合は魔王の血を引いているので、例外なのかもしれません」

「俺を捉えようとしているのは、やっぱりそれが理由なのか？」

同じ勇者側なのに、俺を拘束しようとする理由なんてそれぐらいしかないだろう。

「魔王でもあるあなたを拘束し、我々が監視し続ければ魔王という脅威を封じ込める事が出来る。そして同時に勇者を保有している事になる私達勇者側は、魔王側に対して圧倒的優位に立つ事が出来ますから」

剣と剣がぶつかり合い、校庭に甲高い金属音が響く。更に剣をぶつけ合い、お互いに数メートルの間合いを設けた。

「俺に対する尊厳とか、そういうものが一切感じられないんだが」

「当然です。何せあなたは、魔王でもあるのですから」

ついさっきまで、俺は自分が勇者で魔王である事を軽んじていた。最初にあつた魔王側の人物であるイリヤが、勇者でもある俺に敵意を向けていなかったから安心していたのかもしれない。

だけど、これが俺の置かれた本来の状況なんだ。勇者側と魔王側、どちらから狙われてもおかしくない自分の立ち位置。

先の事を考えると気が重くなる。我ながら、とんでもない宿命を背負ってしまったものだ。

何も言わずにいると、メルティスは一步前に足を踏み出した。

「呪うのなら、あなた自身の運命を呪ってください」

「……呪うつもりなんてないさ。俺は捕まる気なんてないんだからな！」

体を捻って地面を蹴る。身体能力が飛躍的に上昇した俺は宙に高く飛び上がり、空を駆ける。

この場を切り抜ける手段として戦闘はなるべく避けたい。戦闘経験皆無な俺が真正面から向かっていても、勝率はあまり高くないだろう。加えて、あまり話の通じる相手でもない。確固たる意思の元動いている彼女は、俺が何と言おうと力尽くで拘束しようとするに違いない。それなら、取れる手段は限られる。

逃走。現実的に考えてこれが最善の選択だ。闘争よりも逃走の方が救われる可能性は高い。

校庭の真ん中から端まで時間はあまり掛からない。俺は地面に着地して、学校の外へ向かって跳躍した。

アルバディウス

『デュエル・サンクチュアリ』

どこからか、そんな単語が鼓膜を振るわせた。

俺が越えようとしていた柵のラインから、突如膜の様なものが上へ上へと伸びていく。その膜に触れた瞬間、自分の視界が、世界が反転した。

「!？」

ぐるぐると回る世界。膜によって体が弾き飛ばされたのだと知って、俺は空中で体制を整え着地する。本来の俺なら、きっと受身すら出来ずに地面を転がっていたんだろうな。

「逃げようとしても無駄ですよ」

振り向くと、ゆっくりメルティスがこちらに近づいていた。銀色のポニーテールが風で揺れる。

「これもお前の仕業かよ」

「はい。デュエル・サンクチュアリの中にいる私達が外に出るには、どちらかが勝利し、どちらかが敗北しなければなりません。これであなたは私と戦うしかなかった」

下段に構えられるメルティスの剣。暗闇の中、その刃がきらりと輝いた。

「さあ、覚悟してください。時間を掛けるつもりはありませんので」

ダンッ！ と地面を蹴る音が聞こえた。

一瞬で懐に入ってきたメルティスは、下段に構えていた剣を斜めに振り上げる。

「くっ！」

ギリギリでバックステップ。先程俺がいた場所を剣が通過していた。

（は、速い！）

反応した自分を褒めてやりたい。もし避けれていなかったら、俺の体に大きな切り傷ができるところだった。

距離を開こうと更に後ろへ下がろうとするが、メルティスは一步で俺との間合いを再び詰めてきた。繰り出された斬撃をなんとか刃で受け止める。

「やはり、勇者の地位を継いだばかりのあなたは、戦闘に関しては素人なのですね。先の一太刀を見て、そう確信しました」

「……だったら手を抜いてくれ。素人相手に本気を出すなんて大人気ないと思わないか？」

「いえ、全力で戦わなければ相手に失礼なので」

至近距離での打ち合い。もちろん俺は防戦一方。攻撃に転ずるチャンスさえ与えてもらえない。

「隙だらけですね」

脇腹にメルティスの一太刀が放たれる。剣で受け止めるのが間に合わない！

ガッ！ 見事に命中させられた斬撃で、俺は後方に数メートル飛ばされる。両足で着地するも、脇腹の痛みで思わず膝をついた。

「鎧を着てても、すっげえ痛え……」

頑丈な鎧のおかげで脇腹から出血大サーブスという事にはならないものの、骨に響くような鈍い痛みだけはしっかり体に伝わってきた。

「斬撃を繰り出す際に魔力を剣に込めました。鎧を着ていてもダメージを防ぎきる事は出来ません。それに、次に脇腹へ斬撃を放てばあなたの敗北は決まったも同然でしょう」
「はなから勝率なんて限りなく低かったけどな」

我ながら捻くれた返答をして、脇腹の痛みを堪えて立ち上がる。

「なら、もう諦めてもらえませんか？ これ以上無駄に剣を振るいたくない」

「それは断る。戦っているなら無理をしてもお前に勝ってやるさ。そんで家に帰って寝る！」

今度はこっちの番だ。脇腹の痛みを無視して、剣を構えるメルテイスの元へと駆ける。

「臆す事無く向かってくるその姿勢には敬意を表しますが、實力差は歴然です。どうしようというのですか？」

「こっするんだよ！」

勇者や魔王の姿になると、自分の奥底にある力を自覚できるようになる。それが父さんや母さんが言う魔力だというのも、何となく

分かっていた。

メルティスの言葉をヒントに俺は奥底にある魔力を剣へと注ぐ。剣から青い輝きが溢れ出し、その刃を包み込んだ。

驚くメルティスに向け、俺はその青き刃を振るう。

「なっ……『フォース・シールド!』」

メルティスと俺の間に巨大な魔方阵が現れる。青い刃と魔方阵が衝突した瞬間、辺りに衝撃の余波が発生した。

拮抗する青き刃と魔方阵。この一発を食らわせる事が出来れば、俺に勝機が舞い込んでくる筈だ。このチャンスに逃すわけにはいかない!

「おおおおおおおっ!」

更に魔力を剣へと流し込む。力を与えられた剣は輝きを増し、その威力を増大させていく。

拮抗していた力のバランスが傾いた。俺は剣を振りぬいて、巨大な魔方阵を切り裂く。

轟音が夜の校庭に響き渡る。視界が煙に包まれる前に俺は後ろへと下がった。

……何事もやってみるものだな。まさか上手くいくとは思ってなかった。

正直言えば出来るという確信はなかった。いくら勇者と魔王の地位を継いだといっても、数日前まで俺は一般人だったのだから。

今尚青く輝く剣を見下ろして溜息をつく。いよいよ本格的に人間離れしてきたな、俺。

「まあ、これが俺の宿命ってやつなら、それを受け入れるしかないんだろうけど」

受け入れて、自分で道を切り開いていけばいいしな。

踵を返して、俺はその場から立ち去ろうとする。だけど、物事つてのはつくづく自分の思い通りにいかないみたいだ。

「どこに行く気です？ まさか、今の一撃で私を倒したとでも思いましたか？」

煙が風によつて流れて晴れていく。その中から姿を現したのは、どこにも怪我を負っていないメルティスだった。

「……おいおい、なんでお前はそんなにピンピンしてんだよ」

手ごたえはあった。剣を伝つてメルティスを捉える感覚は確かにあったのに。

「フォース・シールドが碎かれる瞬間に、第二のフォース・シールドを展開しました。衝撃は全て第二の守りによつて防がれ、私へは届いていなかったのですよ」

必死になつて打ち込んだ俺の攻撃は結局防がれていたというわけか。

「しかし、あなたの成長速度は驚異的だ。これ以上長引けば、私は足をすくわれる事になるかもしれません。ですので終わりにしましょう。最早手段を選んでいられなさそうですから」

空いている片方の手で、メルティスはパチンと指を鳴らした。

直後、俺の足や腕に小さな魔方阵が出現する。な、なんだこれ？ 体が動かないぞ？

必死になつて腕や足を動かそうとするが、まるでビクともしない。石になつたかのようなようだ。

「くそっ！　どうなってるんだよこれ！」

「拘束術式です。魔力を多く消費するので、出来れば使いたくなかったのですが」

「……お前、思いつきり手加減してるじゃんか」

「いえ、剣技に関しては手を抜いてなどいません。ただ、私は剣技よりもこちらの方が得意なのです」

メルティスの握っていた剣が一瞬にして姿を変える。黄金の輝きを放ち始めたそれは――。

「ゆ、弓？」

「ええ。名はアルバディウス。魔力を一点に集中し、矢として放つ私の相棒です」

弓の弦の部分に、黄金の光が収束していく。少しずつそれは長くなり、矢の形へと姿を変えていく。

最悪だ。拘束されて身動きが取れないこの状況で相手の必殺技。魔力を注ぐ事は出来ても、魔方阵の展開の仕方は分からない俺には、もうすぐ放たれるあの一撃を防ぐ術はない。

呻き声を上げつつ拘束を破ろうと努力する。しかし、いくら必死になっても拘束を破る事はできなかった。

「無駄ですよ。拘束術式は魔力を多く使う分、強力な術式です。いくら勇者と魔王の素質を持っているあなたでも、簡単にはこの拘束を解く事は出来ない。そして――」

ジジジジツと黄金の光が音を立てる。魔力は完全に矢の形になり、弓は俺に向けて定められた。

「その拘束時間があれば、私のアルバディウスは決して外れること

はない」

動けずに弓を向けられているこの感じは、断頭台に首を乗せられて刃が下されるのを待つ死刑囚の様な気分だ。

俺の額から汗がすべり落ちる。

「運がよければ五体満足で生き残れるでしょう。死なないだけありがたいと思ってください」

拘束が時間切れで解けてくれるという希望はない。じゃあ残された手段は？ 命乞い？ はたまた奇跡的な覚醒によつての脱出？

後者になら期待出来るかと思つたが、矢が放たれた瞬間に覚醒しても遅い。

黄金の弓の弦が後ろに引かれていく。引かれる力へ逆らうように弦はしなり、今か今かと矢を撃つ瞬間を待ちわびている。

「……なあ、最後に一つだけ、聞かせてもらつてもいいか？」

返答はない。ただ、弦を握るその手に力が更に加えられる。

「お前は、勇者で魔王な俺の事をどう思う？」

メルティスの返答なしでも俺は問いかける。答えられないと分かつていても、聞かずにはいらなかった。

第三者からすれば、俺は一体どんな存在なのかを。

黄金の光を纏つた弓矢は、その輝きを更に増していく。弦に加えられる力も最大値に達した。これで、メルティスはいつでも俺へ攻撃する事が出来る。

夜の校庭には、弓から発せられるジジジッという音だけが響く。肌を撫でる風は温くて、心地良いとは言い難かった。

「……矛盾しています。あなたの在り方は」

手から黄金の矢が離された。それは一瞬で移動して、俺の視界を黄金一色に染め上げる。

眩い光の中に自分の意識が溶けていった。

悪魔VS騎士

もう駄目だと思った。

だけど、奇跡は俺の予想しなかった形で叶う事になる。

メルティスの弓、アルバディウスは突如俺の前に現れた人物によって弾き飛ばされた。

その弾かれた弓は俺から少し離れた場所に落下し、轟音と共に大地にクレーターを作り出す。

深々と空いたその穴から、俺は目の前に立つ人物へと視線を向ける。

闇の中輝く金色の髪はまるで月のよう。コウモリのような黒い羽は暗闇に溶け込み、纏われた赤いドレスが彼女の存在感を際立たせている。

「数時間ぶりだね、魔王様！　なんだかピンチみたいだったから助けに来たよ」

金城イリヤ。真命はルーテル。時期の外れた転校生にして俺のクラスメイト。そして正体が悪魔な女の子が俺の前に立っていた。

「なんでお前は俺がここに？」

「わたし達は運命の糸で繋がってるからだよ！」

「理由になつてねえ！」

イリヤが現れて緊張感が粉々になったな。こんなやり取りをしていたら、数十秒前に絶対絶命だった事を忘れてしまいそうだ。

「……その姿、あなたは悪魔ですね。デュエル・サンクチュアリには私と彩文殿以外立ち入りできない筈ですが」

緩んだ空気を元に戻さんとメルティスが会話に混じってきた。アルバティウスをもう一度構え、俺らの動きを牽制する。

「ちつつち。残念ながらあんたは一つ見落としている事があるよ。わたしは別に、結界を破ってここに入ってきたわけじゃない」

外部からの入口を全て封じられて、それを破らずに侵入する方法なんて存在するのか？

ちよつとした推理に挑戦する心境で侵入方法を考えてみる。考え始めて六秒で諦めた。

だが、俺が六秒考えても分からなかった謎に、メルティスはあっさりと正解を提示する。

「なるほど、あなたは最初から学校内にいたのですね。いかなる武器、そして移動術式を持ってしても突破する事の出来ないデュエル・サンクチュアリでも、既にその空間に存在する人物に関してはどうしようもない」

「大正解〜！ あんた、きっとホームズにも負けない名探偵になれるよ！」

推理と言うよりはなぞなぞだった。イリヤ、今すぐにシャーロット・ホームズに謝れ。

「って事は、ルーテルは学校内にいたって事だよな？　なんで夜の学校なんかに？」

「夜の学校は悪魔にとってすごい快適な場所なんだよ。いるだけで魔力が少しずつ回復するし、喧騒もないしね。例えるなら温泉に入っているような感じかな」

「……悪魔って水とかお湯みたいな神聖なものは駄目なんじゃないか

「つたつけ？」

「それも世間一般のイメージに過ぎないよ。そんなじゃわたし達弱点だらけで、今頃勇者側に狩られつくしてるよ」

世間一般の悪魔のイメージがことごとく覆されていく。これから悪魔が出てくるゲームをやったりしたら、現実存在する悪魔とのギャップに違和感を覚えるかもしれないな。

「さて、そろそろ無駄話は終わりにしましょう。私はあなたに用はなく、彩文殿に用がありますので」

「ひつどーい！ 魔王様、なんだかあの人わたしに冷たいよ！」

緊張感を漂わせようとするメルティスに空気を緩めるイリヤ。さっきまでの臨戦態勢はどこへやらだ。

「……どうやら、あなたを先に倒す必要がありそうですね」

「おっ、やる気になってくれた！ 魔王様、そこでわたしの戦いぶりを観戦しててね！」

イリヤはウインクして顔を前に向ける。

風で赤いドレスのスカートがはためいた。

「アルバティウス！」

メルティスが叫ぶと、アルバティウスがそれに呼応するように黄金の光を放つ。一本の矢と化した魔力が、一直線にイリヤへと向かう。

だが、イリヤはそれを軽々と弾く。軌道が横にずれた矢はまたもや校庭の大地を抉った。

だが、メルティスの攻撃は止まらない。

アルバティウスから次々と黄金の矢が撃ち出される。真近で流星群を見ているような気分になったが、あれが一つでも俺に当たれば死ぬんだと思うとゾッとする。

「あはは、たくさん撃てば仕留められると思ってるの？」

イリヤの足元に一瞬で赤い魔方阵が出現した。赤い光が瞬間的に収束され、黄金の流星群へと放たれる。

直後、振動が空気を大きく振るわせた。

互いの技が相殺されて小さな爆発が発生。巻き上げられた砂埃が目に入って視界を滲ませた。

目を開けられずにもがいていると、すぐそばから声を掛けられる。

「魔王様はそこでゆっくりしてて。五分であの人ボッコボコにしてくるから！」

弾んだ声の主の気配がどんどん遠ざかっていく。少し先の方でまた爆音が聞こえた。

見えない恐怖と戦っていると、動かなかった手足が動くようになった。やっと拘束が外れたみたいだ。

すかさず瞼を擦る。目の内部に入ってきた砂を無理矢理外へ押し出し、涙で滲んだ目を見開いた。

「ええっ!？」

声が裏返るほど驚く。

だって、校庭がグラウンドキャニオンみたいにでこぼこしてるんだもんよ。

俺の立っている位置から一步先は奈落の底になっていた。こんな短時間で何をすれば地形変動を起こせるのか教えてくれよ二人共！その問題の二人だけど、現在大絶賛飛行中だ。空に浮かび上がる二人は、なにやら光みたいなものを撃ち合っている。

術式も作れず、空も飛べない俺はただただ二人の戦いを見守っている事しかできない。

上空での戦いはまさに一進一退の攻防。どちらも引かず、どちらも押さず、互いが拮抗した状態での戦闘が続いた。

そこから激闘約三十分。イリヤの設けたタイムは当の昔に過ぎていた。

空を華麗に待っていた彼女達は、既に地へと帰還なさっている。ちなみにグランドキヤニオンと化していた校庭はすっかり元通りになっている。

二人は地に膝をついて肩で息をしていた。これ以上戦えそうにはない。

「……まさか、あなたがここまでやるとは思いませんでした」

「……それはこっちも同じだよ。五分で倒すって魔王様に約束したのに、恥かしいやつだ。ごめんね魔王様」

返答に困った俺はとりあえず愛想笑いを浮べる。

アルバティウスを剣の姿にして、それを支えにメルティスは立ち上がる。

「彩文殿。あなたの傍には優秀な悪魔がついていますね。あなたは魔王側に肩入れしているのですか？」

「いや、俺は勇者側とか魔王側とか、ぶっちゃけ言えばどうでもいい」

俺の返答が以外だったのか、メルティスはぽかんとした表情になる。こんな表情も出来るんだな。

意外に思いながら、俺はそのまま言葉を紡ぐ。

「別に勇者や魔王の後継者として育てられてきた覚えのない俺は、どっちが正しくてどっちが間違ってるか分からないんだよ」

勇者が正義。魔王が悪という考え方は常識に捉われ過ぎている。

人間は少なくとも自分が正しいと思った方に道を進める。それが世間一般では間違っている事なのだとしても、決めた本人からすればそれが正しい事になる。

一人一人によって正義なんて様々に形を変えるのだから、一重にこれが正義だという風には断言できない。

「こう言つと馬鹿みたいんだけどさ、勇者側と魔王側が争う理由ってなんなんだよ？ 仲良くしようと思えば仲良く出来るんじゃないのか？ なんせそれを証明するかのように、俺の両親が元勇者と元魔王じゃないか」

「……………」

「だから、俺はどちら側にも肩入れする気はない。俺は自分の身を守る為に戦っただけだ」

「では、なぜ悪魔を従えているのです？ それこそ肩入れしている証拠なのではないですか？」

む、なかなか頑固だ。こちらの気持ちを簡単に受け入れてくれない。

イリヤに視線を送ると、俺の意図を理解したのか頷いてくれた。

「誤解しているみたいだけど、魔王様はわたしを従えてなんかいいよ。わたしが勝手に魔王様にくっついてるだけだもん」

「……利益が望めないのに、一緒にいるというのですか？」

「逆に聞くけど、利益なんて必要あるの？ わたしはただ、魔王様

と一緒にいられればそれでいいの」

イリヤの笑顔が俺へと向けられる。不意に見せられたその笑顔はとても可愛かった。

思わず俺は顔を背ける。その百点満点の笑顔を直視し続けられるほど、俺は女の子に耐性を持っていない。

「……私には理解しかねます。何の目的もなく、付き従うなど」

言葉と共にメルティスの足元から青色の魔方陣が出現した。優しい光がメルティスを包み込む。

「じゃあね。あんたとの戦い、とっても楽しかったよ」

魔方陣が収縮していき、小さくなっていく。

メルティスの姿は光に包まれ、そのままその場から姿を消した。空間移動術式を使っただけだ。

先程までの戦いの喧騒がまるで嘘のようだ。夜の学校には静けさが戻り、不気味な雰囲気がかもし出し始める。

「ああ、なんだかすごい疲れたなあ」

最後は戦ってないけど、戦いは見ているだけでも疲れる。首の骨を回すと良い感じに音があった。

「お前が助けてくれなかったら、多分俺は死んでたよ。ありがとな、

ルーテル」

礼を言つと、イリヤははにかみながら頷いた。

「さて、そろそろ家にゴーしようか」

そう言つて両腕を高く突き出して、「んー」の気持ち良さそうに伸びをするイリヤ。さっきの戦いの疲労をあまり感じさせない。

イリヤと一緒に、俺は学校の校庭を後にする。

張られていたデュエル・サンクチュアリっていう結果は、もう既になくなっていた。

「……外に出てはいけないと言つた筈だが」

家の前に着いて、玄関の扉を開こうとしたら偶然父さんとはつたり。そのままりビングに連れて行かれて現在は説教を受けている。

「自分から外に出るつもりは無かつたんだよ。宅配便かと思つて扉を開いたらそこにいたのが騎士で、空間移動術式を使って学校に連れて行かれたんだ」

「それでもだ。今度からはそういう事も警戒しておいてくれ」

「……ごめん」

確かに油断してたよな。常識に捉われていて、まさか玄関から正々堂々と敵が入ってくるとは思ひもなかった。

「全く……だが、騎士をよく退かせる事が出来たな。騎士は勇者側の上級に属する位だ。戦闘力も高いし、相手取るのはなかなか大変だっただろう」

「いや、騎士とは途中までちゃんと戦ってたけど、その後は俺の変わりに戦ってくれた奴がいたんだ」

「戦ってくれた奴？ 誰だそれは？」

「悪魔だよ。俺と同じクラスにいる女の子だ」

「……ふむ」

なにやら唸りながら父さんが眉間に皺を寄せる。父さんは元勇者だから、あまり悪魔とかに良い印象を抱かないのかも。

「その悪魔の女の子は良い奴なんだよ。今日知り合ったばかりなのに俺がピンチだった所を助けてくれたんだ。悪魔だけど、そんなに悪い印象を持たないでくれ」

「いや、悪い印象など抱いていない。むしろお前を助けてくれたんだ。感謝こそすれ、そんな偏見を持つつもりなどないさ」

険しくなっていた表情を緩めてくれた。それならいいんだけどさ。

「しかし、騎士とやり合える程の悪魔となると、それなりに位の高い悪魔という事になるな。なぜそんな子がお前のクラスにいるんだ？」

「……よくよく考えたら、何でだろうな？」

イリヤが転校してきたのは俺が勇者と魔王の地位を継ぐ前の話だ。偶然俺らは巡り合ったと考えればロマンチックだが、流石にそれは出来すぎている。

明日にでも聞いてみよう。本人に聞くのが一番手っ取り早い。

「玲、一つ提案があるんだが、その子を我が家に招くのはどうだ？」
「え、どうして？」

父さんの意外な発言に首を傾げる。

「お前を助けてもらったお礼が言いたい。それに、色々と魔王側の情報を手に入れる事が出来るかもしれない」
「分かった。明日辺りにでも連れて来るよ」

約束を取り付けて俺はリビングを後にする。精神的にも肉体的にも疲れたから、無意識の内に足が自室のベッドを目指して稼動する。

そのままダイブ。布団に歓迎されつつ俺は目を閉じた。あー、すっごく気持ちいい。

ここ最近の疲れが今になって襲い掛かってくる。睡魔が俺の意識を夢の世界へと連れて行くのに、そう時間は掛からなかった。

夢の世界への一歩手前に来て、机の上に放置された宿題の事を思い出す。睡魔さんが「ねえ早く行こうよ」と可愛らしく手を引いてくる。さて、ここで俺は選択を迫られているんだよね。このまま夢の国へと入場するか、頭の労働を行うべきかを。

流石にこれは優柔不断な俺でもすぐに決断できた。

どっちを選んだかは、まあ明日のお楽しみという事で。

幸せ成分

時計が示している時刻は俺の寝惚け眼を覚ますのに丁度良いぐらいインパクトがあった。

その時刻十一時五十七分。あと三分すれば四時間目が始まる時間帯。

にも関わらず、俺はのんびり掛け布団を蹴り飛ばして寝ていた。以上の状況が重なった時に発生する事柄と言えば、

「やべえ！ これ遅刻とかそういうレベルじゃねえ！」

ベッドから急いで起き上がる。急に起き上がったせいで一瞬クラッと来たが、そんな事を気にしている場合でもない。

夏用のYシャツのボタンを片手で閉めながら机の横にある鞆を手取る。結局手をつけなかった宿題と筆記用具を急いで詰め込み、俺は自室を飛び出した。

階段をドタドタと降りてリビングへと向かう。そのまま靴を履いて学校に行ってしまった方がいいのかもしれないが、その前にやらなければならない事がある。

「母さん！ 何で起こしてくれなかったんだよお！」

専業主婦の母さんはリビングで優雅にお茶を飲んでいた。手に持っている雑誌から目を外し、こちらに振り返る。

「あはよう、玲。昨日はよく眠れた？」

「おかげさまでよく眠りすぎたわ！」

密かに狙っていた三年間皆勤賞の夢が粉々に砕け散った。

抗議の目を向けると、なぜか母さんはふふつと柔らかく微笑む。

「起こそうと思って部屋を訪れたのだけど、玲の寝顔があんまりにも可愛かったからしばらく眺めてたの。そしたら九時ぐらいになつていたから、もう起こさなくてもいいかなって」

「更にタチが悪いじゃねえか！　ちくしょう、帰ったらたくさん愚痴らせてもらうからね！」

さつさとリビングから出て玄関へ向かう。靴紐を結ぶのがもどかしくて、かかとを踏みつけて扉を開ける。

「今日はもう休みでいいんじゃない？」

ひょっこりと顔を覗かせた母さん。俺を起こさなかった事を悪いと思っていないのか、その表情はとてもにこやかだ。

「そういうわけにもいかないって。単位落とすしちまう」

中学の頃は休んでも勉強で遅れが生じるだけで、進級とか卒業に影響は全く無かった。だけど高校はそうじゃない。科目一つごとに必要な単位が存在していて、それを満たせなかった学生は次の年に同じ学年をやり直す事になる。同年代の人間から「くさん」と親しみではなく敬遠の意味を込めた呼ばれ方をされるようになる事間違いないだ。

この単位、提出物を出さなかったり授業に出席しないと与えられない。つまり、今日の遅刻で俺は四科目にマイナスを加える事になった。

通信簿にも影響あるだろうし……あー、何で朝っぱらからこんなに悩まなきゃいけないんだろう。

「玲は真面目ね。そういう所、剣君によく似てて素敵だわ」

「それは裏を返すと父さんが素敵ってことだろ」

「もちろんよ」

相変わらずの惚気っぷりだ。我が両親は老後になってもこんな感じなのかね？

「ああ、もう！ 言ってきます！（もうなげやり）」

「はい、いつてらっしゃい（気にせずニコニコ）」

玄関の扉を開いて外に出る。かかとを踏んでいると走りづらいから、一回止まって履き直してから走り出す。

今日の天気は快晴。走るには最悪なコンディション。少し走っただけで体中から汗が噴き出し、Yシャツにべったりと張り付く。気持ち悪い。

しかも朝起きたばかりだからそんなに速くは走れない。朝食を取っていないこともあって、五分後には走るのを止めていた。

今更走っても意味などない。冷静さを取り戻した俺は、時間の事を気にせずゆっくりと学校に向かう事にした。

辺りを見ても当然ながら学生の姿はない。いつもなら学生がたくさんいる道を一人で歩いている事に少し高揚感を覚える。学校をサボったりする人の気持ちがかかるような気がした。

照りつける日差しで、少し先の道路が揺れて見える。温度の高さで水溜りが出来ているように見えるのを小さい頃は不思議に思っていた。

鉄板みたいに熱いであろうアスファルトへ向かって頬から汗がすべり落ちる。前を向いて歩く気になれず、地面へと視線を向けてしばらく歩いた。

坂道を登り、俺は目的地である学校に到着する。今朝だけで一日分既に疲れが蓄積された。

そうだ、そもその原因とえば、昨日のメルティスとの戦いがあつたから体に疲れが溜まっていたんだ。その結果、俺の体はその疲れをなるべく解消しようと睡眠時間を多く取ったわけだ。

こついう場合はやっぱり俺が悪いのか？ 疲れを蓄積させた俺が悪いのか……そりゃ人間なんだからしょうがない。

そう思ったが、勇者で魔王な俺は人間という括りに入れても大丈夫なんだろうか？ いや、人間じゃありませんと言われても違和感しかないのだが。

日差しから逃れるべく昇降口へとダッシュ。中に入ると多少は涼しく感じられた。

自分の教室へ向かっている途中で、廊下にチャイムが響き渡る。ゆっくりしすぎたな。これで俺は午前中の授業を全部休んだ事になった。

教室の前まで来ると、購買に向かったり他のクラスに移動して弁当を食べようとする奴が何人も見受けられる。そいつらから訝しげな視線を向けられ、落ち着かなくなった俺はそそくさと教室へと入る。

だが、教室に入っても周囲からの目は向けられた。昼休みの時間に登校してくる生徒がいたら俺だってそいつを見るだろうからな。

「彩文君遅かったね。もしかして少し遅れての高校生デビュー？」

すたすたとこちらに近づいてきて、イリヤは俺に話しかけてきた。

「ぐれたつもりはないんだけど」

「そっかあ、高校生デビューなんだね！ それなら髪も金髪に染めちゃおう！ そしたらわたしとお揃いだよ！」

「人の話を聞け」

慣れてきたなあ。こついうやり取り。人間の環境適応能力にはし

ばしばびつくりさせられるぜ。

「ん？ その手に持つてる物って弁当か？」

イリヤは手にピンク色の包みを持っている。大きさはやはり女の子だから小さめだな。

「うん、そつだよ！ 彩文君と食べようと思ってね」

肯定の意味を含んでいるのか、イリヤは弁当を上下に振った。弁当の中で食べ物が反乱を起こしていないか心配だ。

「イリヤちゃんとお弁当だと！？ ……こちらナンバー〇〇五、彩文が遂にコード四三六を実行するそつだ。至急対応に当たれ！」

「くきいいいいいい！ 妬ましい！ 妬ましい妬ましい妬ましい！ お前が妬ましいぞ彩文玲！」

「このリア充が！ 爆発してしまえ！」

今日もイリヤは大人気なようだ。俺はいつかあいつらの誰かに暗殺されるんじゃないか？

クラスメイト達に若干の恐怖を覚えつつ、俺はイリヤに返事をする。

「そつか。俺はいつも隣のクラスにいる友達と食べてるんだけど、イリヤはそれでもいいか？」

「うん、構わないよ」

了承を得て、自分の席についた時に忘れていた事を思い出した。

「……あ」

「どうかした？」

「弁当忘れた」

急いでいたから弁当の事なんて頭の中になかった。朝飯と昼飯抜きで午後の授業を受けるのはきつい。

購買にでも行って何か買って来るか。そう思って鞆から財布を捜す。

……マジかよ。財布も持ってきてねえ。

何から何まで準備不足な今日の俺は思わず肩を落とす。

「それは大変だね。じゃあ、わたしのお弁当分けてあげるから元気出して！」

「……いいのか？ ただでさえ量少なめなのに」

「大丈夫！ その分彩文君から後で幸せ成分をお裾分けさせてもらうから」

「幸せ成分？ なんだそりゃ」

「さあ、お友達の所へレッツゴー！」

質問を無視して、イリヤは教室の入口へと向かう。初めて聞いた単語が少し気になったけど、イリヤと一緒に隣のクラスを訪れる頃にはどうでもよくなっていた。

「おつす。二人共」

席をくつつけてスタンバイしていた海斗とすずはは、驚いたようにこちらを見ている。どうした？ 俺の顔に何か付いているのか？

「な、なんで玲が金城さんと仲良くしてるんだ！？」

「昨日ちよっと話すきっかけがあつてな。それで今日は一緒に昼飯を食べようって事になったんだ」

「な、なんだってえ！」

両手を上に上げて驚きの声を上げる海斗。なんだかわざとらしく感じてしまう。

「か、金城さん、こんにちは」

ん？　　すずはの挨拶が何だかぎこちない。体調でも悪いのだろうか？

「うん、こんにちは。今日は一緒にお昼を食べさせてもらっね」

イリヤは近くの机を引き寄せて机同士をドッキングさせる。俺は既に用意してくれていた席に腰を下ろした。

にしても、周りからの視線の向けられようが半端ない。みんな噂の転校生が教室に襲来してきたから驚いているんだろう。

「あれ？　玲君お弁当は？」

弁当を鞆から取り出し始めたすずはから早速指摘される。

「寝坊して忘れちゃったんだよ。だからイリヤから少しお裾分けしてもらっ事になった」

「あ、それなら私もいつもみたいにお弁当多目に作ってきてあるから、どんどん食べてね」

席の真ん中にすずはがお弁当を設置してくれる。気遣ってくれる友人が周りにいてくれて俺は幸せだよ。

「じゃあ早速頂きます」

いかんせん腹が減っているため、受け取った箸で俗に言ったこさんウインナーを突き、口に運ぶ。うん、程良い焼き加減だ。朝飯を食べていない分美味さもいつも以上に感じられる。手が勝手に動いてマカロニサラダや卵焼きに箸を伸ばす。

「そんなに焦らなくてもお弁当は逃げないよ」

言いつつ微笑みながらずずはは水筒のカップにお茶を入れて渡してくれた。こういう気配りが出来る女性って素敵！ ただいま今日初めての食事のため、若干テンション高め。

「次はわたしのを食べて！」

お茶を一気に飲み干して机に置き、俺はイリヤの方へ首を動かす。差し出されたお弁当の中は色とりどりで見栄えがいい。野菜と肉のバランスも丁度良さそうだな。

「ああ、じゃあいただきます」

箸で弁当の中にあるからあげを掴もうとした瞬間、ひょいっとイリヤが弁当を引っ込めた。

「……………」

試しに箸を引っ込めてみる。

すると再びこちらに弁当が差し出された。

再度からあげへと箸を伸ばす。が、またまた俺の箸は獲物を捉えることが出来ずに宙で固定される。

イリヤ、お前は一体何がしたいのかね？

海斗とすずは不思議そうに俺とイリヤのやり取りを見ている。
疑問の意思を瞳に乘せて、イリヤの瞳へと送信した。

「この弁当を食べる前に一つ約束してほしい事があるんだよ」

送信は無事成功したらしく、イリヤがちゃんと俺の疑問に答える形となった。これなら世の中携帯入らずじゃないかと一瞬思ったけど、これだと目の前にいる相手にしか送れないから欠陥だらけだな。

「……その約束は俺に出来る範囲の約束なんだよな？」

この弁当食べたら五千円払ってね！　なんて約束だったら俺は箸を引っ込めるしかないんだけど。

「もちろん。今日お財布を持ってきていない彩文君にでも出来る約束だよ」

「そうか。じゃあ言ってみ」

食欲がからあげを欲しているようで箸が自然と閉開する。早くからあげくれ。

「わたしはお弁当をお裾分けする。だから彩文君はわたしに幸せ成分をお裾分け。この約束を誓いますか？　誓いますね！　はい決定！」

「いや待て、その幸せ成分ってのは何なんだ？　オレンジジュースにでも含まれている成分なのか？」

「まあ、簡単に言えばお互いが幸せを分か合うという事だよ！」
「意味分からん」

弁当を分けてもらっているのは俺なんだし、イリヤは別に幸せでもなんでもないじゃないか。

「とーにーかーく！ 彩文君はYESと言えばそれでいいんだよ！」
「……よく分からないけど、まあいいや。その約束、受理しました」

だから早くからあげをください。まだまだ俺の食欲は満足していないんだ。

弁当へと箸を伸ばし、今度こそからあげを掴もうとするが――ひよい。

三度目の弁当回避により、俺の箸はからあげをかすめる結果となった。

「……もしかして食べさせる気がなかったり？」

「そんな事ないよ。約束してもらったから、早速幸せ成分を頂こうと思っただけ」

弁当を机の上に置き、イリヤは箸を取り出してからあげを摘む。それを、俺の眼前に持ってきてこう言った。

「はい、あーん」

「！？」

突然の行動に、俺は声を出せずにただ驚いた。いやだつて、ねえ？ 傍にいる友人に二人に視線を向けると、二人共やはり驚愕の表情を浮べていた。

イリヤの行動が理解出来ず、俺は突飛な行動の理由を聞く事にした。

「……イリヤさん？ これは一体何の真似ですか？」

「何って見ての通り、あーんだけど？」

「俺はお前のおかしな行動について尋ねているんだが」

「おかしな行動じゃないよ。彩文君だって約束してくれたじゃん」
「はい、あーんと幸せ成分にどのような接点があるのか聞かせていただきたい」

「あなた、パクパク。わたし、ニコニコ。OK？」

「今ので理解できる人間がいるならそいつの読解能力は優れすぎているか致命的かのどっちかだ！」

仕方ないなあと言わんばかりに溜息をついて、再度俺の瞳を覗きこむ。からあげは未だに宙に浮いたままだ。

「いい？ わたしがからあげを彩文君に食べさせてあげれば彩文君はお腹が満たされるでしょ？ で、わたしは女の子の憧れである『はい、あーん』が出来て満たされる。ほら、二人共幸せでしょ？」

一瞬幸せかもと考えてしまった俺は思春期真っ盛りなのかもしれない。いやでも、周りに人が結構いる教室内でのはい、あーんはかなり恥ずかしい。

「……でも、そんな事したら周りの奴らが更に俺とお前の関係を誤解すると思うんだが」

「誤解されてたらされてたでいいじゃん。その時はわたし達、付き合ってます！ って堂々と宣言してあげようよ」

「ええええええっ！？」

俺らのやり取りを見守っていた友人二人が声を上げた。それに釣られて周りの奴らの視線がこちらに集中する。

「う、嘘だよね玲君？ 金城さんと付き合ってるだなんて嘘だよね？」

「玲！ お前、金城さんにいくら払ったんだ！ 百万ぐらい払ったんじゃないだろうな！？」

友人の片方、俺が人を買収したみたいに言ってるじゃない。それに、俺らはそんな関係じゃないっての。

「イリヤ！ お前が誤解を生むような事を言ったから早速二名誤解してるじゃねえか！」

「これでわたし達は晴れてカップルだね！ さあさ、気にせず続きを始めよっか！」

こいつ、思いつきり確信犯だな。俺を陥れて魔王の地位でも奪おうとしているのかもしれない。

海斗、すずは、そして教室の奴らから視線が身に突き刺さる。体中が穴だらけになりそうだ。

眼前に突きつけられているからあげが行き場を求めて飛んでいる。下手したら箸から滑り落ちて、重力によって地面に叩きつけられる事になるかもしれない。

どうすればいいか分からず硬直していると、からあげが突如俺の口の中へと押し込まれた。

「むぐう！？」

からあげが喉に詰まって窒息死しかけた。からあげって食べ物としてだけではなく、人を殺す恐ろしい道具にもなるんだね。

何とか咀嚼し嚥下して、自らの呼吸を整える。

「いきなり何すんだ！」

「彩文君が恥ずかしがってるから焦れなくなっちゃって。次が本番だからね」

「今のは練習だったのか……」

「それじゃあいくよ。はい、あーん！」

弁当箱から今度はプチトマトが運ばれてきた。下に手を添えて落ちても大丈夫な様に気を遣ってくれている。

……それならTPOも弁えてほしい。

だが、俺が食べようとしなければイリヤは食べるまでこれが続けるだろう。この射る様な視線から一刻も早く逃れる為にも、さっさと食べてしまった方がいい。

「あ、あーん」

口を開けると、そっとプチトマトが舌に乗せられる。あまり噛まずに飲み込んだ。

「どう？ おいしい？」

ぶつちやけ、羞恥心で味を楽しんでいる余裕なんてなかった。きつと俺の顔は今頃、飲み込んだプチトマトと同じ様に赤くなっているに違いない。

しかし、真っ直ぐイリヤに見つめられると味が分からないだなんて言えなかった。

「ああ、おいしいよ」

そう言った瞬間、ガタンと席を立ち上がる音が聞こえた。すずはだった。まるで世界の終わりを告げられたかの様な表情をしている。

「ど、どうしたんだ？」

「……………れ、玲君の馬鹿ああああ！」

いきなり逃走。教室を出てすずは廊下を走っていく。
……えーと、とりあえず追った方がいいよな！

「わ、悪い！ 食事をしててくれ二人共！」

食事中に逃げ出したすずはを追って、俺は廊下を疾走する。
まだ満足してないぞと、腹の虫が場違いにも大きく廊下に鳴り響いた。

家庭訪問

一難あつた昼休みから数時間後、俺らは放課後を迎えていた。

「いやゝ、今日の昼休みは楽しかったね。魔王様とあーんも出来たし！」

「その代償は高くつきましたがね」

あの後ずすはの誤解を解くの、かなり大変だつたんだぞ。昼休みの時間を目一杯使つて納得してもらつたんだからな。

海斗は海斗で、教室に俺が戻ってくるなり、

『お前ばかりずるい！ 訴えてやる！』

とか言つてチョップをかましてきた。全体重を掛けたその一撃は、見事に俺の額にヒットした。

周りの連中の誤解も深まっただろうし……はあ、どうしたものかねえ。

「溜息をつくると幸せが逃げちゃうよ」

「誰のせいだ誰の」

「うゝん、誰のせいだろうね？」

「お前のせいだ！」

再度溜息をつきつつ、俺は上を見る。まだ日の昇っている空は、俺の心境とは正反対の空模様だ。

帰り道の隣を歩いているのはイリヤだけだ。いつもならここにすずはと海斗がいるんだが、父さんにイリヤを家に連れて来るように言われてるから今日は別々。

もちろんすずは達には用意があるという事で断つてある。…… 本当の事を言っていたら、また誤解されるんだろうなあ。

「うう、それにしても魔王様のお父様からご指名されるなんて。何だかドキドキしちゃう」

「お前って緊張するような柄に見えないけど」

「そんな事ないよ！ わたしだって女の子だもん！ スリーサイズとか聞かれると思ったら緊張するに決まってるじゃん！」

「お前は人の父親を何だと思ってるんだ！」

万が一そんな事があるうものなら、元勇者と元魔王が家で戦いをおっはじめることになるぞ。多分一方的に元勇者がボコされる形になると思うけど。

「でも緊張してるのは本当だよ。何せ魔王様のお母様、つまり先代の魔王様もいらっしゃるんだから」

「イリヤは母さんと面識があるのか？」

「ううん。わたしが生まれた頃には先代魔王様は勇者と結婚して行方を眩ましてたから、会う機会がなかった」

「それで会わない内に俺が魔王になったと」

「そついう事」

イリヤの話を聞いていて思ったんだが、俺は父さんと母さんの過去の話を全然聞いた事がない。

勇者と魔王の関係はある程度教えてもらったけど、まだ知るべき事はたくさんある気がする。

適当に話をしていると見慣れた我が家の姿が目に入った。

玄関前でポケットから鍵を取り出して鍵穴へと突っ込む。ガチャリと音を立てて、扉の施錠は解除された。

「さあ、入ってくれ」

「お、おじゃまします」

玄関から上がり、俺とイリヤはリビングへと向かう。

廊下を進んでリビングに繋がる扉を前に、俺とイリヤは立ち止まる。

「ど、どうしよう、本格的に緊張してきちゃったよ。心臓バクバク
いってる」

「例えるならどれぐらいの緊張感？」

「憧れの声優さんが家を訪問してくるぐらい」

「一般人がピンとくるような例えをしてくれ」

ただ、見ていて確かにガチガチだな、今のイリヤ。普段のおどけた調子はどこへやらだ。

そんなイリヤが新鮮で、俺の口端が自然と上がっていく。

「うう、人が緊張してるのに笑うなんて魔王様はひどいよ」

「いや、笑ったつもりはないよ。ただ可愛いなあって思ってたさ」

イリヤは驚いたような表情を浮かべ、かああっと次第に頬を紅潮させていく。

「そ、そんな事言われても緊張感を取れないんだからね。逆に気恥ずかしさで緊張感もパワーアップなんだから！」

ポカポカと胸部を叩いてくる。緊張感を紛らわそうとしているのが更に可愛い。

「悪い悪い。じゃあ、そろそろ行きますか。元勇者と元魔王が待つ

ているリビングへ」

「……魔王様って、もしかして隠れS？」

むうーと唸りながら不服そうにこちらを見上げるイリヤ。まあ、たまにはいじられておきなさい。

宣言通り扉を開けてリビングに入る。ソファにはいつも通り、父さんと母さんが座っていた。

二人からおかえりと挨拶され、俺もただいまと言葉を返す。

「玲、悪魔の女の子はまだ来ていないのか？」

ん？ 何言ってるんだ？ 俺の隣にもういるだろ。

父さんの言葉を聞いて横を見ると、あれ？ イリヤがいない。どうなってるんだ？

俺にしかイリヤは見えないのだろうか。ちゃんと考えれば矛盾が生じていると分かるような俺の発想は、考え始めてから三秒で霧散する。

扉の影からチラチラとこちらの様子を窺う瞳。見つからないように努めているのに、金色の髪がその存在感を際立たせている。

出るタイミングを見失ったせいか、出るに出れない状態になっているみたいだな。

「……しょうがないなあ」

扉の影に隠れているイリヤの手首を掴んで引つ張り、両親の前に姿を現させる。こうでもしないと一時間経っても出てこなさそうだったからな。

「あ、そ、その初めまして！ 上級悪魔、ルーテル・イリヤ・シュトレンベルグです！ 不束者ですが、よろしく願いします！」

はい、よく出来ました。頭を撫でなくなっただけど自粛。そんな事をすれば両親からも誤解される。

つつか、上級悪魔ってなんだ？

「玲から話は聞いているよ。先日の騎士との戦闘で玲を助けてくれた事は本当に感謝している」

「い、いえ！ 魔王様はわたしにとって大事な人ですから」

魔王だからそう言ってもらえるというのは分かっているが、それでも大事な人と言われるのはなんだか照れる。頬を掻いて気を紛わす事にした。

「私からもお礼を言わせてもらおうわ。玲を守ってくれて本当にありがとう。厚かましいお願いかもしれないけど、もしまた昨日のような事があつたら玲に力を貸してあげてくれないかしら」

母さんがソファから立ち上がり、ゆっくりと頭を下げる。曲げられた腰は見事に四十五度でとても姿勢が綺麗だった。

「は、はい！ これからも魔王様のお役に立てるよう頑張ります！」

こちらは約九十度と深めのお辞儀。イリヤの必死さ加減がよく伝わってくるな。

「せっかく来てくれたのだからゆっくりしていつてね。私はお茶を入れてくるわ」

「いや、愛花。お前はゆっくりしていてくれ。ここは俺が茶を注ぐ」

「そ、そんな！ お二人の手を煩わせるわけにはいきません！ ここは僭越ながら、わたしがお茶を！」

「客が茶を注いでどうすんだ」

全然不束者じゃない。むしろ気が利き過ぎているぞこれじゃあ。

「間を取って俺が言ってくるよ。ルーテルは母さん達と会話に花でも咲かせてくれ」

「ま、魔王様……」

キッチンの方へ向かおうとしたら制服の裾を掴まれた。

イリヤを見ると、その瞳からあるメッセージが俺へと伝わってくる。

『お願い！ 一人にしないで！』

「……………」

気にせず行こうとすると今度は腕を掴まれた。い、痛い痛い！
手首を強く握り過ぎだ！

『お願いします！ 一人にしないでください！』

捨てられた子犬の様な目を向けられてしまった。

そんなに俺の両親と三人きりになるのが嫌なのか。まあ、確かに元勇者と元魔王が相手だと考えれば分からなくもないか。

溜息をついて、手首を掴んでいるイリヤの手をゆっくりと外す。
手首にはイリヤの手形がくつきりと付いた。

「……あー、俺茶とかあんまり入れてないから、やっぱり誰か手伝ってほしいなあー」

棒読みだった。俺に演劇の才能はないな。

「はい！ はいはいはい！ わたしが手伝います！ 手伝いましょう！ さあ、魔王様、お茶を入れにキッチンへ！」

父さん、母さんが言葉を発する前にイリヤは俺を押しながらキッチンの方へと向かった。

両親から見えない位置に来て、イリヤは大きく息を吐き出す。

「き、緊張した。心臓がビッグバンを起こすかと思ったよ」
「もれなく体の内部に宇宙が出来るところだったな」

人間の慣れっすげー。イリヤと二日過ごしただけで、ツツコミスキルが二日前の十倍はアップしてるぜ。

「つつか、取って食われるわけでもないんだから話してればよかったのに」

「む、むむむ無理だよ！ 何話せばいいか全然分からないもん。気まづくなっちゃう！」

ブンブンと大きくイリヤは首を振る。金色の髪も一緒に大きく揺れる。

「はいはい、分かった分かった。それじゃあお茶を注ぐのを手伝ってもらうけどいいか？」

「はい！」

元気な挨拶をもらい、棚に置いてあるお茶の葉を取り出す。ポットに水を入れて電源を入れ、沸騰するまでしばしの間待つ事に。

「なあ、さっき言ってた上級悪魔って何なんだ？ 悪魔にはランク

みたいなものがあるのか？」

「うん、そうだよ。下から順に下級、中級、上級ってランク付けがあるの」

「へえ。ルーテルは位の高い悪魔なんだな」

そういえば、昨日父さんと話した時も言ってたな。騎士と渡り合える悪魔は位が高いとか何とか。

「まあね。と言っても、上級だからって良い事があるわけでもないんだけど」

あはは、とイリヤは明るい笑みを浮べた。

……なんだろう、いつも通りに見えるけど、何だか無理して笑っているような……。

その時、ポットが沸騰を知らせる音を発した。

「あ、沸騰したみたいだね」

イリヤは用意した湯のみに茶葉を入れ、ポットからお湯を注ぐ。湯のみの中で茶葉が揺れて、透明だったお湯を黄緑色へと変えていく。

トレイに四つの湯のみを乗せ、イリヤはキッチンからリビングに向かおうとする。

「あ、俺が運ぶよ。お前は客人だし、二人にお茶を出す時に緊張して湯のみを落とされても困るからな」

「むう。緊張してもそんなへましないもん！ わたしを誰だと思ってるの？ 上級悪魔だよ？」

そう言いつつも震えている両腕。トレイに乗っている湯のみが力

タカタと小さく音を立てている。

「じゃあもしもの話だけど、その上級悪魔であるお前が万が一にもトレイに乗っている湯のみを傾けて、父さんと母さんに茶をぶっかけてしまったとしよう。そうだったら時の事を考えてみる」
「……………」

頭の中でその場面をイメージしたのか、どんどん顔が青ざめていく。湯のみの震えもさつきより酷くなった。

「客人はゆっくりしてな。それはしっかり俺が運ぶからさ」

今度はすんなりトレイを渡してきた。

俺とイリヤは一緒にリビングに戻る。雑談していた両親の前に湯のみを置いて、俺とイリヤは両親の真正面にあるソファに腰掛ける。
「すまないな。茶まで入れさせてしまった」
「い、いえいえ、わたしがやりたいと言った事ですので、お父様は気にならさないでください」

お、さつきよりかは緊張がほぐれてきたみたいだな。手に持っている湯のみはまだ少しだけ震えてるけど。

俺も湯のみを手にとって、注がれた茶を口に含む。仄かな苦さが口の中に広がっていく。

「ルーテルちゃんはきつと良いお嫁さんになれるわね。この際だから玲のお嫁さんになったらどうかしら？」

ゴフウ！ 飲んでいる茶を吹きかけた。

「な、なんて事言ってた母さん！？」

「あら、そんなに変な事かしら？ 二人共仲が良さそうだし、お似合いかと思っただけど」

「似合う似合わないの問題じゃねえ！」

「ルーテルちゃん的にはどうなのかしら？ 玲は好みのタイプだったりする？」

「人の話を聞けええええ！」

初対面の相手にこういう話題を平気で触れる内の元魔王様恐るべし！

「あ、あの、その、わたし……」

頬を紅潮させ、終いには顔を俯かせてしまう。普段こういう話題で俺をいじっちゃいるが、自分が話題の対象になるのには慣れていないのかもな。

「冗談もほどほどにしてくれ。イリヤだって困るだろうに」

「ふふ、そうね。可愛かったからつい。ごめんないさいね」

更に顔を赤くするイリヤ。これで緊張パラメータが振り出しに戻されたかもしれない。

はあ、どうして女って生き物は恋愛系統の話が好きなのかね。

二人きり

一時間後。

お茶会はそこそ盛り上がった。

どんな話をしていたのかと言われれば色々あつてきりがないんだけど、その中でとてつもなくインパクトのある話題があつたのだとすればこれだろう。

「ルーテルちゃんは玲の魔王化を見たことがあるの？」

「はい、可愛い黒ドレスですよ」

「そう！ そうなのよ！ 可愛いわよね。玲には女装が良く似合うと思うわ」

「そうですね。わたしも魔王様が女装した姿、もっと見てみたいですよ！ メイド服とか」

「……あなた、中々センスあるわね。今度一緒に玲を女装させましょ」

「はい！ よろしく願いします！」

本人がいるまでなんちゅう会話をしてるんだあんなら。

父さんが俺を見る目も印象的だった。哀れみを含んだその視線を向けられた時、俺は家を飛び出して街中を駆けなくなった。

そんなとんでもない話題を含めたお茶会が終了し、なぜか俺とイリヤは階段を登って俺の自室へ向かっている。

『もう少しゆっくりしていったらどうかしら。例えば、玲の部屋とかで』

母さんの一言に何で従ったのか自分でもよく分からない。ただ、イリヤもそれで構わないと言っていたし、別にいいか。

自室の前まで来て扉を開き、中に入るように促す。

「先に入って待っていてくれ。俺はお菓子とか取ってくるから」
「はい」

イリヤの返事を聞いて、俺は踵を返して階段を降りる。
フローリングの床を滑るように進み、リビングを経由してキッチンへ。

買い溜めしてあるお菓子の中からせんべいをチョイス。ついでに
コップ二つに冷たい麦茶を注いで、トレイに乗せてキッチンを出る。
リビングを出る途中、ソファに座っている母さんと目が合った。
ソファから立ち上がり、こっちにゆっくりと近づいてくる。

「？　どうかした？」

「いえ、ただ一つ言いたい事があってね」

耳元に唇を寄せ、母さんは静かに囁く。

「二人つきりになるからって、押し倒したりしちゃダメよ？」

「い、いきなり何馬鹿な事言ってただよ！　付き合ってもいない
んだからそんな事はしない！」

危うくトレイを落とす所だった。

「ふうん。という事は、付き合ってたら押し倒すのね？」
「揚げ足取るな！　まったく」

楽しげに笑っている母さんをジト目で眺めてリビングを出る。ト
レイを持っているという事もあって、階段のような斜面を登る時は
気をつけないと。

階段を登っている最中に先程の母さんの言葉が頭の中で勝手に再生され始める。

耳のすぐ傍で囁かれたその言葉は、しっかりと鼓膜に張り付いていた。

『二人つきりになるからって、押し倒したりしやダメよ?』

くそつ、母さんが余計な事を言ってくれたせいで二人きりつてのを意識しちまつてる。別に二人きりになる事なんて何回もあったのに。

しかも『自室で』という言葉が付属されている事で更にドキドキ別にそういうイベントなんてありやしないのに。

そう思っているのに自室の扉を開けようとしないう。すっかり母さんの術中にはまっていた。

……俺ってきつとからかいやすい人間なんだろうな。

そう自覚しつつ、トレイを片手で持ち、自室の扉を開けた。

視界に入ってきたのは見慣れた自分の部屋。そして、その部屋を物色している金髪の女の子。

「……何をしているんだ?」

「ああ、魔王様。暇だったからエロ本を探していたところだよ」

「とんでもない事をサラツと言うな!? 何でエロ本なんて探しているんだよ!」

「いやあ、魔王様の趣味を把握しておこうと思って」

「そんな事せんでいい! そんなもん知られたら恥ずかしくて外に出れなくなるわ!」

変に意識していた自分が馬鹿みたいに思えてきた。折りたたみ式のテーブルを部屋の端から持ってきて、その上にトレイを乗せる。

「……それに言っておくが、俺はエロ本なんてものは所持していない」

男子高校生なら誰でも持っているという認識があるかもしれないがそれは間違いだ。店員の目が気になって仕方がないチキン野郎な俺には、そんな物を買う勇気がない。

「うっそだあ。隠す事なんて何もないんだよ。わたしが魔王様を見る目は変わったたりなんてしないから」

「その子を見守るお母さんのスタンスはなんなんだよ。それに、持っていないのは本当の事だ」

バリバリと俺はせんべいを咀嚼。気を紛らわすのに食べ物はこちらうどいい。

「そ、そんなっ！ やっぱ魔王様は、男の人が好きなんだね……」
「エロ本持っていないだけでなぜそうなるんだよ！」

「だって、漫画とかアニメの主人公は大抵ベッドの下にエロ本を隠してるもん！ これはもう世界の理と言っても過言じゃないね！」

「残念だったな。俺はお前の言う世界の理から外れているみたいだ」
「今からでも遅くないよ！ 近くのコンビニの成人コーナーにレッツゴー！」

「しねえよ！」

母さんや父さんの前じゃ大人しいのに、二人になった瞬間いきなりいつもの調子に戻りやがった。その切り替えの早さには驚かされる。

呆れつつトレイに乗せてきた麦茶を差し出し、俺は自分の麦茶を一気に煽る。良く冷えたそれは俺の喉を潤わせ、夏の暑さを一瞬忘れさせてくれる。

「うーん、何だかこの部屋落ち着くね。さっきまで緊張していたからかな」

言いつつイリヤはベッドにダイブして、ゴロゴロと布団の上を転がる。行儀が悪いと指摘しようと思ったが、思いの外その姿が可愛かったので止めておいた。

「それにしても落ち着き過ぎだろ。まるで自分の家みたいにリラックスしてるじゃないか」

「そりゃリラックスもするよ。所々に魔王様の魔力の残滓が感じられるもん。夜の学校同様、わたし達悪魔からすればこの部屋は快適空間だね」

少し集中すると、確かに部屋のあちこちに自分の魔力の残滓が散らばっていた。

勇者と魔王の地位を継いでまだ三日目だけど、剣に魔力を流し込んだり、魔力を察知する事ぐらいは出来るようになった。一ヶ月ぐらい経つたらもう人間の姿じゃなくなっているかもしれない。

……つつか、少し無防備だと思いますよイリヤさん。スカートがはだけてる。中が見えそう。

「ベッドもふかふかだし、今日はもうここに泊まっていつちやいます」

「なっ!?! ななななな!?!」

呂律が上手く回らない。いきなり泊まろうかなんて言われたら動揺するわ。

だってそれはイリヤと同じ部屋で一夜を過ごすという事だろ？

……考えただけでもクラクラするようなシチュエーションだ。

「なーんてね。冗談だよ冗談。魔王様はからかいがあるなあ」
「ま、まあ、だろうと思ったけどさ」

「あれ、こんな所にわたしが普段家で使っているパジャマが」
「泊まる気満々じゃねえか！」

見ると、本当にイリヤの手にはピンク色のパジャマが握られている。お前は手品師か魔法使いなのか？ そのパジャマを一体どこから出した。

「……一旦落ち着け。麦茶でも飲んで色々と話しよう」
「はい」

返事はいつも素直だな。ベッドから降りてきたイリヤは麦茶を俺から受け取って、少量ずつ飲んでいく。

「なあ、ここで前から気になってた事を聞いていいか？」

「こ、このタイミングでスリーサイズを聞こうとしてくるとは！
魔王様恐るべし！」

「勝手に決めつけるな。俺はそんなに飢えてないよ」

人を発情期の犬か何かと勘違いしているのかこいつは。

「まあいいや。俺が聞きたいのは、何で悪魔であるイリヤが普通に人間の高校に通っているのかという事だ」

しかも転校生。わざわざ一年生になったばかりの六月に転校してきた。これはイリヤが悪魔だと分かる前から疑問に思っていた。

「……………」

さっきまで笑っていたイリヤの表情が曇った。触れてはいけ
ない事柄だったのだろうか？

「ごめん。もしかしてあまり話したくない事だったか？ もし
そうなら、無理には話さなくていいよ」

話す方も嫌だろうし、話させた方も何だか申し訳ない気持ちに
なる。sonでそんな気まずい雰囲気のまま今日はお別れだなんて形に
なってしまうかもしれない。

「そういうわけじゃないの。どのみちそろそろ話そうかと思っ
ていた所だし、ちょうどいいかなって思っただけ」

「……本当か？」

「ごめん、今のは少し嘘。あんまり人に話したくない理由がくっ
ついているから思わず嫌な顔をしちゃった。でもね、魔王様になら話
せるよ」

「それは俺が魔王だから？」

もしそうなら、やっぱり聞くべきではない。立場の関係上仕方が
なく話されるのは俺も嫌だ。

「うっん。それは違うよ。彩文玲君だからこそ、話そうと思っ
たの」

空色の瞳が俺を見つめる。独自の引力でも有しているのではない
かというぐらい、その瞳から視線を逸らせない。

「……そっか」

そう言ってもらえて安堵している自分がいる。この安心感は一
体

何なんだろうな？

俺の安心感の理由が形になりそうではないまま、イリヤは桜華学園へなぜ転校してきたのかを話そうとする。

「桜華学園に転校してくる理由を話すのに、わたしがそれまで何をしていたのかを話す必要があるんだけど、聞いてくれる？」

「ああ、もちろん」

聞きたいと言い出したのは俺だし、一時間でも聞いてやるさ。
ふっと笑みを浮かべ、イリヤは口を動かした。

イリヤの過去

「実はね、わたしは魔王様と同じなんだよ」

「？ 同じって何がだよ？」

早速質問をぶつけてしまった。しかし、イリヤは俺の質問に答えてくれる。

「わたしはね、人間と悪魔の間に出来た子供なの」

「……え？」

一瞬思考が遅れるが、俺の脳はすぐにその言葉の意味を理解する。イリヤは、悪魔と人間の間に生まれた子ども。

「どうして、人間と悪魔が？」

「簡単だよ。人間とか悪魔とか、そういう枠組みに関係なく、わたしの両親はお互いを好きになったんだよ。魔王様のお父様とお母様みたいだね」

持っているコップに視線を落とし、イリヤは言葉を紡ぐ。

「それでも悪魔が人間に恋をするなんて事には前例がなかったし、その人間との間に子供が出来たんだから悪魔達は大騒ぎ。幼いわたしを連れて、お母さんは人間である父さんと一緒に悪魔達の目の届いていない人間界へと逃げた。そこから、わたし達家族の暮らしが始まった」

俺はイリヤの話に耳を傾ける。口を突っ込むような真似はしない方がいいと思ったからだ。

「最初は住んでいた場所を離れて、異国の地にきたから不安だったけど、お父さんとお母さんがいるからその不安も徐々に消えていった。わたしが五歳ぐらいの時に、お母さんはわたしが悪魔だという事を教えてくれた。万が一に危険が及んだ時、自分の身を守る様にお母さんは私を鍛えてくれるようになったの。心配性なお父さんはその様子を不安そうに見ていたけど、わたしが大丈夫って言ったら笑ってくれた」

聞こえる音は枕元に置かれた時計が時刻を刻む音とイリヤの声。静寂に満ちた部屋の中で、イリヤの過去が語られていく。

「そんな生活が一年ぐらい続いて、わたしの悪魔の力は覚醒した。それから二年もすれば、わたしはもうお母さんよりも強い悪魔になっていた。その時思ったの。わたしを守ってくれたお母さん達を、今度はわたしが守ろうって。けど」

イリヤの表情に冷たい影が差す。その表情は、さまざまな感情が入り混じっていいようだった。

「そんなに甘くなかった。わたしが十三歳の時、わたし達家族の場所が悪魔達に特定されたの。わたし達の場所にやってきた七人の悪魔は、全員が上級悪魔だった。一人ならまだわたしとお母さんでどうにか出来たけど、流石に七人も上級悪魔を相手取るのは無理があった……でも、戦わないと殺される。そう思って、わたし達は死に物狂いで戦ったの」

そこで、一旦語りが止まる。どうなったのかが気になったけど、結果を知るのが少し恐くなった。

数回の呼吸音。普段ならそんな微かな音は耳に入ってこないかも

しれないけど、静まり返っている部屋の中では鼓膜を振るわせるには十分な音量だった。

「結果は惨敗。人間だったお父さんは殺され、お母さんも半殺しにされた。わたしだけが致命傷がなく、唯一その場で戦える存在になった。でも、その悪魔達はお母さんを人質にしている。この女を殺してほしくないのなら、お前はこちら側に来い。人間と悪魔の間に出来た出来損ないにしては、なかなかの戦闘能力だ。もしお前がこちら側に来るのなら、この女を逃がしてやろう」。わたしは仕方がなく首を縦に振った。お母さんは見逃されて、わたしは悪魔達に連れて行かれた。その日以降、わたしはお母さんと一度も会ってない。辛かった。今まで一緒にいたお父さんは殺されるし、お母さんとは離れ離れにされて」

コップの水面に、雫が一滴落とされる。見ると、イリヤの頬をゆつくりと涙が伝っていた。

「それにね、辛い事はそれで終わりじゃなかったの。悪魔達に連れて行かれて、そこでわたしは新しい生活を始めた。上級悪魔として悪魔達に加わる事になったわたしを待っていたのは差別。人間と悪魔の間に生まれた出来損ないにも関わらず、上級悪魔の仲間入りを果たしているわたしが気に入らなくて、周りのやつらは攻撃を仕掛けてきた。戦い自体ならそいつらに遅れを取った事はない。けど、毎日毎日失敗作とか言われ続けて、そんな状態で戦ってたら精神的にも肉体的にも消耗する。耐えられなくなったわたしは、悪魔達の住むその世界から離れてこの人間界に戻ってきたの。心の傷を癒すために」

「……………」

「それで最初は海外。術には言葉を翻訳する便利なものもあるから、生活自体には困らなかった。けど、わたし自身は誰かと関わりを持

つことを拒んでいた。悪魔達と同じ様にわたしを差別するかもしれないって思っちゃって」

「……それで、次が日本か」

「うん、理由はたまたまだった。同じ場所に留まっていたら連れ戻される危険性が高かったからね。それで、この街にやってきた。その途中で、勇者と魔王が十六年前に結婚していた事を思い出した。その時にはもう二人の間に子供が生まれてた。その子が魔王様なんだよ。今思えば、上級悪魔達がわたし達家族の事を必要に追っていたのは、魔王と勇者の結婚報道があつたのとほぼ同じタイミングで、わたしのお母さんとお父さんが結ばれたからだと思う。勇者と魔王には対抗出来ないから、前代未聞なその出来事で募った苛立ちをわたし達にぶつけたんだ」

「……ルーテルは、俺の父さんと母さんを恨んでるのか？」

今の話を聞いている限り、イリヤ達とはつちりを受けたようなものじゃないか。そもその原因になった父さんと母さんを、恨んでいてもおかしくない。

しかし、俺の考えはイリヤが首を横に振った事で否定される。

「恨んでなんかないよ。魔王様のお父様もお母様も、お互いが好きだったから結ばれたただだもん。それを恨むなんてお門違いだよ。まあ、上級悪魔の奴らの事は殺したぐらい憎いけどね」

ふう、と息をついてイリヤは話を続ける。

「でね、わたしと同じ様な境遇の魔王様に会いたくて、この街を拠点として魔王様を探し回ってたの。王族の魔力を探知しようと頑張ってもみたけど、見つかるわけじゃないよね。だってその時はまだ、魔王様は地位を受け継いでいなかったんだもん。魔王様のお父様やお母様は上手く魔力を押さえ込んでいたし」

「……それで二日前、図書室で俺と会った時はリアクションがなかったのか」

「うん、その次の日に教室に入って、いきなり魔王様から魔力を感じたからビックリしたよ。まさか、同じ高校に魔王様がいるだなんて思わなかったから。運命をその時に強く感じた」

「なるほど、そういう経緯で今に至るといふわけか」

「そう、これがわたし、ルーテル・イリヤ・シュトレンベルグの人生」

話に聞き入っていた俺は、喉を潤す為に残った麦茶を飲み干す。冷たかった麦茶は、もうすっかり温くなっていた。

イリヤは頬を流れていた涙の跡を拭いながら、俺へと話しかける。

「今度は、わたしが魔王様に質問させてもらってもいい？」

「ああ、何でも聞いてくれ」

イリヤが俺に話してくれたように、俺も質問に答えよう。姿勢を正して、イリヤの質問を受ける体勢を整える。

そして、イリヤが俺へと質問をぶつけてきた。

「……魔王様は、自分の在り方に疑問を抱いたりしない？」

躊躇いがちに間を開けて放たれたその質問に、俺は首を傾げる。

「自分の在り方？　どういう事だよ」

宙で視線が合う。困った様な、悲しそうな、そんな感じの目をしていた。

「魔王様は勇者と魔王の間に出来た子で、勇者側からも魔王側から

も狙われてる。昨日戦った騎士も、魔王様の在り方は矛盾しているって言ってた。そんな風に言われて、魔王様は平気なの？」

「……………」

そういう事か。

イリヤが言いたいのは、ただ単純に言えば差別されてるのに辛くないのかという事だ。

メルティスは俺の存在が矛盾していると言った。勇者だけど、あいつは俺を勇者として見ていなかった。ただ、魔王側に対して優位に立てるよう、利用しようとしただけ。

イリヤほどに酷くないにしろ、俺はこれから戦う敵達にそうなじられ続ける事になる。辛く当たられた時、俺はどうやって対応するんだろう。

「俺は……………」

言葉を紡ごうとしたその時、身に何かが圧し掛かるような感覚に襲われた。この感覚は――。

「……………魔王様、これって」

イリヤも俺と同様に分かったらしい。間違いない。この感覚は魔力だ。

魔力を察知するのに慣れていない俺でも分かるほどに、その魔力量は多い。それに、微塵も隠すという気がないように思える。

「誘っているのか。俺達を」

立とうとした所を、イリヤが俺の手を掴んで制する。

「行かない方がいいよ。多分この魔力、上級悪魔だ」

イリヤの言葉は震えていた。表情こそ冷静を世覆っているけど、俺の手を握る力が強まる。

「魔王様の位置を把握していないから、誘きだそうとしてるんだと思う。わたしが学校で仕込んでおいた隠蔽術式が効いているみたい」
「お前、いつの間にそんな物を」

「あーんする時のついでにね。まだ制御が上手く出来ていない魔王様は、魔力を隠しきれないから」

「で、どうするんだ？ このままその上級悪魔を放っておくわけにもいかないだろ」

イリヤの話を聞いていると、上級悪魔には良い印象を持ってない。野放しにしていたら人を襲ったりするんじゃないかとさえ思う。

「そ、そうだけど、魔王様を危険に晒すわけにはいかないよ」

「自分の身ぐらい自分で守れるさ。お前は騎士と互角に戦える悪魔で、俺も仮に勇者で魔王。二対一ならこっちに分がある。それに、父さんや母さんの手を借りればまず相手に勝ち目はないだろ」

「……そうだね。分かったよ」

渋々といった様子でイリヤは了承する。せんべいを一枚かじって、俺とイリヤは自室を後にした。

上級悪魔

父さんと母さんに事情を説明して、俺らは家の外に出る。イリヤが家に来た時はまだ明るかった空も、既に暗くなっていた。そしてその空に、赤い点々の様なものが散らばっている。

「何だあれ？」

一見星が何かに見えるけど、それにしては光ってない。それに、段々こつちに近づいてきていないか？

隣にいた父さんが、その赤い点々を見て舌打ちをした。

「あれは、魔王側の者が操る使い魔だな」

「使い魔？」

「ああ、自らの血を媒体にこの世に顕現させる」

母さんやイリヤは、その言葉にこくりと頷く。

「ええ、しかもこの数を顕現させられるのだとしたらなかなか強いわね。上級悪魔辺りが妥当かしら」

話していると、赤い点々の内の一つがすぐ近くに来ていた。……つてあれ？　なんか結構可愛い？

くりくりとしたつぶらな瞳に、コンパスで描いたかのような丸い体。それが飛んでくる様子は、さながらボーリングのボールみたいだ。

「玲、危ない！」

俺の前に母さんが立ち、赤い魔方阵を出現させる。飛んできた使い魔は魔方阵にぶつかり、突如爆風を巻き起こした。

「ええ！？ こいつら爆発すんの！？」

つぶらな瞳で油断させておいて人を木っ端微塵にしようだなんて恐ろしい使い魔だな。やっぱり何に関しても見た目だけで判断しちゃいけないって事か。

「ルーテルちゃん、玲、あなた達は先に上級悪魔の元に向かって。この使い魔達は、私と剣君で処理するから」

「その役目は逆の方がいいんじゃないか？」

父さんと母さんなら、上級悪魔相手でも苦戦しないだろうし。

「それは無理だ。ルーテルさんと玲ではこの量を捌ききるのは難しい。それに、間違つて民家にあの使い魔をぶつけてしまったら、間違いなくその中の人間は死ぬ」

父さんは更に飛んできた使い魔を魔方阵で防ぎながら続ける。

「ルーテルさんがついているし、上級悪魔相手でも二人なら戦える。俺達も後から合流するから行ってくれ」

「分かった、この場は頼むよ」

魔力のある方向へ俺とイリヤは走る。その途中に頭の中で念じて、俺は勇者の姿に変わる。

続いてイリヤも悪魔の姿になった。身体能力の上昇した俺達は、人のいない道を飛ぶように駆ける。

「街の人達の姿がない。もしかして人払いを使ってるのか？」

「そうみたいだね。街中に人払いを発動するなんて、やっぱり相当な魔力量だ」

徐々に魔力に近づいていく。近づけば近づくほど、その魔力量の多さに驚かされる。

昨日戦ったメルティスを百とするなら、発せられているこの魔力量はおおよそ四百ぐらいといったところか。

「……そろそろだよ。気をつけて」

「ああ、分かってる」

空高く跳躍して、俺らが降り立った場所は巨大な空き地。確かここには大型のマンションが建てられる予定だった。

そんな広大な敷地の真ん中に、ぽつんと佇んでいる人物がいる。暗闇の中目が慣れてくると、そいつの外見が分かるようになってきた。

服装はまるで貴族を思わせるような物で、風に揺れる髪は燃え上がる炎のように赤い。

宵闇の中で輝く金色の瞳が俺らへと向けられた。

「おいおい、随分待たせてくれたじゃねえか。退屈だったから、思わず街中に使い魔ばら撒いちゃった」

「……こいつが、話に聞いていた純血派であり、上級悪魔か。楽しそうに笑みを浮べるそいつを見ると、何だか無性にムカついた。人の気分を害するような、そんな笑みだったからだ。」

「……まあ、少し待った甲斐があったわ。勇者で魔王な出来損ないだけを呼び寄せるつもりだったが、まさか人間と悪魔の間に生まれただけ出来損ないまでついてくるなんてよお！」

今の口ぶり、こいつ、イリヤの事を知ってるのか!?

隣を見ると、イリヤは赤髪の男を睨みつけている。そして、その男の名前を憎そうに言った。

「……カルマ・フィアーネル!」

次の瞬間、イリヤは手を前に突き出し、赤い魔方陣を出現させる。そこから放たれた赤い光の収束砲は、メルティス戦で見たものと同じだ。これなら、あのム力つく上級悪魔を吹っ飛ばせる!

「はっ。挨拶の代わりってか?」

なっ!? 収束砲を素手で弾いた!? 弾かれたその光の束は地面に触れるとマンションの建てられる予定の敷地に大きな穴を開ける。

「その程度の攻撃術式で俺を倒せるとでも思ったのか? だとしたらおめでたい奴だな。人間界で過ごしている内の脳みそが腐っちゃったんじゃないの?」

こちらに近づきながら、カルマは掌に黒い魔方陣を作り出す。夜の闇よりも黒いその魔方陣に、魔力が注がれていく。

「教えてやるよ。攻撃術式つつうのはなあ、こういうものの事を言うんだよお!」

掌から放たれた黒い光が、一直線上に向かってくる。俺は柄から剣を素早く抜き、瞬間的に剣へと魔力を注ぐ。青い輝きを纏った剣を前にかざして俺は黒い光を受け止めた。

「うつ……ぐうつ！」

踏ん張りを利かせようとするが、あまりにもその攻撃は強すぎた。足がズリズリと後退していく。駄目だ、受け止めきれない！

強引に弾くようにして黒い光の軌道を横にずらす。体の横をそれが通り過ぎていつて数秒後、遙か後方で轟音が響き渡った。

「かはは。良く受け流せました。流石に出来損ないでも、魔王と勇者の血を引いているだけはある」

「……魔王様を馬鹿にするな！」

疾風の如き速さでイリヤはカルマへと近づいていく。

「お、おいイリヤ！ 一人で突っ込んでいくな！」

単体でカルマと戦うのはあまりにも危険だ。さっきの黒い光を食らったりしたらもう戦えなくなる。

「腐った脳みそは血が上るのも早いみたいだな」

魔力の込められた正拳突きをイリヤは受け流して、カルマの顔面に向けて魔方阵を展開する。

「『サンダー・アウト！』」

魔方阵から膨大な量の稲妻が発生する。その一撃は、カルマをしっかりと捉えていた。

「よし！」

思わずガッツポーズ。今の攻撃は完全に通った筈だ。ゼロ距離から放たれた稲妻を交わす術なんてありはしない。

だけど、俺の考えはことごとく裏切られる。

「ははははははは！ 痛くも痒くもねえんだよ！」

立ち上がった砂煙を裂くようにカルマが現れる。収束しきつていた黒い光が、イリヤに向かって放たれた。

「くっ！」

寸前の所でかわし、イリヤは後退する。

「大丈夫か！？」

「うん、何とかね。でも、さっきの一撃は命中していた筈なのに……」

確かにしつかり命中していた。稲妻がカルマを捉えた所を俺はしつかりと目で見ている。

「ふん。確かにお前の一撃は俺を捉えていた。だがな、『サンダー・アウト』程度の術式じゃあ俺に傷つける事は出来やしねえぜ」

不敵な笑みを浮べて、ゆっくりと距離を詰めてくるカルマ。俺とイリヤは、自然と後ろに後退していた。

「……魔力遮断能力か」

「ご名答。まあ、それが分かったところで、お前らに勝機なんてもんはありやしないんだけどよお」

嘲りの視線を向けてくるカルマに、やはりムカムカしてならない。こいつは人をムカつかせるのが上手いな。

「イリヤ、その魔力遮断能力ってのはなんだ？」

「……一定の魔力量の攻撃を全て無効にする能力だよ。『サンダー・アウト』は上級術式だから、それが無効にされたという事は最上級術式でしかダメージが与えられない。かなり高レベルな魔力遮断能力だね」

「つまり、大抵の攻撃はあいつには通じないって事か？」

「そういうこと。最上級術式を使うにしても、かなりの魔力を消費する。一日に使える回数は一回が限界」

チャンスは一度きりって事か。それに対して、相手にはいくらでも攻撃の機会がある。不公平にも程があるぞ。

「なら、俺が接近戦であいつの注意を引く。その隙にルーテルは最上級術式の準備をしてくれ」

「分かった。気をつけてね、魔王様」

イリヤとハイタッチを交わして、俺はカルマのいる方向へと駆け出す。

「今度は魔王と勇者の出来損ないが相手をしてくれるのか？」

「出来損ない出来損ないって、うるさいんだよお前は！」

剣へと魔力を流し込み、青い光をその鋼に纏わせる。カルマとの距離は一瞬で埋まった。

「馬鹿かお前は？ 今説明されたばかりだろうが。俺には最上級術

式しか通用しねえ」

そんなの分かってる。だけど俺は注意を引いてるだけでいい。その間にイリヤが、最上級術式の準備をしてくれる。

放った斬撃をカルマが交わそうともしない。青い光を纏った剣はカルマを捉えたが、その体に傷を付ける事は出来ない。

「くそっ！」

「失敗作が。もうちょっと楽しませろ」

俺の周囲に黒い魔方阵が大量に出現した。

やばい！ そう本能が告げている。体を動かそうとした時には、もう遅かった。

「『ヘル・バースト』」

爆発。

黒い魔方阵が一瞬輝いたかと思えば、その瞬間に爆発が起きた。もちろん、周りを魔方阵で囲まれていた俺は駆け出して移動する事を許されなかった。

だから、俺は今空高くにいる。

勇者状態の俺の身体能力は飛躍的に上昇している。爆発の瞬間、俺は咄嗟に跳躍していたというわけだ。

おかげで爆風には巻き込まれなかった。だけど張り切ったからか、かなり高い所まで飛んできている。多分、建物八階相当の高さ。

（ひ、ひひひひひ！ 落ちるうつつうつつう！）

いくら勇者で魔王でも、重力には逆らえまい。

法則に従って体は自由落下を開始。地上にたどり着くのに、時間

はほとんど掛からなかった。

ゴッ！ と地面を強く踏みしめる音。いや、踏み砕くといった方が正しいか。

魔力を足に集中して俺は華麗に着地を決める。痛みは別料金で支払う事になった。すげえ足痛い。

「……ヘル・バーストをかわすなんてな。出来損ないにしちゃやるじゃねえか」

「そうやって見下してると、すぐに足元救われる事になるぜ？」

足が折れていない事を確認して、再び剣を構える。効かないと分かっている、無防備な状態というよりは遥かにマシだ。

「はっ。この俺がお前らに遅れを取る？ んな事あるわけねえだろ」
「どうか。どんな物事にも百パーセントなんてのは存在しないもんだ」

それをこれから、お前に教えてやる。

「イリヤ！」

「うん、準備万端だよ！」

上を見ると、こちらに手を振るイリヤの姿が見える。その傍に展開されてる魔方阵の大きさは、今ここにいる敷地の三分の一を占めるほどの大きさだった。

「『ボルテック・ブレイカー！』カウントスリー、ツー」

「な、なにっ！？」

驚愕の表情を浮べるカルマ。そりゃそうだ。気づいたら自分の遥か頭上に巨大な魔方阵が出来てるんだ。誰だって驚くさ。

ん？ このままだとお前も巻き込まれる？ その心配はない。手は打ってある。

「空間移動術式、発動！」

俺の掌に刻まれた魔方陣が輝きを放つ。次の瞬間、景色が一変した。

暗かった周りの景色は白一色に。体を包むこの浮遊感は、メルテイスに空間移動術式をされた時と同じだ。

さっきのハイタッチの際、俺はイリヤにこの空間移動術式を施してもらった。どういう意図があったのかさっきまで分からなかったけど、あの巨大な魔方陣を見てピンときた。これを使って、攻撃範囲から脱出しろって事だったんだな。

浮遊感が徐々になくなっていく。そして次の瞬間には、乱暴に体がどこかにぶつけられた。

「痛つてえ！」

白一色だった視界が元に戻っていく。景色が見えるようになってきた時、イリヤのカウントが耳に響いた。

「ワン、ゼロ！」

直後、空から滝のように光が降り注ぐ。

何千羽もの鳥が同時に鳴いたかのような凄まじい音と共に、地面は根こそぎ抉られていく。あまりの光の奔流に、俺は思わず目を細めた。

かわすとか、そういうレベルの話じゃない。

これが最上級術式。魔力遮断能力でさえ防ぎきれない最強の攻撃手段。

……個人的な意見を言わせてもらえるなら、この術式一つで戦争だつて終わらせる事が出来るんじゃないか？

安全圏だから落ち着いていられるけど、あれを喰らう側の立場なら、きつともう何も考えていられない。つつか死ぬ！

神々しいとさえ思えてくる光の奔流は、その勢いをゆつくりと穏やかにしていく。

夜を朝の様に照らしていたその光は、十数秒後には消えてなくなった。

「魔王様〜！ 大丈夫〜？」

上空からこちらへと向かってくる声の主に、俺は返答を返す。

「ああ、大丈夫だよ」

移動術式がなかったら巻き込まれてただろうけどな。 齡十六歳であの世行きだけは勘弁してほしい。

スタンツ、と綺麗に着地して、イリヤは俺の方に歩み寄る。

「そつちこそ大丈夫か？ すごい汗だぞ？」

「あはは。 最上級術式を使うと、流石のわたしでも少し疲れちゃうんだよ」

確かに笑みを浮べているその表情の中には疲労の色も見取れる。大量の魔力消費は肉体に負荷を掛けるみたいだな。

「でも、多少の疲労であいつを殺せたなら十分だよ」

「……なあ、お前はカルマの知り合いだったのか？ あいつもお前の事を知っているみたいだったし」

イリヤは笑みを消して、もくもくと煙の立つ方向——カルマが最

上級術式を食らった場所を見つめる。

「……そりゃ知ってるよ。あいつはわたし達家族を襲ってきた七人の上級悪魔の一人だもん」

「……………」

だから、あんなに凄い剣幕で向かっていったのか。

「あの時からわたしの事を見下してた。出来損ない。欠陥品。失敗作。会う度にそう言ってくるカルマの事が、わたしは大嫌いだった。まあ、今回は最上級術式でその仮を返したって事になるね。これでわたしは過去と決別出来るよ」

イリヤは笑った。一見いつも通りの笑顔に見えるが、短いながら一緒にいる俺には、その笑顔が心から笑っているものではないと理解出来る。

決別出来る。そう思い込もうとしているように見える笑顔だった。確かにカルマは倒した。でも、それで過去がなくなるわけじゃない。

イリヤが求めていたのは、差別をしてきた相手への復習なのか？ そうじゃない。違うと分かっているから、イリヤも心から笑えていないんだ。

俺は何て声を掛けるべきなんだろう？ イリヤは一体何を求めている？

「さ、帰ろ、魔王様。お部屋に戻って今度は恋バナでもしようよ」「イリヤ……………」

何を言えばいいか分からず、仕方なくイリヤの後をついて行くとした時、
ドンッ！

「な、なんだ!？」

音のした方向は、さっきまで俺達が見ていた方向。イリヤのボルト・ブレイカーが降り注いだ場所からだった。

決意の先に

「おいおい、てめえら、この俺が死んだとも思ったのかあ？」

立ち込める煙の中から現れたのはカルマだった。あの一撃を食らって生きていられるものなのかよ！？

「あ、ありえない。ボルテック・ブレイカーを食らって、まだ立っていられるなんて！？」

「はんっ、俺だつてあんな技をまともに食らってりゃ死んでるわ」

汚れた服を手で叩きながらカルマは言う。ところどころ服が破けていて、腕や足からは血が流れていた。その程度の傷で済んでいる事が俺には信じられない。

「じゃあどうして？」

驚愕しているイリヤを馬鹿にするかのように鼻で笑い、カルマは質問に答えた。

「お前の攻撃を喰らう直前に魔力遮断能力を消して、その能力に注ぎ込んでいた分の魔力を真正面からぶつけた。流石に相殺とまではいかなかったけどよお、てめえの最上級術式の威力を半減させるには十分だ」

「……………」

ギリッ、とイリヤは歯を軋ませる。

カルマは生きている。戦いはまだ終わっていない。

「……けど、これでお前は魔力遮断能力を失った。わたし達の攻撃はお前に通るようになったという事だね」

確かに。さっきの一撃で倒せはしなかったものの、俺らの攻撃が通るようになる。それなら数で勝る俺らが有利だ。

「だからどうした？ お前ら程度、魔力遮断能力がなくても負けねえよ」

いちいち癪に障る物言いをする奴だな。思わず握っている剣の柄に力がこもる。

「……まあ、仮にも元上級悪魔と勇者と魔王の子孫だからな。手を抜かずに潰してやるから光栄に思え」

カルマがそう言った瞬間、奴の体からオーラの様なものが迸る。あれは魔力みたいだな。

その魔力の絶対値がどんどん上昇していく。ただでさえ強大だったその魔力が今はそれよりも更に高まった。

……おいおい、父さんや母さんの魔力と大差ない量だ。さっきの二倍はある。

「おかしい。昔のあいつからはこれほどの魔力量を感じなかったのに」

溢れ出る魔力で吹き荒れる風に髪をなびかせながら、イリヤは疑問を口にした。

「昔の俺とは違えんだよ。リミッターを外した今、万が一にもてめえらの勝ちはなくなっただぜ」

「そんなの、やってみないと分からないだろうが」

俺は一步前に出て、上段に剣を構える。

「はは、威勢のいい野郎だな。じゃあ少し戯れてみるか？ そうすれば実力差が分かる——」

距離が一瞬で詰められた。まるで最初からそこにいたかのように、カルマは俺とイリヤの前に姿を現す。

「だろっ！」

言葉が発せられると同時に、回し蹴りが放たれる。

俺は咄嗟に剣でそれを防ぐ。

魔力が込められてやがる！ 受け止めるのが精一杯だ！

威力はさっき放ってきた黒い光と大差ない。それを蹴りで何発も放てるという事は……。

「オラオラオラア！ どうしたよ？ 反撃ぐらいしてみろお！」

魔力の余波が大地を削る。受け止めているのに、その余波が俺の体に少しずつダメージを蓄積させてくる。

防いでばかりじゃもたない！ どうにかして反撃しねえと！

「『サンダー・アウト！』」

横合いから雷が放たれる。イリヤがサポートに入ってくれた。

「その程度の術式、なんともねえんだよ！」

片手でそれを受け止めて、カルマは不敵な笑みを浮べた。気に入らない奴をいじめている時に浮べる愉悦の様な笑み。だけど、そんな笑みはすぐに崩してやる！

「うおおおおおおおっ！」

イリヤのサンダー・アウトによって生じたカルマの隙を突くように、俺は剣に魔力を流し込む。

魔力遮断能力の無くなった今のあいつになら、この攻撃は通る筈だ。

斬撃をカルマの懐へと打ち込もうと刃を動かす。もらった！

「甘えんだよ三下があ！」

空いていたもう片方の手で、あろう事がカルマは俺の剣を受け止めた。

……おいおい、真剣白刃取りは両手でやるものだろ！？ 片手でやるとか反則だ！

「それでも食らえ！ 『ヘル・バースト！』」

足元にはいつの間にか黒い魔方陣が大量に展開されていた。

剣を握られていて、逃げるタイミングが一瞬遅れた。飛ばうとした時には――

ドォン！

体中に強烈な痛みが走って、視界がチカチカと白、黒、白、黒と交互に色を変えた。

「魔王様ああああ！」

イリヤの声も遠く感じる。多分、意識を失いかけてるんだ。

消えそうになる意識を持ち直そうと歯を食いしばる。沈みかけた意識は何とか途切れるずに済んだ。

「……ぐ、うう」

だけど、体の痛みが引いたわけじゃない。

節々の痛む身体を起こそうとすると体中が悲鳴を上げる。動く事を拒んでいるかのように体が重い。

「ま、魔王様、大丈夫！？　すぐに手当てしないと――」

「んな時間取らせるわけねえだろうが」

黒い瞬きが視界に入る。

次の瞬間、俺の体は浮遊感に襲われた。イリヤが俺を抱えて上に飛んだらしい。

下の方からは轟音。ぼやける視界と、聞こえてくる音だけが今の俺の情報元だった。

泣きそうな顔をしているイリヤの顔が写る。

そんな悲しそうな顔をしないでくれ。俺は全然大丈夫だから。

そう言いたいのに、体が上手く機能してくれない。口はパクパクと空気中の酸素を吸うだけで、伝えたい言葉をイリヤに届けてくれなかった。

おぼろげだった意識がはつきりし出したのは、しばらく時間が経ってからの事だった。

「……ここは？」

どこかの駐車場みたいだ。何台か車が止まっているけど辺りに人

の気配はない。

「魔王様！ 意識が戻ったんだね！ 良かったあ！」

ぐええ！ 横からいきなり首を絞められた。顔をスライドすると、イリヤが俺の首に手を回していた。

「……俺、意識を落としたのか？」

「そうだよ。ぐったりしてて、呼びかけても反応しないんだもん」

意識はずっとあるもんだと思ってたけど、言われてみればどうしてこんな場所にいるのか分からない。

「良かった。本当に良かった。すんごい心配したんだから」

首に回されていた腕が腰に落ち、強く体を抱き締められる。普段の俺なら色々と変な妄想をしていたかもしれないけど、今はとてもそんな気分じゃない。

それに、イリヤの肩は震えていた。嗚咽を堪えるように小さく、小刻みに。

「……………ごめん」

そつと俺もイリヤを抱き締める。その体は華奢で、強く抱き締めたら壊れてしまうのではないかと思った。

「なあ、カルマとはあの後どうなったんだ？ 倒せてはいないんだろ？」

記憶の断片を辿っていくと、カルマの攻撃を交わして俺はイリヤに運ばれた。だから多分、俺らは一旦カルマから離れたんだろう。

「……うん、あいつはまだあの空き地にいる。余裕ぶって今は待機してるみたいだけど、そろそろわたし達を探そうとしている頃かもしれない」

「そっか。なら、戦う準備をしないと……痛っ！」

立ち上がろうとするとズキツと体が痛んだ。よく見ると俺、勇者の姿じゃなくなってる。

「無理しちゃ駄目だよ！ 勇者化が解けてしまつぐらいダメージを食らってるんだから！」

押さえ込み、イリヤは俺の体を横にする。

「でも、このままじゃカルマが」

「大丈夫。あいつはわたし一人で倒してくるから、魔王様はそこで待ってて」

「な、何言ってるんだよ！ お前一人でカルマと戦うなんて危険過ぎるだろ！」

二対一でなんとか戦える程の強さなんだぞ。あまりにも無謀だ。

「それは承知の上だよ。承知した上で、わたしは一人でカルマと戦うよ。これ以上、魔王様に傷ついてほしくないもん」

「俺の事はどうでもいい！ 少し休んだら、俺もすぐに戦えるようになる——」

「どうでもいいわけない！」

いきなりの大声に体が反射でビクツとした。怒りで顔を赤く染めたイリヤが、俺の事を見下ろしている。

「魔王様と知り合ってからの数日間、わたしはとっても楽しかった！ 図書室で話したり、一緒に騎士と戦ったり、魔王様の家におじやましたり……今まで過ごしてきた日々の中で、この数日間が一番楽しい時間だったの！ それは魔王様、あなたという人がいたからなんだよ！ ……わたしは、そんな大事な人をこれ以上傷つけたくない！」

立ち上がり、イリヤは俺の傍から離れていく。

「だから、わたし一人で戦う。もう大事な人を失ったりしたくないの」

確固たる意思の込められた言葉。それを聞いて、俺は何も言う事が出来なかった。

納得したんだと勘違いしたように、イリヤは優しく笑う。

「安心して。絶対にわたしは戻ってくるから」

そう言ってイリヤは駐車場を駆けていく。足音がアスファルトに響き渡り、どんどん遠ざかっていった。

……何やってるんだよ俺。早く追いかけないと！

痛む体を無理矢理起こして、立ち上がろうと手を床につく。コンクリートは夏だというのに冷え切っていた。

『安心して。絶対にわたしは戻ってくるから』

イリヤ。確かにお前は強いよ。メルティスと戦っている時のお前を見て、俺はすごいとずっと思っていた。

片手で攻撃弾いたり、戦争を終わらせてしまいそんな術式を使ったり。

そんなお前なら、もしかしたら一人でカルマに勝てるかもしれない。そう思わないくもないんだ。

でもさ、じゃあ何でお前は寂しそうな顔をしていたんだ？

『安心して。絶対にわたしは戻ってくるから』

そう言っておいて、もし戻ってこなかったらと思うと怖くなる。

イリヤ。お前はこの数日間が楽しかったって言ったよな。俺も楽しかったよ。無理矢理魔王の姿にさせられたり、クラスの奴等にお前との関係を誤解されたりはしたけど、お前と会うまでの日々に比べたらすごい楽しかった。

だから、俺もお前にはいなくなつてほしくないんだよ！

立ち上がると体がフラついた。膝に手をついてから体勢を立て直す。

走ろうとしたら転んだ。何とか手で受身を取って衝撃を吸収する。

……くそ、早くイリヤの所に行かないと。

そう思っても体は正直だった。蓄積されたダメージは大きいらしく、もう起き上がるのも一杯一杯だ。

それでも何とか立ち上がる。走るのをやめて、一步一步前に進む事に集中した。

五分掛けて外に出ると、轟音がどこからか聞こえた。

カルマと戦っていた空き地の傍には大きなデパートがある。俺が今いる場所は、そのデパートの前だ。

これなら、空き地に行くのにあまり時間は掛からない。

とは言っても、今の俺はゆっくり歩く事しかできない。走れば五分の道のりも、今の俺なら十数分掛かるだろう。

その間に、戦いが終わってしまうかもしれない。

イリヤの勝利なら、なんだよ俺の出番がねえじゃんかと冗談を言ったり出来るけど、カルマの勝利だったなら、何も出来なかった自分を俺は一生呪うだろう。

後悔とか恨みとか、そんな暗い感情を抱えながら生きるなんて、俺は絶対に嫌だ！

もつれる足を無理に動かして前に進む。それでも歩く速度は普段よりも遅い。

大規模な人払いが発動しているこの街の中を歩いているのは俺一人だけ。まるで世界中の人間がいなくなってしまったかのような錯覚に陥る。

肉体的にも精神的にも、結構ギリギリだなこりゃ。

歩くのも精一杯だし、時々フラツとする。

こんな状態の俺が行った所で、ただ足手まといになるだけなんじゃないか？

一瞬そんな考えが頭を過ぎる。

もし俺がイリヤと合流したら、怪我人である俺をカルマは攻撃してくるだろう。となると、イリヤは俺を守りながら戦わないといけなくなる。

思考と共に歩みがだんだん遅くなっていく。止まるつもりなんてサラサラないのに、勝手に足は動きを止めた。

「……俺は、どうするべきなんだろう」

足手まといになるのを覚悟の上で戦場に向かうか、それともイリヤを信じてさっきの駐車場で待つか。

……この二択から選ぶなら、俺はこっちを選ばせてもらう！

「自分が後悔するような選択だけはしたくない！」

足手まといになるのを覚悟で俺も戦場に行く。そして俺も戦う。確かに体はボロボロだ。でも、魔力はまだ残ってる。

つつかさ、俺はイリヤに守られてばかりなんだよ。メルティスの時も、カルマの時も、あいつが俺の代わりに戦っている。

どっちの敵も俺を狙ってきていたのに。

それに、あいつは俺が魔王だから戦ってくれてるんじゃない。イリヤは、弱い彩文玲を守るために戦ってくれていたんだ。

なら、今度は俺がイリヤを守る番だ。

勇者で魔王。そんな怖いもの無しの地位を受け継いでいる俺なら、多少の無茶はどうにかなると思う。

無茶を承知でやってみよう。体の奥底に眠る、全魔力の解放を。

魔力開放

痛みを堪えながら進むこと十分、俺は空き地に戻ってきた。

綺麗に整備されていた地面はメルティス戦の時同様、グラウンドキヤ二オンのような有様になっている。

……二度目となるとあまり驚かない。人間の慣れって恐ろしい。

「死に損ないが今さら戻ってきやがったか」

段差の関係でカルマが俺を上から見下ろす。その傍には、傷だらけになったイリヤの姿があった。

「ま、魔王様！？ どうしてここに戻ってきたの！？」

直後にイリヤは顔をしかめる。傷が痛むんだろうな。

痛みに表情を歪めながら、イリヤは続ける。

「ただでさえボロボロなのに、どうして戦場に戻ってきたの！ これ以上戦ったら死んじゃうかもしれないんだよ！？」

「……そうだな。このままじゃ多分、反撃も出来ないだろうな」

「じゃあどうして！」

理由なんて単純だ。俺はただ、

「後悔したくない。何もしないで最悪な未来を向かえる事になるくらいなら、俺は死ぬかもしれないなくても戦ってやる！」

元より、戦いなんて実際死ぬか生きるかだ。

「ふーん、じゃあ早速死んでくれ」

上の段から飛び掛るようにカルマが迫る。人が会話をしている最中だつてのに、空気の読めない奴だ。

「誤解するなよ。俺は死ぬかもしれないって言っただけで、死ぬ気自体はサラサラない！」

奥底に眠る魔力を、一気に放出するイメージ。それが具体的なものになった時、内側から力が溢れ出してきた。

飛び掛ってきたカルマに向けて俺は掌をかざした。そこに展開されるのは幾百もの魔方陣。何色もの魔方陣から大量の光が放出される。

「なっ——！？」

驚きの声を上げたカルマは、咄嗟に魔方陣を出現させた。瞬間、あいつの姿が消える。空間移動術式だ。

上へと放たれた光の束は寸前でカルマを捉えられず、空に向かって飛んでいく。

奇襲には奇襲をと思って放った一撃を交わすなんて、流石上級悪魔だ。

「……お前、その悪趣味な格好は一体なんなんだ？」

横の方から声が聞こえた。見ると、十数メートル先にカルマの姿が確認出来る。

「……格好の事はあまり触れないでほしかったな」

今の俺の格好は黒ドレスの適所に鎧を纏ったような格好だ。更に簡単に説明するなら、勇者と魔王の格好が合わさったような感じ。これが俺の全魔力解放状態。ざっとその魔力総量はリミッターを外したカルマの二倍ぐらいだ。

正直、負ける気がしない。そう思えるほどに体の内側から力が溢れてくる。

「まあ、格好は何であれ、これでお前を倒せるなら構わないさ」

「魔力量が上がった程度で調子に乗ってんじゃねえぞ！」

電光石火。そう表現するのがしっくりくる動きだった。

十数メートルという距離を一瞬で縮め、魔力を込められた手刀が俺の首目掛けて飛んでくる。

「なにっ!？」

だけど、今の俺にはその動きが止まって見えるぜ。

手刀を片手で受け止められたカルマは驚愕の声を上げる。

「次はこっちの番だ」

掌に魔方陣を作り出し、そこから剣を出現させる。

逃げようとするカルマの片手を離さず、俺は剣を振りぬいた。

「がああああああああ！」

斬撃から生まれた衝撃波でカルマは後方へと吹き飛ばされる。

魔力も込めない斬撃でここまでの威力を出せるなんてな。全魔力解放状態恐るべし。

「……この、半端者がああああああ！」

雄叫びと共に放たれたのは黒い光。まっすぐに向かってくるその攻撃は、まともに受ければ致命傷を避けられない。

「一度やってみたかったんだよな、これ」

目前に迫った黒い光を、俺は拳で横に払う。

軌道が横にずれ、地形が変わった事で出来上がった段差に衝突する。ガラガラと音を立てて、その段差は崩れ落ちた。

……拳で攻撃を弾くのはこれで最後にしよう。ちょっと痛かった。

「ふざけやがって！ この俺が、どうしててめえみたいな出来損ないに遅れを取る事になってやがんだ！」

今度は地面に魔方陣が出現した。さっきまともに食らったヘル・バーストという攻撃手段だな。

「はあっ！」

地面に向かって剣を振り下ろす。地面は砕け、出現した魔方陣も粉々になった。

「……カルマ、お前は俺達を出来損ないと言っているが、何を持って俺らを出来損ないと評価するんだ？」

ギリリとこちらを睨みつけて、カルマは自分の手元に魔方陣を出現させる。

「てめえの場合は俺ら悪魔の敵である勇者の血を引いてる。魔王の

地位を継ぐ人間に、そんな汚らしい血が流れていていいわけがねえ！ そっちの女もそうだ。人間なんて下等生物との間に生まれた悪魔を蔑むのは当然だろうが！」

言葉が終わると同時に黒い光が放たれる。

俺は剣に魔力を流し込み、向かってくる黒い光を剣で弾き返した。

「！？」

その弾かれた攻撃は見事にカルマにクリーンヒット。今の野球で例えるならまさにピッチャー返し。

俺は戦いを見ているイリヤの方に向いて、一言発する。

「さっき部屋で俺の在り方について聞いたよな？ 今からそれを教えるよ」

そして、呻くカルマの元に俺は歩みを進めた。

「誰の方が地位が低いとか、誰の方が優れてるとか、そんなの関係ないだろ。俺らは記号じゃない。俺は彩文玲っていう存在だ。イリヤはイリヤっていうただ一人の存在だ。それを出来損ないと評価するお前を、俺は絶対に許さない！」

今まで出来損ないって言った分、この一撃で返させてもらう！

左手で指を弾いた。夜の空き地にパチンと高い音が響く。

膝についているカルマの手足に魔方阵が現れる。

「こ、拘束術式だ！？」

「ああ、昨日戦った奴の拘束術式を見よう見真似でやってみた」

どうにかして動こうとカルマはもがく。

俺も昨日やられたけど、拘束術式はすぐには解除出来ない。魔力を消耗する分、その拘束力はメルティスのお墨付きだ。

これなら攻撃は外さない。全力の攻撃をカルマに食らわせる事が出来る。

掌を前にかざし、魔力を込める。目の前にゆっくりと巨大な魔方陣が形成されていく。

「この、くそやろうがああああ！」

そうカルマが叫んだ時、魔方陣の形成は終了した。

高速で魔方陣に光が集められていく。そこに小さな太陽があるかのような光に、暗い夜の空き地が昼間みたく明るくなる。

「これが、今までお前が蔑んできた人の痛みだ！」

光が放たれる。

巨大な光の束は俺の視界を全て白に染める。

鼓膜を支配するのは轟音。その中に、微かにカルマの叫び声が聞こえた気がした。

何秒か、それとも何十秒なのか分からない。気づいた時には攻撃が収まっていた。

白かった視界も落ち着いてきて、夜の景色が目に入る。

変わり果てた空き地の姿。俺の放った攻撃は空き地の端まで大地を削り取っていた。

「……終わったんだな。これで」

カルマの姿はない。魔力も感じられない。そして辺りに訪れた静寂が戦いの終わりを告げている。

…… ああ、安心したら意識が遠退いてきた。

イリヤにお礼を言ったり、父さん、母さんと合流したり、やるべき事はまだあるんだけどな。

脳が意識のリセットを求めている。疲れた体は休みが欲しいと訴えてくる。

身体は素直だな。そう思いながら、俺は暗闇に意識を落とした。

在るべき理由

次の日、俺は学校を欠席した。

全魔力解放状態はゲームでいうならチートみたいな力を得られるわけだが、強大な力を得るのにはリスクが付いて回るみたいで。

「……あー、体が痛い」

体中が石化したみたいだ。ベッドから体を起こそうにもその体が動いてくれない。

よって欠席。これでまた単位が少し危うくなった。

まあ、昨日頑張った分、今日一日ぐらい休ませてくれたって構わないよな。

父さんと母さんが使い魔を排除して空き地に来てくれた時、俺は既に気を失っていたらしい。

そのまま家に運ばれてベッドに寝かされ、起きたら体中が石化したかのように動かなくなっていたというわけだ。

今の時刻は夕方の四時十二分。俺が起きたのは十二時ぐらいだったんだけど、何せ体を起こせないからずっと寝たきり状態。今の俺に出来る事があるとすれば、それは天井をずっと見上げている事ぐらいだ。

寝たきりの老人とかは毎日こんな風に生活しているのか。さぞ暇に違いない。

「はあ」

思わず溜息をつく。

それからしばらくボーっとしていると、部屋の扉が開けられる音がした。

「玲、お取り込み中だったりする？」

「こんな状態で何に取り組めばいいか教えてくれ」

扉から顔を覗かせたのは母さんだ。二時間前ぐらいには父さんが来たつけ。

「ふふ、元氣そうで良かったわ」

「いや、ベッドから起きれないのに果たして元氣と言ってもいいのかな？」

ただの風邪とかよりもよっぽどひどいと思うんだけど。

「まあ、上級悪魔をともに相手取ってその程度で済んでいるのだからいいんじゃないかしら。それに会話だって出来ているわけだし」
「……そう言われるとマシに感じなくもない」

カルマの攻撃を食らった時は死ぬかと思ったからな。

「あと、ルーテルちゃんがお見舞いに来てくれるのだけど、ここへ通してもいいかしら？」

「ルーテルが？ うん、いいよ」

俺の返事を聞くと、嬉しそうに母さんは部屋から出て行った。しばらくすると、扉の影からひよこつとイリヤが顔を覗かせた。

「ルーテルは今日学校に行ったのか？」

イリヤは制服姿だった。昨日の戦いで怪我とか負っていなかったっけ？

「うん。わたしの傷は一日安静にしていれば治る程度のものだったからね。それよりも……」

こちらを見るイリヤの目はとても心配そうだ。俺はイリヤを安心させようと笑みを浮べる。

「俺の事なら大丈夫だよ。しばらく安静にしていれば体は動くようになるだろうさ。それにしても、全魔力解放状態は我ながらすごい強さだったな」

「うん、わたしの出る幕がないくらい、強かった」

そう言うイリヤの表情は複雑そうだ。

「……自分の手でカルマを殺せなかったのが悔しかったりする？」
「……うん、ちょっと」

ベッドの淵に腰掛けて、イリヤは眉に皺を寄せる。

「お父さんを殺して、お母さんを半殺しにして、わたしと魔王様を侮辱したあいつを、わたしの手で殺してやりたかった。わたしの大事なものに傷をつけていくあいつがわたしは許せなかった」

ふっと息をついて、イリヤはこちらに視線を向けた。

「でも、殺しても気分は晴れなかったと思う」
「どうして？」

「だって、カルマを自分の手で殺しても、付けられた傷が癒えるわけではないでしょ」

悲しみの色が滲み始めた瞳に、雫が少しずつ溜まっていく。

「……わたしは、一体何がしたかったのかな」

憎かった相手を殺したとしても報われないという矛盾。それとても残酷な事かもしれない。

だってそれは、恨んだりしたって意味がないという事なのだから。恨んだり憎んだり、その果てにそいつを殺しても報われない。じゃあ、イリヤはどうやったって報われないのか？

いや、違うな。イリヤが報われる方法なんて簡単だ。

俺は部屋を包む沈黙を破る。

「誰かに認められたかったんじゃないのか？」

イリヤの俯きかけていた顔が上がる。金色の髪が小さく揺れた。

「人間と悪魔の間に生まれた存在としてじゃなく、ルーテル・イリヤ・シュトレンベルグっていう一人の存在として認められたかっただけなんじゃないか？」

「……………」

「もしそうなら、お前はもう色々な人に認められてるよ。クラスメイトや海斗、すずは、俺の両親。もうお前はみんなから認められている」

昨日部屋でイリヤが過去を語ろうとしてくれた時、俺だから話すと言われて安堵していた理由が分かった。

認めていてくれたからだ。魔王としてではなく、彩文玲として見てくれている事が嬉しかったから。

「……………本当に？」

「ああ。それに俺だってそうだよ。ルーテルが悪魔だろうとなんだろうと、今はずっと仲良くしたいと思ってる。それに、もしかた上級悪魔が来てお前の事を侮辱したら、俺が全力で叩きのめしてやるから」

何だか言つてて照れ臭くなってきた。ええい！　ここまでできたと言いたい事全部言っちゃえ！

「だから、これからもずっと俺の傍にいてくれ」
「……………」

イリヤは何も言わない。瞳からは涙がポタポタと零れ出す。もしかして、俺の言っている事って検討外れな事だったりしたのかな？

不安にかられていると、不意に胸元に何かが圧し掛かってくる感覚があった。

「…………ルーテル？」

俺の寝巻きをきゅっと掴んで、顔を埋めながらイリヤは呟く。

「…………ありがとう、魔王様」

そして、イリヤは大声で泣き出した。今まで我慢していた色々な感情を放出するように。

俺の体が万全になるのに一週間掛かった。
久し振りに学校に来たわけだがものすごい暑い。家でクーラーをガンガンつけていたせいもあってか蒸し焼きにされている気分だ。

そういえば、あの日以降イリヤと会ってないな。どうしたんだろ
う？

そんなちよつとした疑問を覚えつつ俺は階段を登る。あつという
間に階段を登り終え、俺は一週間振りの教室に入った。

教室に入ると、知り合いの男子が何人か声を掛けてくれた。こう
いう気遣いは素直に嬉しい。

席に座る前にイリヤの姿を探す。おっ、いたいた。

「よう、久し振りだな、イリヤ」

「！ ま、魔王様！？ お、おおおおはよう」

急な挨拶に驚いたのか呂律が回っていない。

「もう体は大丈夫なの？」

「ああ、もうバッチリ。ただ、この夏の暑さだけは勘弁してほしい
けどな」

「そ、そうだね」

？ 何か様子が変わだな。ほんのり頬が桜色だし、熱でもあるのだ
ろうか？

「ね、ねえ彩文君。一週間前にわたしに言つた事、覚えてる？」

彩文君という呼ばれ方に多少違和感を覚える。あ、学校ではそん
な風に呼ばれていたんだっけ。

「ん？ 一体どの事だ？」

結構色々言っていたから、指定してもらわないと分からん。

「お、おおお俺の傍にいてくれて言葉だよっ」

「ん、ああ、覚えてるよ」

「あ、あれは嘘偽りのない心からの言葉なんだよね？」

「ああ、間違いなく嘘偽りのない言葉だ」

「そ、そっかあ。ならこれは成立するね。わたしすごい幸せだなあ」

モジモジしながらはにかむイリヤ。すっと差し出された紙にはこう書かれていた。

結婚届。

……………。

「……………け、結婚届えええええ！？」

何がどうしてそうなった！

周りの奴らの視線が一気にこちらへ向く。

「うん、一週間前の彩文君のプロポーズに応える事にしました！不束者ですが、よろしく願います！」

俺は自分の言った言葉を頭の中で再生する。

『これからずっと俺の傍にいてくれ』

……確かにプロポーズに思えなくもない言葉だな。だけど、俺はそんなつもりで言ったわけじゃないのに！日本語って難しいな！
つつか俺は十六歳じゃ結婚出来ないよ！

異議を申し立てようとした時、教室の扉がガラリと開いた。

「れ、玲君！ 金城さんにプロポーズしたのって本当なの！？」

すごい形相のすずはさん登場。おいおい、隣のクラスへの伝達が早すぎるだろ！

「いや、あの、それはだな」

「うん、そくだよ空宮さん。わたし達は結婚するの！」

頬を赤らめながら俺の腕を取るイリヤ。待て！ これじゃあ収集がつかなくなる！

「彩文、残念だ。お前は俺を裏切らないと思っていたのに」

「ふははははは！ 貴様に地獄を見せてやろう！」

「イリヤ親衛隊。ただちに戦闘配備につけ！」

「……れ、玲君の馬鹿ああああああ！」

クラスの奴ら＋すずはが俺らに向かって走ってくる。ひひひひひひいっ、このままじゃ殺される！

「イリヤ！ とりあえずこの場から逃げるぞ！」

「うん！」

久し振りの学校復帰は鬼ごっこから始まる事になった。

一難去ってまた一難。勇者と魔王の地位を継承した俺の人生に安息はあるんだろうか？

今後の将来に不安を感じながら、俺はイリヤの手を引いて走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3598x/>

彩文玲は勇者で魔王！

2011年10月19日23時16分発行